
ゴーストウォーズ 超生命体トランスフォーマー

菊一文字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゴーストウォーズ 超生命体トランスフォーマー

【Nコード】

N75790

【作者名】

菊一文字

【あらすじ】

サイバトロンとデストロン、超生命体トランスフォーマー達が、迷い込んでしまった魔界を舞台に壮絶な(?)戦いを繰り広げる！

プロローグ（前書き）

初の二次創作、トランスフォーマーに挑戦です。作者はCGベース
トウオーズシリーズしか見てないので、設定に矛盾があるかもしれ
ませんが、暖かく見守ってほしいです。

プロローグ

広大な宇宙の片隅で、二隻の宇宙船が追いつ追われつ撃ち合いを展開している。

追われる側の船内

「しつこい連中だな、早く落としてしまえ！メガキャノンのチャージを始める」

「了解！」

「おのれサイバトロン……どこまでも邪魔をしておって……」

追う側の船内

「くそ、奴らの攻撃のせいで追いつらいぜ！どうする！」

「少々手荒だが、こちらも本気でいくしかない！全ての砲台を出して連射し、デストロン船を牽制しろ！」

サイバトロンとデストロン……遠い星セイバートロン星で生まれた二種類のトランスフォーマーは、はるか昔から衝突し戦いの歴史を重ねてきた。

その果てに結ばれた協定により一時は手を携えた両軍であったが、サイバトロンの勝利、平和主義などに納得いかない反乱者もいた。

ある時、初代破壊大帝メガトロンの後継者を名乗るトランスフォーマーが、ゴールドエンディスクを盗み出す事件が勃発した。

サイバトロンの探査船アクサロンの部隊がこれを追跡するも、時空をワープした彼らの行方は不明。

この事件を切り口に、セイバートロン星内でデストロンのクーデターがしばしば勃発。ほとんどは取り締まられたが、それを掻い潜っ

たデストロン達がセイバートロン星外へ逃亡した。

デストロン船内

「それが私達という訳だ、お分かりかね」

「あの一…誰に言ってるんです？」

「バカモノ！読者の方々に決まってるだろう！それより、サイバトロンの連中の手数が増えてきている、メガキャノンのチャージはまだか！」

「たった今完了しました！」

「よし、撃てエー！」

サイバートロン船

「おい、奴らのでかい砲台がこっち向いてるぞー！」

「まずい、前面にシールド全開！回避しろ！」

サイバトロン船がシールドを展開した瞬間、デストロン船の砲台から太い光線が放たれた。

サイバトロン船は回避しきれずシールドによって防御する形に。しかし、シールドも長くはもたない。

「く…耐えてくれよ！」

船内の警報が鳴り、赤いランプが光る。

「うっ…限界だぜ！」

「諦めるな！」

その時、シールドと光線の間から空間が歪み始めた。歪みは二隻の船を覆うように広がっていく。

「な、なんだこれは！」

デストロン船でも…

「こゝこの歪みは一体……！」

「歪みがこちらにも広がって来ます！」

歪みが収まったところには、もう一隻の船は無かった。

サイバトロン船

「コンピューター、本当に知らないのか？」

「ハイ、コノ星ハデータニハアリマセン。マタ、コノ星ニ正体不明ノ謎ノ空気ガ流レテイマス。タダ、ミナサマニイコトハナイ空気ダト八分カツテイマス。コノ星ニモ生物ノ存在ガ確認デキルノデ、スキャンスルコトヲオススメシマス。」

「ふむ……分かった。」

あの後、船は未知の星に不時着したらしい。そこで星をコンピューターに調査させたところ、今のやりとりがされた。

「全員、この星の生物をスキャンするんだ。」

一方、同じ星に不時着したデストロンでも同様のやりとりが行われ、乗組員全員がスキャンを開始していた。

スキャン後、両軍どちらも驚いた。その姿は動物ではなく、正に『
化け物』だった。

サイバトロン

鬼〓オーガコンボイ
天狗〓テングース
河童〓カパルパ
鎌鼬〓ウイゼルド
小豆洗い〓ビーンズ

デストロン

キマイラ〓キメラトロン
ブラックドッグ〓クロドッグ
サラマンダー〓サラマーン
ヒュドラ〓ヒドラヒドラ
インプ〓インプット

「みんな聞いてくれ。どうやら我々のこの姿は、妖怪、モンスターと言われるものようだ。」

スキャンを終えたメンバーを、赤い鬼をスキャンした司令官、オーガコンボイがまとめていた。

「妖怪やモンスターって……地球の文献にあった架空の生物であるう！？そんな馬鹿な！」

「事実だ。今のみんなを見れば分かるだろ？」

どうやら、あの宇宙で歪んだ時空によってワープしたのだ。

……いわゆる魔界というところに。」

全員がええっ、というような顔をした。妖怪、モンスター、魔界と聞いた世界を信じられないという風に。

だが、事実彼らは魔界に来ている。

「調査に行こう。どんな世界なのかな。多分デストロンもいるはずだ。ひょっとしたら新しいエネルギー源を発見できるかもな。」

サイバトロンは船から出て調査に乗り出した。

その考えに至ったのはオーガコンボイだけではなかった。キマイラをスキャンしたデストロンの帝王キメラトロンも、そう思っていた。

「この世界のエネルギー源を手に入れられれば、全宇宙の支配も夢ではない！」

だがまずは……おそらくこの世界に来ているだろう邪魔なサイバトロンを片付けるぞ！」

そう言ってデストロンも動き出した。

魔界の構造は基本的に地球の自然と変わらない。森や川、湖、山、草原などがあつた。

ただ、空は厚い雲で覆われていて、暗い。

そんな中、ある溪谷で川を挟む形でサイバトロンとデストロンが睨み合っている。

「展開早いな…」

不意にビーンズが漏らした。

それをよそに、川越しでオーガコンボイとキメラトロンが問答している。

「デストロン！我々が争い合う理由はないだろう！すぐに投降しろ！」

「フン、貴様らの平和主義は気に食わんのだ。だから反乱する。これは革命なのだよ。」

今だってそうさ。投降しろ、だと？いかにも増長したサイバトロンらしいセリフだ。自分達が上だと思ってるな。かつての戦争に勝ったから！！」

「違う！増長ではない！サイバトロンとデストロンが手を携えたことで、セイバートロン星の技術は大きく発展した。我々はいくまで対等の立場だ！」

「お喋りは終わりだ！」

デストロン全員、変身しろ！」

「くー！やむを得ん、サイバトロン全員、変身だ！」

変身！&キャラ紹介

「インプット、変身！キキー！」

空中攻撃兵インプット

デストロン。全身濃い灰色をした小悪魔インプをスキャン。

翼を持ち飛行能力を持つ小柄な戦士。イタズラっ子で小細工が大好き。空中からの援護や爆弾などの設置を得意とする。防御能力は低いがちょこまかと動き回り弾丸を回避できるのでフォロワーされているが、打たれ弱いのを少し気にしている。口癖は「キキー」

変身は体が開き中からロボットモードの体が飛び出し、頭が胸の前に来るビーストウォーズでもおなじみの変形機構。翼は変化がないので空中能力はそのまま。

武装はピストルと、矢じりのような尻尾を外した手槍インプスピア。

「ビーンズ、変身！シヨキシヨキー！」

狙撃兵ビーンズ

サイバトロン。小豆洗いをスキャン。

皮肉屋であるが少々臆病。掃除が好きで基地及び船内は彼によつて綺麗にされている。手に底の浅い桶を持ち、暇があると小豆を洗っている。好きな食べ物はお汁粉。小柄ながらサイバトロン随一のスナイパーであり、前陣での戦闘も遠距離射撃もこなす。

変身はインプット同様の機構。桶はゴーストモードの手と共に後ろへ回され、取り外して使える。

武装はピストルと、前述の取り外し可能な桶の盾。他にも任務によつて長いライフルやバズーカを持ち出す場合もある。

「ビドラビドラ、変身！キシャー！」

技術者ヒドラヒドラ

デストロン。紫の体表に九つの頭を持つ蛇ヒュドラをスキャン。

コンピューターに精通しておりハッキングやプログラミングを得意とするデストロンの技術者。武器の発明なども行う。自らを天才科学者と称する自惚れ屋で、それ故詰めが甘い面がある。八つの頭の輪の中央にある頭が主人格で喋り、残りの頭は手足でしかない。

変身は尻尾が左右に開いて足になり、中央の首は下に降りて頭が登場、他の首は左右に四本ずつ分かれる。はっきりした手は無く、八つの頭を手の代わりにする。

八つの頭がそのまま武器、チョップハンドとなり、接近戦では噛みつき、射撃戦では弾丸を吐き出して攻撃できる。

「ウイゼルド、変身！イエス！」

偵察員ウイゼルド

サイバトロン。大きな爪を持つ鼬、鎌鼬をスキャン。

若く、お調子者。時々英語を混ぜた喋りをする。スピードと柔軟性のある体を利用して偵察任務を担当する。

変身は体を開いて中からロボットモードの体を出し、頭が胸に来る。

武装はピストルと、手だけゴーストモードにして爪で戦うスピンドルクロー。

「サラマーン、変身！ヒーハー！」

切り込み隊長サラマーン

デストロン。火を纏う赤いトカゲ、サラマングーをスキャン。

忠誠は厚く、決して裏切らないが、はっきり言って単細胞の馬鹿である。例え弾幕の嵐でも突撃する勇気を持つ（馬鹿だからとも言える）。火を纏っているので仲間から距離を置かれているのが悩み。

変身は胴体が上部（上顎から尻尾）と下部（下顎から足）に分離し、

下部は開いてロボットモードの体を出し下顎が胸に来る。上部は90度回転し上顎が右手、尻尾が左手になる。ロボットの頭は背中辺りから出現。また、纏っていた炎は全て左手の尻尾に集中する。

武装は右手の上顎の牙を利用したパンチと左手の尻尾を炎の鞭とするフレームテイルウィップ。射撃武器を一切持たないが、フレームテイルウィップは鞭という特性上動きが読みづらく、接近戦で非常に驚異的な威力を発揮し、また、振り回した遠心力である程度炎を飛ばすことも可能。

「カパールパ、変身！カパー！」

水中戦士カパールパ

サイバトロン。河童をスキャン。

思慮深く分析力に長け、機械に精通しているサイバトロンのメカニクであり、基地全体のシステムを管理している。また、魔界の解析も彼の任務。

変身は上顎から頭が外れ、下顎にロボットモードの頭が登場。肩の

下から腹までが180度回転し甲羅が前に、甲羅のなくなった背中に外れた頭が移動する。皿の部分は水中でスクリューになる。

武装は二丁のピストル。また、甲羅の下の方（変身時に回転せずに腰に残っている方）にはハッチが付いており、爆弾や道具などを収納できる。

「クロドッグ、変身！ウオーン！」

隠密兵クロドッグ

デストロン。ブラックドッグをスキャン。

冷静、冷徹なデストロン戦士。クセの多い他のデストロン戦士に対するツッコミ役。全身が黒いので隠密行動に適しているが、逆に影が薄く、それを気にしている。

変身は体が開いてロボットモードの体が出現し頭が胸にくる。

武装はピストルと脊椎部分から抜き出す近接戦闘用のサーベル。

「テングース、変身！イヨーッ！」

空中兵テングース

サイバトロン。赤い顔に鼻高、山伏姿で鳥の翼を持つ天狗をスキヤン。

洞察力に優れ、慎重な性格から、サイバトロンの副司令官のような存在。サイバトロンの空中戦力でもある。静寂、風流が好きで、サイレンを「風情じゃない」と嫌う。右手に葉っぱの扇子を持つ。

変身は頭を90度上に向けて左右に分かれ、ロボットモードの顔が出現。上腕が上下に分かれ、前腕へ移動、右手と扇子を固定（この際扇子は硬化する）、左手は銃口になる（そのため、変身後は両手は使えない）。腰から下が折り畳まれ背中に移動、翼の根本を固定し袴がブースターになる（これにより翼の動きは開閉のみになり羽ばたけなくなるが、スピードはゴーストモードより上）。同時に腰から上が開きロボットモードの足が登場、腰の下へ。開いた体は再び閉じる。

武装は右手の扇子から熱を発して敵を切り裂くヒートセンススパイ

くと、左手の銃口からビームを放つレフトバスター。

「キメラトロン、変身！グワアオオ！」

指導者キメラトロン

デストロン。ライオン、山羊（背中についでる）の二つの頭と、蛇の尾を持つ獣キマイラをスキャン。

デストロン側反乱者の指導者。セイバートロン星への反乱を少し楽しみながら起こしている節があり、狡猾さ、残忍性を強調しておりそれがカリスマ性につながり現在の部隊を率いている。ライオンの頭が主人格。山羊は命令の伝達時のみ喋り、その内容を記憶している。蛇の尾は手の代わり。

変身は腹部から体を出しゴーストモードの体は90度回転する、ピーストウォーズセカンドのライオコンボイと同様の機構。ライオンの頭は右手になるが背中にあつた山羊の頭はライオンの頭とは逆向きに回転、左手になる。蛇の尾は背中にあり自在に可動する。ロボットモードの頭は胴体から登場。

武装は右手のライオンの頭と左手の山羊の頭からそれぞれビームやミサイルを放つレオキャノンとカプリキャノン、背中に付いた蛇の

尾が弾丸を吐き出す自在可動のスネークガン。特に二つのキャノンは全ゴースト戦士の基本武装中最高クラスの攻撃力を持つ。

「オーガコンボイ、変身！ウオオオッ！」

司令官オーガコンボイ

サイバトロン。赤い肌の鬼をスキャン。

やや荒削りな新米司令官。時折強引な作戦を立てる時もあるが、サイバトロンの仲間からは信頼を寄せられている。鬼をスキャンしたため非常に腕力が強いが、ゴーストモードでは指先などの細かい動きがしづららしく、機械の操作が出来ない。変身すれば細かい動きが出来る。

変身は両上腿から延長線上の虎柄の腰巻きが上にめくれロボットモードの脚が露出、めくれた部分は腹部に折り畳まれる。鬼の顔が胸に移動しコンボイタイプの頭が出現する。上腕は上がり肩になる（ビーストコンボイと同様）。

武装は角先が銃口になり弾丸を放つホーンガン、鬼の口から発射す

るミサイル、近接戦闘用の金棒。

変身！&キャラ紹介（後書き）

今後亀更新になるかもしれませんが、よろしくお願ひします。

開戦！ゴーストウォーズ

「撃てえ　　！」

キメラトロンの掛け声でデストロン軍は一斉射撃を開始した。

サイバトロンは初撃を回避した後、反撃を開始。

「ヒーハアー！！！」

射撃武器を持たないサラマンがフレイムテイルウィップを回しながら向かって来る。

「やべえ！クソ！」

ウイゼルドがピストルで撃墜を試みるが、旋回するフレイムテイルウィップの前に弾がことごとく弾き飛ばされる。

そのままサラマンは渓谷を飛び越え、ウィップをウイゼルドに振るい、ぶっ飛ばした。

「うわぁー!」

「ヒーハー! 覚悟し……」

「ぐお!?!」

ワイゼルドに近づくサラマーンに、横から飛んで来た弾が命中した。

弾の飛んで来た方には、二丁のピストルを連射するカパルパがいた。

「カパパパパ……!」

「うおおおおっ」

カパルパの弾を次々くらい、少しずつ後退するサラマーン。とうとう崖まで追い込んだ。

「あばよ、カパー!」

「ぐお！」

ヒヤアアハアア……………」

カバルパの最後の一発をくらったサラマーンは、崖下の川に落ち、流されていった。

「キシヤーシャシャシャ！」

サラマーンを落として勝ち誇るカバルパを狙い、ヒドラヒドラのチヨップハンドが火を吹く。

間一髪、岩に隠れてかわしたが、八つの首から間髪入れずに撃ち込まれ、反撃の隙が出来ない。

なんとか反撃しようと思いを伺うが、その頭上からインプットがカバルパをピストルで狙っていた。

「キキキキ、くらえ！」

「ガバアッ！」

不意打ちをくらったカバルパは、その場に倒れてしまった。

「おのれ！拙僧が相手してくれる！」

テングースがインプットめがけて飛翔し、右手のヒートセンススパイクをインプットに振るった。

「甘いッキー！」

インプットもインプスピアを手に応戦、両者は空中で打ち合いを繰り広げる。

「ヒドラヒドラ、インプットを援護だ。あの天狗を撃ち落とせ！」

「お任せ下さいキシヤー！」

キメラトロンの指示を受けたヒドゥラヒドゥラのチョップハンドがテングースに向く。

「そりゃ！」

「うわ！？」

ビーンズがチョップハンドの一つを狙撃した。

「そりゃそりゃそりゃっ！」

ビーンズの弾丸が的確にチョップハンドを捕らえ、八つの内四つが使えなくなった。

「自慢の首も半減したなあ首長野郎！」

「おのれ豆粒チビめ！キシヤーシャシャシャ！」

「うおっとと！」

桶の盾でチョップハンドを防ぎながら、ビーンズも反撃する。この両者は銃撃戦に入った。

トロンを倒した。

「ウォーン！」

ここでクロドッグが登場、サーベルを手にオーガコンボイに飛びかかった。

「ぬ！」

回避したオーガコンボイだったが、クロドッグのしつこい連続攻撃に後退する。

「イエス！」

突如、オーガコンボイとクロドッグの間に、サラマーンの攻撃から蘇生したウイゼルドが入り、クロドッグのサーベルをスピンドルクローで止めた。

その隙をつき、オーガコンボイがクロドッグを殴り飛ばした。

「みんな、退くぞ！」

オーガコンボイの声で、サイバトロンは撤退を始める。テングースとビーンズはそれぞれインプットとヒドラヒドラへの威嚇射撃をしながら後退していった。

オーガコンボイは岩かげで倒れているカパルパの回収に向かった。

「行かせるか！ウア！」

邪魔に向かったクロドッグはウイゼルドの援護射撃に足止めされた。

「大丈夫か、カパルパ」

「す、すまないオーガコンボイ…カパー…」

オーガコンボイがカパルパを背負ったのを確認すると、ウイゼルドも撤退した。

「逃がすか！」

キメラトロンが両手のキャノンを岩に撃ち込むが、カパルパを背負ったオーガコンボイは既にそこから離れていた。

「く、追うぞ！」

まだ目で見える内に追う気配を見せるが…

「」「」「うー!?」「」「」

インプットは墜落、他のデストロンも動けなくなった。

「か、体が重いツキ…！こ、これは…!?」

「こ、この世界の悪い空気とやらの影響だ…！魔界だからさしづめ妖気といったところか…！」

全員、ゴーストモードに戻れ！」

デストロンは一斉にゴーストモードに戻ったが、その頃にはもうサイバトロンの姿はなかった。

サイバترون船（基地）に戻ったサイバترون達は、戦いで受けたダメージを回復した後、今後の方針について話していた。

「何故我々が魔界へ来たのか、今のところは解明出来ないカパー」

「うむ、デストロン船の攻撃と我々の船のシールドの衝突が時空を歪ませた、そう言うしかないだろうな」

「同じように抜け出せるんじゃないのか？」

「船のダメージもひどいし、また時空を歪ませることが出来るかも分からないイヨーツ」

「それに、抜け出すためとはいえデストロンが協力すると思うかあ？きつと、同じようにあのキャノン撃つからシールド張れよーとか言っついて、張る前に俺達を撃つぜ？」

「でもよ、デストロンだってここに来たことはバッドなハズだろ？
だったら…」

「いや、奴らはグッドだと思うぞ。ここは未知の世界。逆にいえば、未知のエネルギーやテクノロジーの宝庫でもあるという訳だ」

デストロンがそのエネルギーやテクノロジーを手に入れそれがセイバートロン星に持ち帰られれば、それを兵器として利用し必ずサイバートロンに反旗を翻し、セイバートロン星全土を巻き込む大戦争となってしまうだろう。

「なんとしても、奴らにそれを渡すことは避けなくてはならない」

未知のエネルギー源やテクノロジー、そして宇宙の平和をかけて、今、魔界でゴーストウォーズが、幕を開ける。

開戦！ゴーストウォーズ（後書き）

オーガコンボイ「どうも読者の皆様、赤鬼のオーガコンボイです。
いよいよゴーストウォーズの幕開けだ！

今後も、我々の戦いを見届けてくれると嬉しいです。

次回、ゴーストウォーズ

「デストロンの罠」

お楽しみに！」

デストロンの罠

魔界のとある地帯…

サラマンダーとブラックドッグが飾った鉄の棒みたいなものをくわえて歩いていて、二匹間に一定の間隔を開けるとその鉄の棒を、頭がほんの少しだけ出るように深く突き刺す。頭は少し汚しており、一見したただけでは、小石があるくらいにしか思えない。

ブラックドッグは少し柔らかいところに刺せたが、サラマンダーの方は硬い岩の層に当たったらしく、なかなか刺さらない。

仕方なくそこに刺すのを諦めた。だが、それにブラックドッグが反応した。

「おいサラマン、そこに刺すか否かで大きく変わるぞ。諦めてどうする」

「硬くて刺さらねえんだ！しょうがねえだろ！じゃあやってみろよ テメエ！」

「フウ…全く貴様は…」

やれやれといった感じでサラマーンの元へ行くと、ブラックドッグは高らかに叫んだ。

「クロドッグ、変身！ウオーン！」

ロボットモードになったクロドッグは、まずピストルで岩の層に穴を開け、背中からサーベルを取り出すと、層に何度も突き立てて岩盤を削り、穴を深くしてから鉄の棒を刺した。

「おお………」

サラマーンは感心していた。

「頭を使えよ単細胞が。お前の炎で熱帯びてたし、アチチ……。さあ、設置も終わったし、帰るぞ」

「ヒーハー！これでサイバトロンの奴らが来ても大丈夫ってわけだな？」

「ああ、簡単には近づけまい。この装置があればな」

地面をよく見ると、そこら一帯に小石がばらまかれたように大量の

鉄の棒が刺さっていた。

「川に寄っていいか？手を冷やしたい…」

「ああ、分かった…ゴメンな…」

クロドッグとサラマーンの作業現場から少し離れた林の中を、かまいたちが木を次々飛び移っていた。

「ウイゼルド、こちらカパルパ。応答してくれカパー」

無線機から聞こえたのは基地にいる河童の声。

「こちらウイゼルド。ワッツハプン？どうしたんだ？」

「用心しろ。こっちのリーダーがデストロンをキャッチした」

「デストロンだって？…」

…うわっ!」

通信中、前方から弾が飛んで来た。ウイゼルドは間一髪回避し、横の木に移った。

「キキー!これはこれは、元気がイタチ野郎」

ウイゼルドの視線の先には、ピストルを構えるインプットがいた。

「ちい、ウイゼルド、変身!イエス!」

ウイゼルドも変身してピストルの反撃。インプットと銃撃戦を繰り広げる。しかし、インプットの弾は木に邪魔されて当たらない。

「ちい、これじゃまずい、一旦退くツキ!」

そう言うとインプットはゴーストモードに戻って飛び去っていった。

「逃がすか!ゴーストモード!」

その後をウイゼルドも追い始めた。

「こちらウイゼルド、今インプットを発見。追跡して、デストロンの基地を特定するぜ！」

「おい、ちょっと待った！やけにあっさりだ、何か企んでるかもしれないカパー、深追いするな！」

おいウイゼルド、ウイゼルドッ！」

カパールパの警告は既にウイゼルドには聞こえてなかった。肩を落とすカパールパの後ろに、何か起きたことを察知したオーガコンボイが立つ。

「何事だカパールパ！」

「ウイゼルドがインプットを発見して追跡しているみたいだけど…どうも妙だカパー。何か嫌な予感がする。」

「分かった。俺がウイゼルドを追う。カパールパは、通信を切らずに引き続きウイゼルドの状況を見ていてくれ。」

「気をつけるカパー。」

数分後、基地から飛び出した赤鬼は、猛ダッシュでウイゼルドを追い始めた。

小石が多い地形に場所を移し、ウイゼルドはまだインプットを追っていた。しかし、その場所は……

「さあ観念しな小悪魔！」

ウイゼルド、インプット間の距離は一向に離れない。ウイゼルドはまだ余裕である。このままならデストロン基地の位置を割り出せるはず……だった。

小石地帯の真ん中まで辿り着くと、インプットは止まった。

「へっ、ようやく観念したか。諦めな！」

「…お前は馬鹿だツキ」

「あ？」

「スイッチオンツキ！」

インプットがスイッチを押すと小石から電磁波が放たれ、ウイゼルドを捕らえた。電磁波は小石から小石を次々繋ぎ、そこには網の形をした広大な電磁フィールドが形成された。

この話の冒頭でクロドッグとサラマーンが仕掛けた鉄の棒だ。

「うわあああ！なんだこれはあ！う、動けない……！」

「ザマア見るツキ！キャハハハハ！」

インプット、変身！キキー！」

空中で変身したインプットはピストルを構える。

「く、くそっ……！ウイゼルド、変身！」

「……うっ、変身出来ない……！」

「おやおや、元気なかまいたちが電磁波ネットにかかったようだな」

いなかったハズのキメラトローンの声がした。

なんと、電磁波ネットの向こうにデストロンが集合していた。

こうなることを予測したインプットが連絡していたのだ。

ウィゼルドにとっては、絶望的な追い打ちだ。

「キシヤシャシャ…俺様の発明の威力、思い知ったか！」

自懐気にビドラビドラが叫び、そしてデストロン全員が、

「「「「「「
変身！」「」「」

「さあ諸君、これから射的ゲームをしようじゃないか。標的は、あのかまいたちだ！」

インプット、こっち来い、ズルするなよ」

「ハイ、ツキー」

「頑張れよ」

飛び道具を持たないサラマーンの自嘲気味なセリフを合図に、一斉射撃を開始する。

「うわあああああ！！」

「ハアー…、ハアー…」

ウィゼルドに向けて放たれた銃撃は、全て外れた。

いや、外した。

「ククク…恐怖で顔がひきつっているな…いい表情だ……」

わざと外すことで、ウィゼルドの恐怖を煽っているのだ。ウィゼルドは今にも泣き出しそうになっている。

「次行くかー……次は……当たっちゃうかもな……」

デストロン達がウィゼルドに再び銃口を向けたその時、

「オーガコンボイ、変身！」

走りながら変身したオーガコンボイが、ホーンガンを連射した。

「ぬあ!」「ギャア!」「グオ!」「うあ!」

弾は的確に四人（事実上戦力外であるサラマーン以外）に命中した。

「ウイゼルド!大丈夫か!」

「うっ……助かったぜ、オーガコンボイ……」

ホーンガンをくらったキメラトロンがゆっくり立ち上がる。それに続いて他のデストロンも立ち上がった。

「くっ、オーガコンボイ……!」

…サラマーン、射的に参加出来ない貴様にアトラクションだ。オーガコンボイを仕留めろ!インプット、サラマーンを向こうに運んでやれ!」

「ヒーハー!やりイ!」

「了解ッキ!行くぞサラマーン、掴まるッキ!」

キメラトロンの命令を受け、サラマーンがインプットに運ばれる形で迫って来る。このままサラマーンと戦っては、その際にウィゼルドが狙われる。今度は確実に息の根を止めにくるだろう。

しかし、オーガコンボイは冷静だった。

「口からミサイル！」

胸にある鬼の口からミサイルを発射し、インプットに命中させた。

「うぎゃあー！」

インプットは吹き飛び、サラマーンが落下……

「ぎゃああああああ！」

電磁波ネットに落ちた。

それを尻目に、オーガコンボイは基地のカパルパに連絡する。

「司令室へ、こちらオーガコンボイ。カパルパ、そちらで、電磁波ネットのエネルギーを解析出来るか？」

しかし、応答したのはカパルパではなかった。

「カパルパは、ウイゼルドが浴びたエネルギーから電磁波の解析をして、既に中和装置を作つてそつちに向かつたイヨーツ」

「テングースか！了解した」

「今回、拙僧はこれしか出番無いらしいからな」

…ゴメンねテングース。

「ぬじひひひ……！」

デストロン達は妖気による時間切れを迎えていた。

「ちっ、引き上げだ！」

キメラトロンの合図でゴーストモードに戻ったデストロン達は、オーガコンボイの攻撃を受ける前に逃走した。

オーガコンボイもゴーストモードに戻り、可能な限りウィゼルドに近づく。

「来てくれて……ありがとよ…… オーガコンボイ……」

「あと少しの辛抱だ、頑張れウィゼルド」

装置を解除する方法が分からないオーガコンボイは、カパルパの到着を待つことにした。

装置を破壊しようとするればウィゼルドを巻き込みかねない。

ウィゼルドを助けようと手を伸ばして、オーガコンボイも感電するなど言語道断、間抜け過ぎる。

ウィゼルドの命の危険もないようなので、下手に手を出さずに待つのが最良と踏んだオーガコンボイの選択は、正しいといえる。

そして、とうとう辛抱の時間が終わった。カパルパが到着したのだ。

「カパルパ、変身！カパー！」

カパルパは変身後、甲羅から四角い機械を取り出し、手の届く電磁波発生装置にコードを繋ぎ、スイッチを入れた。

すると、機械から電磁波ネットとは正反対の性質のエネルギーが流れ、電磁波ネットはみるみる無力化した。

ようやくウイゼルドは自由になった。

「ひゅーっ…っ、サンキュー、カパルパ。おかげで助かったぜ」

「全く、忠告も聞かずに一人で突っ込むからだカパー！」

「まあまあカパルパ、ウイゼルドも懲りたろう。許してやれ。」

「さあ、基地へ戻るぞ」

そして、サイバトロンは基地への帰路についた。

「……………ヒー……………ハー……………誰か……………拾いに来て……………」

ロボットモードのまま電磁波ネットにかかりゴーストモードに戻れなかったため妖気に当てられ、動けなくなったサラマーンがデストロン基地へ戻れたのは、インプットが迎えに来た夜のことだった。

デストロンの罠（後書き）

ビーンズ、ヤッホー、小豆洗いのビーンズです。あのさあ、今回の話、テングースが出番これだけ、とか言ってたけどさ、テングース以上に今回僕全然出てないんだよ！他はみんな登場してなのに僕一人未登場なんて、そりやないでしょ……

くそ、いつか見返してやるからな！

次回、ゴーストウォーズ

『魔界と妖気の謎』

僕は出るかな？」

魔界と妖気の謎

深い森の中…沼の近くを河童が歩く。手には携帯電話サイズの、アンテナがついた機械を持っている。

その機械についているレーダーには、先ほどから「UNKNOWN」としか表示されない。

「うーん……やっぱりか……」

結局、河童は基地へと戻ることにした。

終始、彼は自分の頭上数メートルの虫のようなロボットに気づかなかった。

デストロン基地内……

「クソ　　ッ！このスパイロボじゃあここまでが限界キシャー！」

カメラを通して河童を見ていたロボットモードのヒドラヒドラが、
そう言いながら手（もとい首二本）をコンピューターの操作パネル
に叩きつける。

イラついているヒドラヒドラの後ろから、キメラترونが声をかけ
た。

「何を荒れているんだヒドラヒドラ、パネルは無事だろうな？」

「……………あ……………」

操作パネルに叩きつけた右手（首）の下から、プスプスと煙が……

「は、はい！キメラترون様！実は、我々の領域に配置したスパイ
ロボが、河童野郎を発見したシャー」

ヒドラヒドラは煙を右手で隠しながら答える。

「ほほう…カパルパか…で、ヤツは何を？」

「何かを調べてるっぽいキシャー。我々の基地が目的ではないようだキシャー」

「ふむ……おそらくこの魔界についてだろうな。」

よし、とりあえずは泳がせておけ。魔界の情報は我々にとっても有益だ。お前は、スパイロボの強化をしる。今より行動範囲を広げんだ」

「了解キシャー」

キメラトロンが去ったあと、ヒドラヒドラはまず操作パネルの修理に取りかかった。

サイバトロン基地のメインルームで、帰還後コンピューター操作をしているカパルパとオーガコンボイが会話している。

「どうだ？カパルパ」

「空気の成分のほとんどは地球と変わらないんだが…その約30%くらい未知の気体が含まれているみたいだ」

「その部分が妖気というわけか…成分の解析は出来ないのか？」

「未知の気体だからね…色々実験してみないと」

「うむ、頼むぞ」

そう言ってオーガコンボイはその場から立ち去り、カパルパはコンピュータ操作に集中し始めた。

その頃、テングースとウイゼルドは岩山を登っていた。テングースの手にはカパルパが使っていたものと同様のレーダーを持っている。

ウイゼルドが岩から岩へ飛び移ると、脆いところに着地したらしく、足元が崩れた。

「うわぁ!」

なんとか岩に掴まり、落下は防げた。

「何をやってるウイゼルド、情けないヨーツ」

「なんだよ!自分は空飛んでくせに…その言い方はないんじゃないのか?」

「文句垂れるでない。不満があっても、耐えねばならん時があるのが縦社会だヨー。行くぞ」

そう言うとテングースはすいすい飛んでいった。

「ちィ……ストライキしてやる……」

眩きながら、ウイゼルドも後を追った。

「ウイゼルド!来い!」

前方のテングースが叫んだ。ウイゼルドはすぐに彼の元に駆けつけた。テングースは岩の上に降りていた。

「What's happen?」

「リーダーがやたら濃い妖気をキャッチしているようだ。見ろ」

ウイゼルドがテングースの持つリーダーを覗く。リーダーに表示されるUNKNOWNの表示が、かなり強調されている。

「妖気の濃いポイントがあるってわけか」

「ああ、おそらくここだけではないだろうな…」

……………むっ」

テングースが上を見上げると、虫のようなものを発見した。

それは、ヒドラヒドラが放ったあのスパイロボだった。

「What's this?なんだあれは？」

ウィゼルドも気付いたらしい。

「見られているようだ…気味が悪いな。」

テングース、変身！イヨーツ！」

テングースはロボットモードに変身した直後、左腕のレフトバスターを発射。ビームの直撃を受け、スパイロボは一瞬で粉々になった。

「ぐうつ………！」

なんのダメージも受けてないはずのテングースが突然苦しみ出した。

「どうしたテングース！」

……まさか、妖気が……すぐに天狗に戻るんだ！」

「く……！ゴ、ゴーストモード！」

ゴーストモードに戻ったテングースはすぐに落ち着いた。

「なるほど、ここは妖気が強すぎてロボットモードでいられる時間が極端に短いみたいだな」

「これ以上は手出し出来そうにないぜ。調べる道具も不足だし、変身も出来ないんじゃないな」

「うむ、そうだな……一度基地に戻るつ」

「キシヤー……ここに妖気が充満しているのか……」

テングースとウィゼルドが去ったあと、岩かげからヒドラヒドラが姿を現した。

スパイロボで場所を特定した後やって来て、今まで隠れていたのだ。

ヒドラヒドラは4本ほどの首を使って掃除機のような機械を引きずってきた。

それを設置すると、スイッチを押して起動させる。

「キシヤーシャシャ、やはり掃除機は吸引力で選ばないとなあ！」

どうやら掃除機は、その場の空気を吸っているらしい。

「妖気の実験なんてサイバトロンに調べさせればいい……」

『トランスフォーマーには有害で、長時間ロボットモードでいると動けなくなる』

それさえ分かっていたら利用するには十分なんだキシヤー」

ヒドラヒドラは掃除機が満タンになったのを確認すると、スイッチを切り再び引きずり始めた。

「FREEZE!動くなよ蛇野郎!」

「なに!?!」

ヒドラヒドラが後ろに振り向くと、変身したウィゼルドがピストルで狙っていた。

「その掃除機のおかげで妖気が薄くなった故、変身が続くようになったのだイヨー」

上からも、テングースのレフトバスターに狙われている。

「吸引力スゲエなそれ。How much?」

「ギ……ふざけやがって……!」

「さあ、そいつをこっちに渡してもらおうか」

「く……」

仕方なく、ヒドラヒドラは掃除機を渡すことにした。

妙な真似するなよ、と釘を刺して受け取るつとテングースとウイゼルドが近づく。

油断だった。

「コイツを受け取れえ！！」

スイッチを押す音が響いた。

「ぬわぁ！」
「うあっ！」

掃除機の吸引口から、先程吸われていた妖気が放出され、近づいていたテングースとウイゼルドは、それをモロに浴びてしまった。

「しまった…う、動けぬ…！！」

「うう…ゴーストモードにもなれない…！」

「キシヤーシャシャシャ！馬鹿め！」

ヒドラヒドラ、変身！キシヤー！」

高笑いしながら変身したヒドラヒドラは、チョップハンドの銃口を二人に向ける。

「詰めが甘いなあ！覚悟しろよ！天狗にかまいたち！キシヤーシヤ
シヤシヤ！」

「アバヨ！」

ドウウウウン！

銃声が響き、弾丸が

掃除機を貫いた。

「ゲ！？うわっぶ、よ、妖気が！妖気が漏れて……」

ウアアアア
！！ゴーストモード！！」

ヒドラヒドラは動けなくなる前に、急いでゴーストモードに戻った。

戻ったヒドラヒドラは、弾丸の飛んで来た方向を睨む。

「へへ、突然応答しなくなったから様子見に来てよかったよ！」

20mほど遠くに、撃ったばかりでまだ煙の出ているピストルを持った小柄のトランスフォーマー、ビーンズがいた。

テングース達を探しに来たビーンズが、遠距離から掃除機を狙撃したのだ。

「ま、豆粒チビィ！貴様アア！」

吠えるビドラビドラに、ビーンズの銃口が向けられる。

「詰めが甘いんだよ。」

そりゃー！

「グワァ、アアアアアアアア ……」

ビーンズの弾丸をくらったビドラビドラは、岩山から落ちていった。

サイバトロン基地……

あれからビーンズは基地に連絡し、駆けつけたオーガコンボイと共に

に二人を連れ帰った。

その後二人を医療カプセルに入れ、二人は見事に回復した。

「やれやれ、助かったぜビーンズ」

「うむ、お主が来なければどうなっていたやら」

「へへ、敬いたまえ……っておい！」

「ちょっと黙ってくれビーンズ」

二人と調子に乗るビーンズの間、カパルパが割って入った。

「ヒドラヒドラの掃除機から妖気を浴びた、って言ったな。デストロンは既に妖気の成分と利用法を解明したというのカパー？」

「いや、ヤツはこう言ってたイヨー」。

『トランスフォーマーには有害で、長時間ロボットモードでいると動けなくなる。』

それさえ分かっていたら利用するには十分』とな」

確かにヒドラヒドラの言葉には一理ある。そして、デストロンが既

にこういつた兵器を次々に開発し始めているとしたら……

「デストロンとの戦いは更に過酷なものになるだろうな」

今後の戦いに向け、気を引き締めるサイバトロンであった……

「オーガコンボイ、魔界と妖気の謎はどうするんカパー？」

「まあ……いずれ解ける時が来るんじゃないか？作者の想像力次第だろっ」

い……いずれ……な……オーガコンボイ……

魔界と妖気の謎（後書き）

クロドッグ、デストロンのクロドッグだ。ふん、結局魔界とは何なのか、結論は出さず仕舞いか……

……まあいい。いつか作者が都合いい設定考えるだろう。今は、邪魔なサイバトロンを潰すだけだ。

次回、ゴーストウォーズ

『新たな戦士、登場』

言い忘れたな……読者のみなさん、明けてましておめでとう。」

新たな戦士、登場

魔界のある地域の上空、突然空が歪んでブラックホールのような穴が開き、そこから一人乗りのポッドが落ちて来た。

ポッドは下の湖に直行し、水の底まで沈んだ。

「レーダーが未確認物体を発見。このコードはサイバトロンのもの
キシャー」

デストロン基地で、ヒドラヒドラがキメラトロンの報告する。

「でも妙だキシャー。なんの前触れも無しに突然現れた…」

「ひょっとして…私達と同じく時空を越えて来たのか…?」

ビーンズとカパルパは湖に来ていた。サイバトロンでも未確認物体をキャッチし、その捜索にやって来たのだ。

「いやあ〜こんな薄暗い魔界にはもったいないくらい綺麗な水だねえ〜」

そう言うとビーンズは桶に水を入れ、鼻唄交じりで小豆を洗い始めた。

「ビーンズ、小豆なんか洗ってる場合じゃないカパー。私達は未確認物体を見に来てるんだぞ。目に見える場所にないとすると、多分水の底だ。」

「じゃあお前行けばいいだろ？河童なんだから。僕は見張ってるよ〜」

小豆を洗う片手間のように返事するビーンズ。

「はあ…分かったよ…まったく」

ため息をつきながらカバルパは湖に飛び込んでいった。

その直後

「湖を血に染めてやろうかあ？」

上からの突然の声にビーンズは上空を見上げた。

そこには、同じく未確認物体の搜索に来たインプットがいた。

「インプット、変身！キキー！」

「ビーンズ、変身！シヨキシヨキー！」

変身した二人はピストルを構え、銃撃戦を開始した。

湖に潜ったカバルパは、水の底に半分突き刺さったポッドを発見した。カバルパは早速それを水中カメラで撮影する。

このカメラはサイバトロンの基地のコンピューターとリンクしており、撮影した映像はすぐに同コンピューターで確認できるようになっている。

「間違いない！これは、プロトフォームが入ったポッドだ！」

映像を見たオーガコンボイが叫んだ。

プロトフォームは、まだデータのスキャンをしていないいわば未完成の状態である。

このプロトフォームがサイバトロンのコードを持っているというこ

とは、この魔界の生物である妖怪やモンスターをスキャンすれば、晴れてサイバトロンの仲間になってくれるということだ。

『でもオーガコンボイ！どうやらこのポッド、落下の衝撃で機能が停止してる！このままじゃあ、まだ魔界の環境に耐える能力を持ってないこのトランスフォーマーは、眠ったまま死んでしまう力パー！』

「む、それはまずいな…！なんとか回収し帰還するんだ！修理しなければ！」

『了解！』

それを最後にカパルパはカメラを切り、ポッドを持って浮上し始めた。

ポッドは予想以上に軽く、水中の浮力のため持って泳ぐのに苦はなかった。

水面まで辿り着いたカパルパは、水面から顔を出し、ポッドを両手で掲げて叫んだ。

「ビーンズ！！プロトフォームの入ったポッドを回収したぞ！！」

「…って、あれ？」

カバルパは疑問に思った。何故ビーンズが変身しピストルを持っているのか。何故彼の周りの木や地面に弾丸の当たったような跡があるのか。何故ビーンズはあちゃー、とでも言いたげな顔をしているのか。

「あ…あ…志村、上、上…」

「上？」

上を見ると、視界にインプットが入った。啞然とした顔でこっちを

見ている。

「……………あ……………」

水上では銃撃戦が起こっていたなんて知らなかったカバルパは、インプットがいる前で情報を言ってしまったのだ。

その場をしばらく沈黙が支配した後、インプットの啞然とした顔が、徐々に腹に一物抱えたようなにんまりとした顔に変わっていった。

「そのポッドの中にサイバトロンのプロトフォームがいるッキね……」

ギクリ

「い、いやあくこれはポッドに似せたお弁当箱で、中身はプロトフォームに似せた具材が……」

明らかに動揺している上あまりにも苦しい嘘。勿論インプットが引つかかる訳もなく……

「ウソつけキキー!!」

ピストルの弾が飛んで来た。

「おわ！く、仕方ない、ポッドは後だ！」

カバルパは水の中に少し潜りポッドを手放して再び湖に沈めた。

「まずは悪魔退治だカパー！カバルパ、変身！カパー！」

カバルパは水面から、ビーンズは地上から空中のインプットをピストルで狙う。

「カパパパパパ！！」

「そりゃ、そりゃ！！」

「ヒイエエ　！」

インプットも二人の猛攻には勝てずゴーストモードになって退散した。

「今の内カパー！ゴーストモード！」

カバルパは即座にゴーストモードになりポッドを回収しに水の底へ。

その間にビーンズもゴーストモードになる。

そしてカバルパがポッドと共に水から上がると二人はすぐに湖を離れ、急いで基地に向け走り始めた。

サイバトロン基地

『こちらビーンズ！応答せよ！』

「こちらオーガコンボイ、どうした！」

『ポッドは回収したけどインプットに見つからなかったさあ、追い払ったけど仲間呼んで来るかもしれないから助けに来て！』

「分かった、すぐに向かう！テングース、ウイゼルド、行くぞ！」

三人は基地を飛び出していった。

その頃、カバルパは何故か森で止まりポッドを地面に降ろした。

その行為の意図が理解できないビーンズは、すぐに問い詰める。

「おいカバルパ何しているんだよ！早く行かないと、オーガコンボイ達より先にデストロンに見つかったらポッドと僕達の命も取られちまうぜ！」

「分かってる、けど今すぐスキャン装置だけでも修理しないと、中のトランスフォーマーが危険だ！ビーンズ、見張ってくれ。」

カバルパ、変身！カパー！」

言い切った後変身したカバルパは甲羅から工具を取り出しポッドの修理を始めた。

「反論の余地なしか…」

仕方なくビーンズは辺りを見張り始めた。

…時間にして十数分…

「……これでよし、と」

カバルパは工具を甲羅にしまつとゴーストモードに戻る。

すると、修理を終えたポッドがスキャン機能を作動させた。

スキャニングレーザは、ポッドの落ちていた湖にいた、ある生物を捉えたらしい。

「これで一安心だな……」

「本当に安心したよ河童君…」

「「！」「」」

声に振り返ると、インプットがキメラトロンを連れて来ていた。
しまった、と焦るカパルパとビーンズ。

「そのポッドを渡してもらおうか…」

「ポッドをどうする気だカパー!?!」

「中のトランスフォーマーのプログラムを書き換えて我々デストロンの仲間として、迎えようと思う」

「させる訳ね だろライオンヤギ野郎!

ビーンズ、変身!」

「カパルパ、変身!」

「尻尾のヘビを忘れているぞビーンズ、

キメラトロン、変身！グワアオオオ！」

「インプット、変身！」

森の中で、銃声が響き始めた。

カバルパとビーンズは、ポッドを守ろうとピストルで応戦する。

「くそ、カバルパどうする？このままじゃあヤバいぜ！」

「もうすぐオーガコンボイ達が来るはず！それまで頑張るカパー！」

しかし、二人の背後から二つの影が迫る。

レオキャノンとカプリキャノンを撃ちながらも、その影を確認した

キメラトロンは声を出さず口を動かして合図した。

「やれ」

それを見て、二つの影

クロドッグとサラマーンがサーベルとフレームテイルウィップを振り落とす。

それぞれを頭にくらったカパルパとビーンズは、気を失った。

「キシヤーシャシャ！ご苦労さん、サイバトロン共！」

クロドッグ、サラマーンの後ろからロボットモードのヒドラヒドラが現れ、無防備となったポッドに近づきゆっくりとプログラムの書き換えを始めた。

「待て！デストロン！」

声に反応しデストロンはその方向…クロドッグ達が現れた更に向こうを見た。ようやくサイバトロンの援軍が到着したのだ。

ヒドラヒドラだけはポッドから目を離さずに作業を続けているが、気づいてはいるようだ。

「来たなオーガコンボイ！よかったよ、パーティに遅れずに済んだな」

「パーティー…だと？…どういう意味だキメラトロン！」

「こづという意味だキシヤー！」

キメラトロンの代わりにヒドラヒドラが答えると、ポッドがプシューという音を立て、煙を吐きながら開いた。

その煙を浴びて、カパルパとビーンズが目を覚ました。

「うっ……ゲホ、ゲホ……」

「うえっ？」

遅かったのだ。

「レディー・スアンドジェントルメン！長らくお待たせしました！紹介しましょう……」

新しいデストロン戦士だキシャーシャシャー!!」

ポッドから現れたのは、水色の魚の尾と藻のような鬘を持つ灰色の体色の馬だった。

これがゴーストモードなのだろう。

その馬がゆっくり口を開いた。

「ケルピフォース、変身」

機動音と共に馬が変形し、人型の戦闘ロボットモードへと変わった。

満足気にそれを見たキメラトロンは、

「デストロン、8時じゃないけど全員集合！」

と叫んだ。

するとキメラトロンの周りに、デストロンが並ぶように固まった。

ケルピフォースというトランスフォーマーも…

これにより、彼は完全にデストロンであると証明された。

「なんてことだ…！」

俯くオーガコンボイト、絶句する他のサイバトロン。

「歓迎するぞケルピフォース。君は我がデストロンの一員だ。力を合わせて共に戦い、サイバトロンを蹴散らし全宇宙を支配しようではないか」

「俺はデストロン…キメラترون様に…従う」

ケルピフォースは静かに答えた。

「そうかそうか！頼もしいぞハハハハハハ！」

キメラトロンは大きく高笑いする。

まるで、サイバトロンに見せつけるように

サイバトロンにとってかなりの屈辱だろう。

「ではケルピフォース、我々の大いなる野望への第一歩だ。奴らを始末するのだ！ゆけエ！」

「了解……」

キメラトロンがサイバトロンを指差すと、ケルピフォースは二歩歩み出た。

彼が地面をしつかり踏みしめ胸を張ると、胸にある藻の鬣が鋭利になり、ミサイル状に数発発射された。

発射された鬘のミサイルはサイバトロン達に命中し、彼らを吹き飛ばした。

「ぐお！く…撤退だ！」

オーガコンボイがそう叫ぶと、サイバトロン達はミサイルを避けながら撤退していった。

「でかしたぞケルピフォース！ハハハハハハ！ハア　ツハハハハハ！！」

デストロン達が残った森の中、キメラトロンの勝ち誇った笑いが響いた。

命からがら撤退したサイバトロンは、基地に戻っていた。

「しかし、どうしてプロトフォームのポッドが魔界に現れたのだらう」

ポッドの中のトランスフォーマーがデストロンになったのもショックだったが、それ以上にその疑問が強かった。

「ここは魔界：いわば我々の世界にとっては異次元とも呼べるであろう。そんなところにセイバートロン星から援護が来るとは思えな
イヨーツ」

テングースがそう言うと、カパルパが続ける。

「なんらかの拍子で我々と同じように時空を越えて来たとしか言えないカパー…」

頭を捻るサイバトロン。しかし、まだまだ謎だらけの魔界では、どんな意見を出しても推測の域を出ない。

「…だが、二つの事実がある」

オーガコンボイがそう言うと、他のメンバーが彼に注目する。

オーガコンボイはそれを確認すると、続けて言った。

「ひとつは、どういうわけかポッドが現れ、デストロンに奪われたことで奴らとの戦いが不利になったこと、もうひとつは……」

今後、時空を越えて何かやってくる可能性がある、ということだ。

これからは、そういう物を巡ることで戦いが更に激化するだろう……

しかし、退く訳にはいかないぞ。みんないいな！」

オーガコンボイがそう結論づけると、全員がオウ、と声を上げた。

今回のポッドを巡る戦いでは黒星を取ったサイバトロンだったが、この戦いは彼らの覚悟を固めるものとなった。

一方、デストロン基地では

「ケルピフォースの入隊を記念して、乾杯！」

……キメラトロンの音頭で宴会が繰り広げられていた。

新キャラクター

水中戦闘員ケルピフォース

デストロン。水色の魚の尾と藻のような鬣を持つ灰色の体色の馬、ケルピーをスキャン。

感情の起伏は少ないが頭の回転は速く、思ったことははっきり言うようで、口数は少ないものの時々核心を突くような言葉や辛辣なツッコミを吐く時もある。ケルピーは水の精なので水中戦が得意。性格上サラマーンとは相性が悪い。

変身は立ち上がった状態から上半身が開き、ロボットモードの腕が登場。馬の頭が開いた上半身の中に入る形になり、首の後ろが胸に来る。この際、ロボットモードの頭が馬の頭に残る。魚の尾は背中に固定。また、変身時の口癖（キメラトロンのグワアオオオ、ビーンズのシヨキシヨキー、など）が無い。

武装は胸の藻の鬣をミサイルのように発射するメインズランチャー（鬣は瞬時に再生し、連射可能）と、魚の尾から引き抜く骨の形をした剣フィッシュブレード（魚の身の部分は鞘になっている）。また、肩甲骨辺りにハッチがあり、水中ではこれを開いてスクリューを出す。

新たな戦士、登場（後書き）

ケルピフォース「俺…今回初登場のケルピフォース…

………」

サラマーン「オイ、それだけかよ！もつと何か言えよ、よろしく」とか何とか！」

ケルピフォース「………」

サラマーン「あ　　！！つたく、張り合いね　　な　　！！

次回、ゴーストウォーズ

『雪上の戦い』

ヒーハー！戦いだとよ！心踊るなあ！」

ケルピフォース「………」

サラマーン「アアアアアアア　　！！」

雪上の戦い

どこまでも広がる銀景色。そして吹雪。魔界の気候にも四季はあるらしい。

この雪原はサイバトロン、デストロンそれぞれの基地からもかなり遠くにある。

この吹雪の中、天狗が飛行している。

「うっ寒っござるな…回路が凍ってしまっイヨーツ」

テングースである。魔界の様子見とデストロンの動きを探るパトロールを兼ねて、ゴーストモードで飛んでいるようだ。

「ううっ、これ以上は厳しい…帰ってビーンズと暖かい汁粉でも食おうか…」

旋回して基地に戻ろうとしたその時、雪原にはふさわしくない焚き火を発見した。

不審に思ったテングースはその焚き火の方に飛んで行った。

「スゲー吹雪だぜ…まあ全然平気だけどな、火を纏ってるし」

焚き火の正体…それはサラマーンだった。

「妖気の強そうなポイントはこの先とヒドラヒドラは言ってたが…
ホントかよ…」

どうやら妖気の調査に来たらしい。が、ヒドラヒドラがそう言ってたというだけで、根拠は無い。それで、雪が平気そうだからとサラマーンが送り込まれたのだ。

実際、火を纏うトカゲのサラマンダーである彼の前では、吹雪など吹き付けられる前に蒸発してしまう。また、彼の歩いた跡の雪は溶けてしまっている。

「ん…あの天狗は…テングースか！」

サラマーンは上空からのテングースの接近に気づいた。

同時に、テングースも焚き火の正体はサラマーンだと気づいた。

「サラマーン、変身！ヒーハー！」

「テングース、変身！イヨーツ！」

互いにロボットモードに変身、戦闘に入った。

「ヒーハー！こんな寒い所までご苦労なこつたなア！さぞ辛いだろうよお！」

「ふん、なんともないわ！雪の中で火を焚くなど、季節感の無いヤツめ！風情無いヨーツ！」

「こちら元からメラメラ燃えてんだよオ！」

「砂漠とかだったらさぞ辛いだろうのオ！」

言い合いながら、互いにヒートセンススパイクとフレイムテイルウイップをぶつける。

「ぬー！」

「おー！」

一進一退の攻防はしばらく続くと思われたが、突然二人の横から戦鬪に割り込むように、強烈な吹雪が吹き付けられた。

「「うわあああ！」」

吹雪によって吹き飛ばされた二人はそのまま雪に俯せで叩きつけられた。二人がほぼ同時に倒れたまま頭を上げると、目の前には雪のように白い着物を着て、青い髪と青白いやせ顔をした、人間のような女性が立っていた。

女性は二人を見下ろすように睨みながら口を開く。

「私の安息の地を汚した報いを受けよ。だが、知らずに踏み込んでしまったという事実も否認せん。せめてもの情け…お前達の内一方を生かしてやるう」

「待たれよ！お主は一体…」

「俺俺！俺を生かしてくれ！！」

「何者だ……って何イ!？」

先に命乞いをしたのはサラマーンだった。

テングースは冷静さ故に状況の把握から始めていたため、反応が遅れてしまったのだ。

「ではお前は死ね!!」

「ま、待たれよ!拙僧だって生かしてほしい…

ぐわあああああ!!」

テングースの必死の叫びも虚しく、女性は口から強烈な吹雪を吐き、テングースを凍らせてしまった。

サラマーンにとっては、正にあつという間だった。それを尻目に女性性は凍ったテングースを担ぐ。

「すぐに立ち去れば手出しはしない。だが、この事は決して他の者に言つてはならんぞ、よいな」

そう言い残して女性はテングースと共に消えてしまった。

サラマーンはしばらく目の前に起きた現象を理解出来なかったが、とりあえずテングースが凍って、連れて行かれたということは理解した。

サイバトロン基地

「デストロンから通信が入ってるカパー、近くにいるぞ」

「デストロンが？妙だな…受信してくれ」

オーガコンボイの指示でカパールパは早速通信を受信する。スピーカーからインプットの声が聞こえた。

『よう、サイバトロン共！ テングースの身柄を預かったキキー！ 返して欲しければ雪山に來い！ キキー！』

そこで通信は切れた。随分乱暴で一方的な通信だった。

「なんてことだ…」

「テングースがデストロンに捕まったなんて…信じられないカパー…」

「雪山と言っていたな…確かにテングースは雪山の方に向かったはずだから…捕まってそのまま放置されてる…？」

「なんかそれも妙な話カパー…どうする？」

「うむ…だがテングースを放っておく訳にはいかない。行くしかないな」

雪原、雪山のふもと

ロボットモードのケルピフォースが双眼鏡を使って雪山の山頂を見ている。山頂のあるものを確認すると、双眼鏡を下ろしてゴーストモードに戻り、側にいるキメラトロンに報告した。

「間違いない… テングースが凍っている…」

「なるほど、サラマーンの話は本当だったのか」

「ヒーハー！だから言っただろう！？」

「これで全て作戦通りだ… フハハハハハ…」

基地に戻ったサラマーンの話聞いた時、キメラトロンは作戦を立て実行しているのだ。

その作戦とは、テングースを餌にサイバトロンを雪山におびき寄せ、テングースを凍らせた女性にまとめて始末させようというものだ。

サラマーンの話では、女性の狙いは雪山に入った者。ならば、自分達は行かずにふもとで待つ方がいいと踏んだのだ。

「でもなー…なんか忘れていたような気がすんだよなー…」

サラマーンが呟くと、辺りを強い吹雪が吹いた。突然の出来事に、デストロンは困惑する。

困惑する三人の前に、吹雪と共にあの女性が現れた。

「な、えっ、え!?!」

「あわわわ……!」

「……………」

突然のことに動揺するキメラトロンとサラマーン。特に、サラマーンは一度目の当たりをしているため、その顔からは血の気が引いている。ただ一人、ケルピフォースだけは顔色を変えない。冷静過ぎる。

「な、なんでここに！？こんなところまでマンタの領地だっていうのかー？」

そう叫ぶサラマーンに、女性は言い放った。

「他の者に言ってはならん……そう言ったはず……」

……

「忘れてたああああああああ！！！！！」

「約束を破りし者は凍らせてくれよう……」

「ままま待て！待ってくれよ！」

女性は大きく息を吸い込んだ。勿論、サラマーンを凍らせる吹雪を吹くためだ。

「わ、私は知らんぞ、無事を祈るぞサラマーン」

「……………」

すすすごと後退りするキメラトロンとケルピフォース。狙われてない内に去るつとしているのだ。

「キ、キメラトロン様ア！ケルピフォー スウ！お、俺を見捨てない
でくれエエー！」

女性の口から吹雪が放たれた。

「ぎゃああああああー！！」

雪山のふもと…デストロンとは別の位置で、オーガコンボイ、カパ
ルパ、ビーンズが打ち合わせをしていた。

そこにウィゼルドが駆け込んで来る。

「遠視スコープで見たけどテングースのヤツ、山頂で凍ってやがるぜ。デストロンの影はなかったがな」

「やはり…待ち伏せか」

「でも行くしかないカパー。後は頼むぞ、ビーンズ」

「オツケー、任せといてよ！」

「行くぞ！」

ビーンズをふもとに残し、オーガコンボイ、ウイゼルド、カパールパは山頂へと向かった。

「よし…」

残ったビーンズは自分の準備を始めた。

「……………」

女性に吹雪を吹き付けられたサラマーンは無言だった。

「フウウウ　　! !」

そのサラマーンに、女性は更に吹雪を吹き付ける。

「……………」

「フウウウ　　! ! ! !」

……………

「……………凍らない」

そう女性は呟いた。

「なんだなんだア！？終わりかオイ！」

サラマーン、変身！ヒーハー！」

さっきまでのビビりはどこへやら。一転強気に、そしてロボットモードになったサラマーンは、右手で女性を殴りつけた。

サラマンダーの上顎の牙が、女性の頬を切り裂く。その頬から赤い血は出ない。代わりに、肌が崩れ、結晶になってポロポロとこぼれた。

「おやおや、血ではなく結晶が落ちるとは、どうやら貴様、人間ではないようだな……」

いつの間にか強気になったキメラトロンが言い放った。

「おのれ忌まわしい！」

女性はそう言うと口笛を吹く。

すると、再び吹雪が吹き、なんと同じような女性が七人も現れた。髪や顔に若干の違いはあるものの、おそらく種族は同じだろう。合計八人でサラマーンを凍らせる気だろうか。

八人はそれぞれサラマーンに吹雪を吹き付ける。

「ヒーハー！」

しかし、サラマーンはフレイムテイルウィップを振り回し、吹雪を防いでいく。

「なんだ、なんてことないではないか。計画は多少歪むが、始末してしまおう。」

キメラトロン、変身！グワアオオオ！」

「…ケルピフォース、変身」

変身した二人は女性達に向かって攻撃を開始した。

「ぐおおおおお！」

「……………」

油断したキメラトロンに、二人の女性が吹雪を吹き付ける。キメラトロンは凍っていった。

メインズランチャーを連射していたケルピフォースも、死角に回り込まれ吹雪を吹き付けられてしまった。でも顔色変わらない。

残ったサラマーンもピンチだった。炎を纏っていない部分、右半身を凍らされてしまった。

バラバラならばともかく、数人がかりで他方向から吹雪をくらえば防ぎきれない。

更に、キメラトロンとケルピフォースを凍らせた女性達も戻って来た。

「観念せい。お前達は終わりじゃ。」

八人の女性がサラマーンを包囲し、息を吸い込む。

「……………!!ぐああ!!」

泣き面に蜂。更に妖気による時間切れ。もはやロボットモードでは
いられない。急いで右半身を溶かし、ゴーストモードに戻った。

その瞬間、八方から吹雪を吹き付けられた。

「……………なんともない……………ヒーハー!!」

吹雪は全部蒸発してしまったのだ。サラマーンは、ロボットモード
では炎は尻尾に集中するが、ゴーストモードでは全身に炎を纏う。
それがサラマーンを救ったのだ。

サラマーンはすぐにキメラトロンとケルピフォースの元に向かい、
全身の炎で二人の氷を溶かした。

「ぶはっ！よくやったぞサラマーン。

反撃だ！！」

キメラトロンとケルピフォースは一斉砲火を開始。女性達は隙を見て吹雪で反撃するが、サラマーンが防いでしまう。それをいいことに、二人は趣味で狩りをしているように、面白いように撃ち続けた。

「オーガコンボイ、爆発音だぜ！」

「なんだ！？何が起こっているんだ！」

デストロンと女性達の戦いで起こる爆発音は、山頂を目指していたサイバトロン達にも聞こえていた。

「山頂…というより、山の向こうから聞こえるぜ。Why？」

「知らんカパー！私に聞くな」

「何者かが、デストロンと戦っているのか。ひょっとしたら、テン
グースかもしれん」

もしテングースが自力で氷を溶かし、デストロンと単身で戦ってい
るとしたら大変である。三人はすぐに山の向こう側へと回り込むよ
うに移動を始めた。

「あれは!？」

サイバトロンはある程度回り込み、ウィゼルドの遠視スコープで爆
発の正体を見る。

そこには、謎の女性八人と戦うキメラトロン、ケルピフォース、サ
ラマーンの姿が。

形勢は女性達が不利だ。

「Who? 誰だあれ？」

「知らんカパー！私に聞くなって！でも、どうやらトランスフォー
マーじゃないぞ」

「おそらく、この魔界の先住民だ！妖怪…あるいはモンスター…ま

ずいな、ピンチのようだ」

「まずいって…HeyHeyHeyオーガコンボイ！助ける気かよ！？」

「当たり前だ！俺達は正義の味方、サイバトロンだ！この世界の生き物だって助けるべきだ！行くぞ！」

「了解カパー！」

「えええ！？」

サイバトロンは女性達を救うべく（一人嫌々）走り出した。

ふもとのビーンズにも爆発音が聞こえた。

「爆発音…始まったんだな、よし！」

ライフルの銃声が辺りに響き、一発の弾丸が放たれた。

デストロンと女性達の戦いは最終局面を迎えていた。女性達はみんな足に傷を負い、まともに動けなくなってしまったのだ。その足は形を崩し、結晶がこぼれている。

「フハハ…我々デストロンに歯向かうとどうなるか…身をもって知るがいい！」

勝ち誇りながらカプリキャノンの砲口を向けるキメラトロン。

サイバトロンはそれを肉眼で確認出来るほどに近づいたが、まだ遠い。

「はあ、はあ、くそ！駄目か！？頼む、間に合ってくれ！」

「アバヨ！」

キメラトロンのカプリキャノンがミサイルを放った。

「やめろオオオ……！」

オーガコンボイの叫び虚しく、ミサイルが女性達に迫る。

もはやこれまでか……！

その時、空中から一筋のビームが放たれた。ビームはミサイルに命中、ミサイルは女性に当たる前に爆発した。

「何イ!?!」

サイバトロン、デストロン、女性達全員がビームの飛んで来た方向を見る。

「イヨォーッ! 此度の真打ちはこの拙僧イヨォーッ!」

ビームを放ったのはテングースだ。

「ヒ…ハー！？な、何故アイツが！？確かにアイツは凍らされたはず…」

テングース開放の影にビーンズの働きがあったことを、デストロンは知るよしもなかった。

「これまでだな、デストロン！」

少し遅れてオーガコンボイ、ウイゼルド、カパルパが到着。既に変身済みだ。

「う…く…！撤退だ！」

「逃がすかイヨーツ！」

サイバトロン四人の加勢で形勢不利とみたキメラトロンは撤退命令

を出す。テングースらサイバトロンの銃撃を背にすることに。

デストロンはサイバトロンの攻撃から逃げるように撤退していった。

サイバトロンの活躍で、女性達は一人も命を落とすことなく戦いは終わった。

サイバトロンを代表してテングースが、女性達と話す。

「我々は、いわば時空の漂流者でござる。このようなことに魔界全土を、お主達を巻き込んでしまい申し訳ない」

女性達のリーダー格が答える。

「私達はこの地に住む『雪女』の一族だ。助けて頂いたことには感謝する。かたじけない。しかし、この地は魔界の中でも神聖な土地。余所者に荒らされたくはないのだ」

「二度とかのようないやう、努めよう」

「かたじけない。私達も、お主達が無事元の世界に戻るよう検討してみよう」

「それはありがたい」

これにて一件落着。全て、丸く収まった。

魔界の協力者も得ることが出来、めでたしめでたし、だ。

「では、我々はこれで失礼いたす」

「武運を祈るぞ、サイバトロン」

「大変だったな、テングース。今回5、6ページほど氷の中にいたんじゃない、寒かったろう」

「ああ、ビーンズの汁粉が食いたい……」

「あははははははは…」

こうして、サイバトロン達は談笑しながら基地へ帰還していった。

雪上の戦い（後書き）

テングース「熱つつ…うむ、汁粉は美味しいなビーンズ」

ビーンズ「小豆万歳だよね…今後もテングースが凍る度に作るよ」

テングース「いや、もう凍るのはこりこりだよー……」

次回、ゴーストウォーズ

『男気一本、マグナムカウ』

…はて、マグナムカウって誰だよー？

ビーンズ「汁粉好きかなあ…」

男気一本、マグナムカウ

とある木々が生い茂る山の山頂付近に、突如ブラックホールのような穴が開き、その穴からポッドが現れ、山の中を流れる川に落ちた。

以前ケルピフォースが誕生した時と同様のものだ。

『警告、ココノ環境ハ危険、環境ニ適応スルタメ、生物データスキヤン開始』

ポッドからスキヤニングレーザーが放たれ、ある生物を捉えスキヤンする。

リーダーでポッドの存在を確認したオーガコンボイとウィゼルドは、早速現場の山に訪れていた。

「ケルピフォースの時のように、またポッドをデストロンに奪われてはまずい。急がねば」

「これ以上奴らに増長されちゃたまんねえぜホントに…」

「全くだな…カパルパ、ポッドまであとどれくらいだ？」

『それが…何故かポッドが移動しているカパー！』

「なんだと！？デストロンがもう…」

「デストロンがなんだって？」

「「！！！？ぐわ！！！」」

基地との通信に気をとられたため、目の前に現れたクロドッグに気づいたのは、彼が放った銃弾をくらった時だった。

「ポッドを狙って来たなサイバトロン共…！生憎、俺が頂くぜ」

「く、オーガコンボイ、変身！ウオオオッ！」

「ウイゼルド、変身！イエス！」

変身した二人は攻撃するが、クロドッグはすぐに木の影に隠れた。

クロドッグはその黒い体故、影に隠れるとなかなか見つけることが出来ない。移動時の音も消してしまふ。

流石はデストロンの隠密兵である。

隠れたクロドッグが草陰から隙を伺い、二人を見てみると、少し離れたところにある川を流れる何かが、視界に入った。

その形は以前、森でも見たことがある。

「ポッドだ！」

「そこか！」

クロドッグは声を上げてしまい、見つかってしまった。オーガコンボイはそこを狙ってホーンガンを発射してくる。クロドッグはそれを回避しながら、ゴーストモードへと変身、ポッドの方に走る。

「ウイゼルド、クロドッグより先にポッドを手に入れるんだ！」

「OK！ゴーストモード！」

クロドッグとウイゼルドの両者がポッドに向かって走る。

先に辿り着いた方がポッドを手に入れ、仲間を増やすことが出来る。

単純だが、仲間を増やすことの重要性は非常に大きい。それは二人もよく分かっておりだからこそ、この単純なレースにも全力で取り組むのだ。

ウィゼルドがどどんクロググに迫る。

「く…くそっ…！」

体力が尽きたのか、クロググのスピードが落ちてしまい遂にウィゼルドに抜かれてしまった。

「Sorry! 悪いなクロググ! ポッドは貰っぜ」

クロググを抜いたウィゼルドはそのままポッドへ一直線に走る。

「フン…クロググ、変身! ウォーン！」

変身したクロググはピストルをポッドに向け発砲した。ウィゼルドはそれに気付かず走り続け、ポッドに追いつき飛び乗る。

「ぐわー！」

ウィゼルドはクロドッグの放った弾丸を受け吹き飛ばされてしまった。クロドッグはこうなることまで計算していたようだ。

邪魔者を始末したクロドッグがポッドを川から引き上げ回収し、サーベルでこじ開けた。

「カラッポ…だど？どういうことだ？」

ポッドには中身が無かった。誰かが既に回収したか…いや、だとしたらサイバトロンかデストロンの仲間どちらかに通信くらい入るはず。回収後に敵に襲われて…倒された、あるいは捕らえられたという事は無いだろう。任務完了の連絡が来るはず。たとえキメラトロン、又はオーガコンボイ単体に連絡したとしても彼らなら他のメンバーに伝えようとするだろう。交戦中だとしても戦況が悪くなれば助けを呼ぶ。

いずれにせよ連絡が来るはずなのに…。無いということは……。

「口からミサイル！」

「ぎゃあ！」

開いたポッドを前に考え事をしていたクロドッグに、オーガコンボイのミサイルが炸裂した。

哀れクロドッグは遠くまで吹き飛ばされた。

「Sorry、オーガコンボイ！ポッドは！？」

クロドッグに撃たれたウイゼルドがやっと到着、ポッドが開いているのを見て愕然とする。

「俺がドジらなければ…クソッ！」

「いや、まだ中身は敵の手に渡っていない。」

「Why?どついつことだ？」

「クロドッグは、開いたポッドの前で立ち尽くし何か考えているようだった。ポッドを開けたはいいが想定外のこと起きたというこ

とだ。

即ち、ポッドの中身は空だった。そして、ヤツがそれに疑問を持つということは、デストロンの手で中身が開放されたのではない、中身が自力で抜け出したんだ」

流石司令官。鋭い洞察力である。

「ウイゼルド、中身を探すんだ。おそらく、何かしらの妖怪かモンスターをスキャンしていると思うが……」

「デストロンより先に接触しねーとな。OK、行くぜ！」

ウイゼルドは一足先に中身を探しに行った。

「こちらオーガコンボイ、ポッドはもぬけの殻だ。全員、ポッドの中身を探してくれ」

基地に通信を済ませると、オーガコンボイも搜索に向かった。

ウイゼルドとは違う方向に向かったオーガコンボイは、森を抜け、先ほどとは別の河原に辿り着いた。

少し見回してみるが、特に何もいないようなので来た道を戻ろうと振り返ると、そこに十二単を着た人間の女性が、人間の赤ん坊を抱いて立っていた。

「なっ…さっきまでいなかったのに…しかも、人間？」

女性はゆっくりとオーガコンボイに近づくと、赤ん坊を差し出してきた。

「な、なんだ…？」

「この子を…抱いて下さい」

「な、何!？」

よく見ると可愛らしい赤ん坊である。この子を見ると、何故か抱き

たくなって来た。その不思議な感覚に戸惑いながらも、オーガコンボイはその赤ん坊を抱くことにした。

女性の手を離れ、オーガコンボイの手に渡っても赤ん坊は大人しかった。

「しかし、鬼の俺を怖がらないんだな…何故この子を俺に抱かせる？しかも半ば無理矢理…」

「……………」

女性はオーガコンボイの質問に答えることなく背を向けると、立ち去るつと歩き出した。

「お、おい……………」

……ぐ……!!?」

後を追いかけてよとしたオーガコンボイは、異変に気づいた。

「お、重い……!!」

なんと、抱いていた赤ん坊が石に変わり、その重さで動けなくなっ
てしまったのだ。

それを尻目に、女性は森の中へと消えてしまった。

「ぐ……一体どういうことだ!？」

オーガコンボイは何故こんなことになっているのか、まだ状況が完
全に把握出来ていないようだ。勿論、これから自分がどうなるのか
も予測出来ない。

すると、女性が消えた森からドドドッ、という、獣が猛スピードで走っているような音が聞こえて来た。

音の主は次第に近づいて来て、やがて森から勢いよく飛び出しオーガコンボイに向かって来た。

音の主は、牛の頭に蜘蛛の胴を持つ体長1メートルを超える妖怪、『牛鬼』だった。

その牛鬼が角を立てて、オーガコンボイに向かって一直線に向かって来る。

「動けない俺を串刺しにするつもりか！グ、ウオオオ！」

牛鬼の突進をかわすべく、石をなんとかしようとするも、石の重さで全く動くことが出来ない。

「く…やむを得ん！オーガコンボイ、変身！」

……く、駄目か！」

変身することも出来ない。もはや八方塞がりである。

牛鬼が迫る。

「…！」「…！」「…！」「…！」

牛鬼の角はオーガコンボイを貫く一歩前で止まった。牛鬼がブレーキをかけたのだ。

「何故止まった！」

そこに、先ほどの女性の声がした。その方を向くと、先ほどの人間の女性…の頭を持った体が長い蛇がいた。

これが女性の正体。彼女は妖怪『濡れ女』だったのだ。

濡れ女と牛鬼が手を組んでオーガコンボイを突き殺そうとしていたらしい。

「彼は動けないッス。動けない奴に攻撃するだなんて卑怯ッス…自分分は、卑怯なことは嫌いッス」

牛鬼が口を開き、濡れ女に反抗する。

「何〜！あの黒い犬が教えてくれたろう！その鬼が我らの縄張りを侵そうとしているのだぞ！」

「黒い犬…！？まさか！」

黒い犬…その単語にオーガコンボイはあのトランスフォーマーのことが頭に浮かんだ。

「もういい！私がそいつを殺してやるわ！」

激怒した濡れ女はオーガコンボイの方に向かって来た。

「やめるッス！」

牛鬼がオーガコンボイに迫る濡れ女に体当たりをくらわせた。濡れ女は一度離れて体勢を立て直す。

「おのれ牛鬼、邪魔するか！こつなったらお前から！」

「いや、もついに」

再度攻撃にいかうとする濡れ女の前に、突如横から現れた黒い犬が立ちはだかった。おそらく濡れ女と牛鬼にオーガコンボイのことを教えた者だろう。

黒い犬がオーガコンボイに向き直り呼びかける。

「フ、惨めだなオーガコンボイ」

「…やはり貴様が、クロドッグ！」

フン、と鼻で笑うクロドッグ。

「お前達はもう消えていいぞ、邪魔するな。」

クロドッグ、変身！ウォーン！」

黒い犬がロボットへと変身する光景に、濡れ女も牛鬼も啞然とする。クロドッグはそんなことお構い無しにオーガコンボイにピストルを向けた。

オーガコンボイは動けない。

「待つツス！さっきも言ったけど卑怯ツスよ！」

「…どけ、どかなければお前から殺してやる」

「嫌ツス！」

「……ならば死ね」

クロドッグはオーガコンボイを庇うように立ち塞がった牛鬼に向けたピストルの引き金を

躊躇わず引いた。

弾丸を頭にくらった牛鬼が数メートルほど吹き飛び、倒れる。

「…なんてことを…！」

これに怒るオーガコンボイだが、石によって動けないためどうしようもない。

クロドッグはピストルをしまいサーベルを抜いてオーガコンボイに近づく。

「フン、俺は忠告したんだぞ、慈悲深くもな…次は貴様の番だ…」

オーガコンボイを切り裂くべく、クロドッグはサーベルを振り上げた。

「やめるッス　！！」

「グッ！」

なんと、先ほど倒れたはずの牛鬼がクロドッグの横から体当たりし、クロドッグを倒した。

これにはクロドッグは勿論助けられたオーガコンボイも驚いた。

トランスフォーマーのピストルをくらったのに、何故牛鬼は生きているのか。被弾した場所から血も出てない。

「卑怯なことはするなって言ってるんスよ！！まだやるといふなら、本気で行くッスよ！！」

「ク…！！さっきは当たりどころが悪かったよつだな…」

…本気？いいだろう、たかが妖怪風情がトランスフォーマーの俺に何が出来るんだ？」

「自分、こんなことが出来るんスよ…」

マグナムカウ、変身！オツス！」

牛鬼が機動音と共に変形し、二足歩行のロボットに変身した。

彼はトランスフォーマーだったのだ。

「何っ!?!?」

更にビックリしたクロドッグとオーガコンボイ。

「まさか、お前があのだの中身だったのか！…我らのデストロ
ンに入って…くれないだろうな…ならば生かしてはおけん！」

クロドッグはこの牛鬼のトランスフォーマー、マグナムカウの始末
を決意。サーベルで斬りかかった。

一方、マグナムカウは、変身後割れて両肩に来ていた牛鬼の頭を外
し、手甲のごとく左右の腕に装備した。

左の手甲でサーベルを受け止め、がら空きになったクロドッグの腹
を右の手甲で殴る。拳と共に角も突き立てられ、クロドッグは苦痛
の表情を浮かべた。

そこからマグナムカウはラッシュを仕掛けた。

「オス、オス、オス、オス！！」

「ガハ、グツ、グオ！」

「ウオオツスウウ!!」

最後は渾身の一撃で、クロドッグをぶっ飛ばす。

その際にマグナムカウはオーガコンボイの動きを封じていた石を殴って破壊した。

「礼を言つぞマグナムカウ！」

オーガコンボイ、変身！ウオオオツ！」

石がなくなり、遂にオーガコンボイも戦闘体勢がとれるようになった。

クロドッグが起き上がると、目の前に二体のトランスフォーマーがまさに威風堂々という形で並んで立っている。

「チッ、これでは分が悪いな…」

「ゴーストモード！」

形勢不利を悟り、クロドッグはゴーストモードになって森に入り撤退していった。

「あの黒い犬が自分達を利用してたなんて…あんたには迷惑かけたツスね」

「いや、いいんだ。結果的にマグナムカウ…お前を見つけることが出来たからな」

「へっ…？自分を…ツスカ？」

マグナムカウは突然自分を探していたと知らされ、きょとんとする。

「俺はオーガコンボイ。宇宙の平和を守るサイバトロンの司令官だ。実は、お前を仲間として迎えたい。」

さっきの黒い犬…クロドッグも所属しているデストロンと戦ったために、戦力がほしいんだ。お前のように強い戦士がな…。

強制はしないが…どうだ？仲間になってくれないか…？」

結構直球で誘うオーガコンボイ。だが、そんなところが彼らしい。

「自分は、この世界で生まれてからその蛇女と一緒に、さっきあなたにやったように獲物を殺していたツス…自分はなんて卑劣なやつだと思っていた。これが妖怪の縄張り争いで生きるためだと言われたら仕方ないツスが…それでもやっぱりやりたくなかった。

でも、自分は妖怪じゃない…トランスフォーマーツス。なら、トランスフォーマーとして、卑怯なことを捨てて生きたい！

自分でも、役に立てるなら喜んで！」

「…いい答えだ。ではサイバトロン基地へついて来てくれ。お前をみんなに紹介したい。」

「オツス！」

二人はゴーストモードで基地へと向かった。その後マグナムカウがサイバトロンのメンバーに歓迎されたことは言うまでもない。

こうして、マグナムカウがサイバトロンに加わった。

「な…なんなのよあいつらは…？」

濡れ女は目の前にいた妖怪達がロボットになる状況に頭がついてい
かなかつた。

新キャラクター

特殊戦闘員マグナムカウ

サイバトロン。牛の頭と巨大な蜘蛛の胴体を持つ牛鬼をスキャン。

正々堂々を好む。真面目かつ頑固で融通が利かず孤立することもし

ばしばはあるが、仲間への情は厚く、ここぞという時には頼りになる。
口癖は「ッス、又はオッス」。

変身は胴体の後ろ半分（後ろ足四本分）の背中が開き畳まれていた
ロボットモードの足が登場、開いた胴体は上腿に装着する。残った
前半分の胴体は胸が開いてロボットモードの体が登場。牛の頭は左
右に割れて肩当てになる。この際、ロボットモードの頭が牛の頭の
跡に残る。

武装は肩当ての牛の頭を拳に装着するマグナグローブ。両拳に装着
した状態での格闘戦が得意。ピストルも持っているがあまり使うこ
とを好まない。

男気一本、マグナムカウ（後書き）

マグナムカウ「オッス！自分、今回初登場の新人サイバトロン、マグナムカウッス！まだまだ未熟な自分ッスが、よろしく願います！」

次回、ゴーストウォーズ

『海上の大決戦！』

更新は多分早くないッス…」

海上の大決戦！（前編）

ここは海。耳をすませば聞こえて来る、シヨキ、シヨキとたくさん
の粒を転がしているような音。

魔界のパトロールに出ていたサイバトロンの戦士ビーンズが、海で
小豆を洗っている音だ。

「小豆とって食おか〜汁粉にして食おか〜」

妙な歌を歌うほど機嫌が良いようだ。

ひとしきり洗うと、その小豆を一粒つまみ、口に入れる。

「……………しょっぱ……………」

海水って本当にしょっぱいのだ。

そんなビーンズの後ろ頭に、何かを押し付けられる。筒の形をして
いるようだ。

「動くな……」

「うわあああ！……！」

不意の出来事に、ビーンズはかなり慌てた。

「あっはっはっ！Hey、ビーンズ、俺だよ」

その声に振り向いたビーンズが見たのは、ピストルを持ったロボット

トモードのウイゼルドだった。

「ウイゼルド！脅かすなよな！」

「Sorry、ビーンズ。けどよ、小豆を洗っている時のお前、隙だらけだぜ。全く、何が楽しくて小豆洗ってたんだか」

言い終わった後ゴーストモードに戻るウイゼルド。そのウイゼルドに、ムツとした表情のビーンズが子供のように食ってかかる。

「なんだよ！小豆を馬鹿にするのか！？小豆つてのはなあ、縁起物なんだぞ！」

「いや、小豆を馬鹿にしてる訳じゃ…とにかく、注意しろって言っているんだ。いつデストロンが攻撃して来るか…」

「…同感」

「だろ？」

……ん？」

ウィゼルドとビーンズが第三者の声がした方に振り向くと、緑色で鋭利な形状をしたミサイルが目の前に迫っていた。

当然避けることは出来ずに二人ともくらった。

「いつ俺達が攻撃するか…分からない」

ミサイルの軌道を辿ると、数メートル先にケルピフォースが立っていた。

「ビーンズ、変身！シヨキシヨキー！」

「ウィゼルド、変身！イエス！」

二人は変身後早速ピストルで反撃。しかし、ケルピフォースは海岸に生えている木を盾にしてそれを防いだ。

とはいえ二人がかりの銃撃。木の左右どちらからでも一步出ればそこをやられるだけの弾幕が自然と張られている。

冷静なケルピフォースは動じることなく、おもむろに背中 of 魚の尾からフィッシュブレードを引き抜き、自分が隠れている木を切った。更にその木を蹴って傾ける。

ビーンズとウイゼルドは倒れかかる木を左右に跳んでかわしたが、その瞬間、二人に自然と隙が出来たところを、ケルピフォースはメインズランチャーで狙撃した。

「うわわ、このこの！」

「くっ！」

空中で身動きがとれない二人はピストルを連射。ミサイルを撃ち落として防御しようとする。

射撃が得意なビーンズは迫るミサイルを撃ち落とすことに成功した

が、ウィゼルドはくらってしまった。

吹き飛ばされたウィゼルドは海に転落。

「…チャンス…ゴーストモード…」

ケルピフォースはゴーストモードになると、ウィゼルドを追って海に飛び込んだ。

「なっ…ウィゼルドを水中で潰そうっての！？させるか！」

ピストルを構えるビーンズだが、ケルピフォースはウィゼルドを捕まえあっという間に沖近くまで行ってしまった。

「くそくそくそお！」

やけくそに撃つしかなかった。当然当たりはしない。

ウイゼルドの背後に、何かの影が見えたからだ。

ウイゼルドの背後に迫るオレンジっぽい色の鮫のような背ビレ。ケルピフォースは慌てはしないものの、一体なんだと思って見ていた。

「グッ!？」

見ているうちに後頭部に強い衝撃が走った。

振り向くと弾丸が的確にこちらに飛んで来ている。

「そりゃ、そりゃ!」

ビーンズが海岸からスナイパーライフルで狙撃しているのだ。以前雪山でテングースを救った物ほどの長さは無いが、海面のケルピフオースを狙うには十分なようだ。

つまり、今ケルピフオースは挟み撃ちにあっている。

「……ケルピフオース、変身……」

ケルピフオースはより正確に狙ってくるビーンズの始末を優先、変身しメインズランチャーを放つが、先ほどのように撃ち落とされる。

(…かわした方がいい)

そう判断したケルピフオースは体勢を変えようとするが、この時、ウイゼルドの弾丸が飛んで来ないことに気付いた。

ウイゼルドのいる方を向くと、彼が忽然と消えている。妙だと思っ
て潜ってみると、何かに引っ掛けられて連れ去られていくウイゼルドの姿があった。

やがて、見えなくなってしまった。

この異変に気付いたのはケルピフォースだけではなかった。ビーンズもライフルのスコープで見っていたのだ。もつとも、水中は見えてないのでウイゼルドが消えたとしか……。

やがて、海からケルピフォースが上がって来た。未だ信じられない、という顔だ。

そのケルピフォースに、ビーンズはピストルを向ける。

「このやろつ！ウイゼルドをどうした！何をしやがったんだあッ！

」！

「……奴がどうしたというなら……こっちが聞きたい……」

そう吐き捨て、ケルピフォースは去っていった。ビーンズは彼を撃つことなく、ただ考えていた。

「こっちが聞きたい……？ケルピフォースの仕業じゃないとしたら、第三者の仕業……？」

テングースは海上を飛行していた（ゴーストモード）。あのあとピ
ーンズはすぐに基地へ帰還しウイゼルドのことを報告、テングース
が調査に来たというわけだ。

「これだけ探して見つからないということとは…相当遠くまで連れて
行かれたか、あるいは深いか…もし深い方だとしたらまずいな…あ
やつは水中じゃ溺れてしまう」

もしそうだとしたら、ウイゼルドの命が危ない。いや、もしかした
ら既に……

「……ええい、そんなことはない！必ず生きている！」

ウイゼルドの生存を信じているが、マイナスにしか傾かない思考に
鞭打ちながら、テングースは搜索を続けていた。

「……あれは…なんだったのか…」

ケルピフォースは冒頭の海岸に来ていた。ウイゼルドを連れて行った何かが気になるようだ。

ケルピフォースはキメラトロンにウイゼルドのことを報告した。キメラトロンはサイバトロンが一人消えたと喜んだが、ケルピフォースはどうにもすっきりしないらしく、この海岸にやって来たのだ。

「対処法を模索するか…あるいは始末しなければ…俺が危ない…」

あのヒレはサイバトロンのみを狙う訳ではない。となれば、デストロンでは唯一、水中戦に対応可能な彼が最も危険となる。捕まってはまずいと踏んだのだ。

「あの時、接近に全く気づけなかった…気をつけねば…」

ケルピフォースは海へ飛び込み、海中を走るように移動し始めた。

何かに引っ張られていく感覚を感じたのは、水中に入って数分後、
沖に出た頃だった。

海の上のある島……

「……………」

灰色の馬が海岸で目を覚ました。目覚めてすぐに辺りをキョロキョロ

口と見渡す。

「ここは一体……」

「さあな」

灰色の馬が声のした方を向くと、そこにはかまいたちがいた。
その姿を確認した馬はすぐに起き上がり警戒する。

「貴様は……！」

「どつちやらお前も、あのヒレに連れて来られたらしいな」

「ち……ケルピフォース、変身……」

灰色の馬、ケルピフォースはかまいたち、ウイゼルドと戦うため口ポットモードになった。

しかし、

「うっ……!?ぐあ……!」

突然苦しみ始めた。

「やめといた方がいいぜ、ここは特に妖気が強いからな。変身なんてしたら寿命縮むぜ」

「……………」

何も出来ないので、仕方なくケルピフォースはゴーストモードに戻

る。

「通信も届かないし変身も出来ない。海に出ればまたあのヒレ野郎に捕まる。…八方塞がりってやつさ」

「……………どうする気だ」

「さあな、待つしかないんじゃないのか？」

ウイゼルドはそれだけ言うとケルピフォースから十メートルほど離れて座り込んだ。

「……………」

そんなウイゼルドを見て戦ってもしょうがないと思えてきたのか、ケルピフォースもその場に座り込み水平線を眺め始めた。

海上の大決戦！（前編）（後書き）

ウィゼルド「Hey guys! 謎の島に来たかまいたちのウィゼルドだ。」

なんかこの話、作者の予想以上に長くなりそうだから、前中後編に分けることになったぜ。

バランスがおかしくならなきゃいいけどな。あと俺とケルピフォー スどうなるんだろうな……

次回、ゴーストウォーズ

『海上の大決戦！（中編）』

Please looking forward to the
next!（次回をお楽しみに!）

海上の大決戦！（中編）（前書き）

前回の投稿から忙しい時期が続き7月になってやっと解放されました。

2ヶ月以上もの間お待たせしました。

海上の大決戦！（中編）です！

海上の大決戦！（中編）

「よし、出来たぞ！」

サイバトロン基地でカパルパが高らかに叫んだ。目の前には大きな金属製のボート。後ろにはスクリューがついており、オールやパドル無しでもこれを回して進める仕様のようだ。

「こんなので本当に海に出れるのかあ？」

「うるさいカパー！即席としては上等だろう！早くウィゼルドを見つけないいな」

そう、サイバトロンはこれに乗って海に消えたウィゼルドを探そうとしていたのだ。

テングースがまだ空から探してくれてはいるが、みんなやはり心配で動きたいのだ。

そこで、カパルパがボートを作ったのだがビーンズの言う通りちょっと不安なもの拭えない。

「行きましょう！ウイゼルドが心配ッス！」

「ちょ、ちよつと！マグナムカウ！本当にこれで行くのかよ！？待ってればテングースがきつと見つけるさ！僕達にまで何かあったらどーすんの！？」

「何かあっても退くつもりはないッス！てかウイゼルドにあった何かを放っておけないッス！」

ビーンズが必死に止めようとするが、マグナムカウの意志は変わらない。

オーガコンボイやカパルパも、行く気満々だ。

「ビーンズ、なんならお前は基地に残るか？」

オーガコンボイがビーンズに呼びかける。

ビーンズは少し俯き、

「どうせ行かなきゃなんないんでしょ！」

と毒づいた。

しかし、毒づく割には、どこかすっきりした表情…なんだかねで、やはりビーンズもウイゼルドが心配でたまらないのだ。

「みんな、行くぞ！」

「『『オ　　ッ！』』」

一方、デストロン陣営も一向に戻って来ないケルピフォースに疑問を持っていた。

ヒドラヒドラの操作するコンピュータの画面をキメラトロンが凝視する。

「どうだヒドラヒドラ、ケルピフォースの居場所は掴めたか？」

「相変わらず捕捉も通信も不可能だキシヤー。余程妖気が濃い場所にいるか、やられたのか…」

「ヒーハー！まったく勝手に出歩いてやられたとあっちゃあ何かに連れ去られたとかいうウイゼルドより間抜けじゃねーかよ！」

ヒドラヒドラの返事を聞いていたサラマーンはそう吐いた。

「ケルピフォースはそんなタマじゃない。あいつは決して無駄なこととはしない、何か理由があるはずだ。戻って来ないのもその理由に関係あるんだろう」

クロドッグが冷静に言った。

「確かに…そうとなればケルピフォースを失うのは惜しい。探すでしょう。」

インプット、クロドッグ、サラマーン、お前達で探しに行け。ヒドラビドは引き続きケルピフォースへ連絡を試みる」

命令を受け、三人はすぐさま基地を出発した。それを確認し、キメラトロンも出ようとすする。

「キメラトロン様もケルピフォースを探しに？」

「いや、私はウィゼルドが消えたという海に行ってみる。少し妙な予感がするんでな…」

連絡を怠るなよ、とヒドラビドラに釘をさし、キメラトロンも基地を後にした。

「ここだよ！ウイゼルドがいなくなった海は！」

ビーンズを先頭にカバルパ、一度帰還したテングース、そしてボートを運ぶオーガコンボイとマグナムカウといったサイバトロン達はウイゼルドを探すため海にやって来た。

「よし、マグナムカウ、下ろすぞ！」

二人は砂浜と水のギリギリのところにボートを置いた。

「この海でケルピフォースと戦って、でもウイゼルドがケルピフォースに海に引きずり込まれて…あとはよく分からない。気付いたらウイゼルドは消えてたんだ。ケルピフォースがやった訳じゃないし、何も知らないみたいだ」

「つまり我々トランスフォーマーではない…とすると魔界の者が…
前のようなことも考えられるな」

オーガコンボイの言う前のようなことは、以前雪山でテングース
が雪女に凍らされた時のことである。

本来この魔界にとってイレギュラーな存在であるサイバトロンとデ
ストロンの戦闘によって、縄張りを侵されたことに怒った妖怪やモ
ンスターの仕業である可能性が存在するということだ。

だとしたらこちらの落ち度もあり、穏便に済ませたいところである。

「とにかく、ウィゼルドを見つけねば始まらない。海へ出るぞ、覚
悟はいいな！」

オーガコンボイのまとめの一言に、全員がオウと頷くと、テングー
スを除く全員がボートに乗り込んだ。

テングースは空を飛んでついていくようだ。

「サイバトロンめ…全員集合して一体ここで何をやっているのだ…？」

海岸でボートを準備するサイバトロンを、キメラトロンが隠れて様子伺っていた。

ウイゼルドを消した何かになり海へ向かったキメラトロンだったが、サイバトロンがやって来たためこうしているのだ。

「……そうか…消えたウイゼルドを探しに行くつもりだな…ククク…」

キメラトロンは何かを思いついたらしく、主人格であるライオンの口角はつり上がっていた。

一方サイバトロンは、そんなことなど知らずカパルパによってボートのエンジンをかけ、沖へとくり出した。

「今だ！キメラトロン、変身！グワアオオオ！」

「沈めエ！」

変身したキメラトロンは海岸からサイバトロンを狙いレオキャノンとカプリキャノンを発射した。

「うお！？」

ボート上のサイバトロン達は突如現れ砲撃してきたキメラトロンに驚き慌てるサイバトロンだったが、弾が飛来していないテングースが外から分析した。

「落ち着くイヨー！幸い拙僧達は海岸から遠くにいるから命中率は低い！現に全然当たっておらぬだろう」

テングースの判断に冷静になったサイバトロン。慌てるのをやめそのまま進むことに。ビーンズなんかお尻ペンペンまでしだす始末。

しかし、オーガコンボイがただ一人、顔を青くしていた。

「……違う！海岸から遠いからこそまずい！ヤツはボートを破壊し俺達を海に落とす気だ！」

「どういうことツスカ！？溺れさせるより直接自分達を攻撃した方が早いじゃないツスカ！？」

叫ぶオーガコンボイに、マグナムカウが問う。

「分からないか！？この海はウイゼルドが消えた海だぞ！俺達が海に落ちて助かる保証は無い！むしろ俺達もウイゼルドの二の舞だ！」

「……」

言われてみれば確かに、キメラトロンの攻撃は足元付近に着弾しているような気がしてきた。

しかも、着弾位置がだんだん近づいてきている。

それは即ち、キメラトロンが距離感を掴んできているということだ。

.....

「カバルパ、被弾しないようにボートを動かせ！ テンゲース、お前は直接キメラトロンに向かい俺達が射程範囲外に出るまで堪えてくれ！ マグナムカウ、お前は海中を見張れ！ ビーンズと俺でテンゲースの援護及びキメラトロンへの威嚇射撃だ！」

「.....うおおおおおおお！！！！」

ようやく危機感を覚えたサイバトロン達はオーガコンボイの命令を受け素早く行動を開始。

カバルパはボートをジグザグに操作して飛来するビームとミサイルを避け、テンゲースはキメラトロンに切りかかりに行き、マグナムカウは海に注意を払い、ビーンズとオーガコンボイはひたすら所有武器を連射した。

「沈め沈め！ハハハハハ！」

面白いように両キャノンを撃ちまくるキメラトロン。オーガコンボイとビーンズの威嚇などものもしない。二人の武装はキメラトロンより射程が劣るため狙いが定まりづらく、仮に狙えても威力が保てないのだ。

ビーンズのスナイパーライフルがあれば別だが、今回は邪魔になるため持ち込んでなかった。

増してやボートはカバルパが作ったとはいえ所詮即席。安定感も優れものとは言えず動作も単調であり被弾するのも時間の問題だ。

「うわあああ！やっぱボートは精密さに欠けるよおお！カバルパア！いつそボート押してエエ！」
「何を言うビーンズ！わたしや水中用だけど今の海には入りたかないわいいい！」

…相当パニックっている。

「では、トドメといくかな…？」

ゆっくりと両キャノンを構えるキメラトロン。今度は外さないというしつかりした構えだ。

「既に距離感も回避速度も掴んだ…逃がさんぞ…」

海底散歩にご招待!」

「させんイヨーツ!」

キメラトロンがキャノンを発射する瞬間、上からテングースが飛びかかり左右のキャノンにレフトバスターとヒートセンスパイクをぶつけた。

これによりキャノンは下を向き、哀れ放ったビームとミサイルがキメラトロンの足元で爆発した。

「うぼわっ!」

「……ぐっ……!」

テングースはキメラトロンがダメージを負ったことを確認し、その場を立ち去りサイバトロンのポートへ戻っていった。

テンゲースの背中を見送ったキメラトロンはようやく立ち上がり、
ゴーストモードへと戻った。

そして、何かを考え始めた。

「カバルパが海に入りたくない……か……そういえばあの牛……マグナムカウ海中
を見張っていたな……海中に何かがいる……」

まさかケルピフォースのヤツ……」

「……いつになったら助けが来るだろうな？」

「……知る訳がない」

……

「……まあ、こんな時でないとのんびり出来ねーかな、なあ？」

「知らん」

……

「……あの背ビレの化け物はなんだろうな？」

「さあな」

……

「あ　　っ、クソ！」

とある島…背ヒレに連れ去られたかまいたち、ウィゼルドは絶叫していた。そしてキツと絶叫の原因であるケルピー、ケルピフォースを睨む。

「HeyHeyHey！張り合い無さすぎるぜ！もつとこつ、会話しようぜ！」

「サイバトロンとする会話などない。俺達は敵同士だ。本来なら変身して戦闘するだけだ」

「妖気が強くて無理だつて！仮に変身出来たとして、こんな小さな島で戦ったところで虚しいだけで何の意味もないぜ！」

「お前がサイバトロンで俺がデストロン、それだけで戦う意味となるだろう。ここが島なら逃げ場なく、どちらかがくたばるまで戦っただけだ、会話の余地もない」

「戦いたくはねーけど戦うならまだ気が紛れらあ！今この場合をどうするってんだよ！」

「前回のラストで待つしかないと言ったのは貴様だろう」

「あゝ？過去のことは忘れようぜ」

「……………（汗）」

退屈に耐えられないウィゼルドはその後も無関心無表情、馬の耳に念仏馬に話しかけ続け、ケルピフォースは歩く言葉ガトリング、言葉のピッチングマシンかまいたちを無視しながら、サラマーンに似てるななどと考えていた。

……………なんとなく、平和だった。

海上の大決戦！（中編）（後書き）

キメラトロン、キメラトロンだ。海は広い…世界も広い…海を越えたら外国だぞ外国！そして世界は海に点在するたくさんのお国で成り立つ。我々のいる場所は世界のちっぽけな一部分でしかないのだ！

…ん？魔界に外国なんて概念あるのか？まあいいか。

次回、ゴーストウォーズ

『海上の大決戦！（後編）』

次はなるべく早く更新するからな…少なくとも2ヶ月も空けません
…」

海上の大決戦！（後編）

「ゴーストモード！……ふう……」

キメラトロンを振り払い、ゴーストモードへと戻るサイバトロン。

ウイゼルドを連れ去ったものの危険性があるため戦闘用ロボットモードでいたいところだが、妖気があるため仕方がない。

「奴ら、また追って来るツスカねえ……？」

「十分あり得るカパー、それもデストロン総出で。ヒドラヒドラならこの程度のポート作れるだろうし……」

「こんなことなら、僕のライフル荷物になっても持って来るべきだったな……」

仕留め損ないはしたが、キメラトロンの攻撃はサイバトロンを疲弊させるには十分だった。

ウイゼルドが消えた海の上におり、いつ自分達も同じ目に合うか分からない恐怖に加わった疲弊の影響は大きかった。

出発前の覚悟と気合いも簡単に消えてしまい、不安や恐怖といった

負の要素だけが全員の心に残った。

海上のため補給も出来ず、彼らを支えるのは気力のみ。

しかし、サイバトロンの気力は尽きかけている。まとめ役のオーガコンボイでさえもこの気力低下を打開させることが出来なかった。

(……………あいつがいれば……………)

赤い鬼の司令官は今ここにいない、仲間のかまいたちを思い出す。

彼なら、持ち前の明るさでこの空気をも変えてしまえるだろうに、と……

しかし、オーガコンボイは知らない。その空気チェンジャーは今、ケルピフォースという空気お構い無し不動マウンテンによって、サイバトロンメンバー達と同様の状態であることを……

というか会話出来る相手がいないので（ケルピフォースと出来る訳もなく）、ある意味こっちが危険かもしれない。

その頃、デストロンは一旦ケルピフォースの搜索を打ち切り、基地に招集していた。キメラトロンの指示によるものだ。

メインルームに輪になって集まったデストロンの中央に立ち、キメラトロンが喋り出す。

「荣誉あるデストロンの諸君、まずは聞いてくれ。私は先ほどウィゼルドが消えた海岸へ行ってみた。そこにはサイバトロンの連中がちゃっちいボートに乗ってウィゼルドを探しに行くところで、奴らを逃がしはしたがある会話を聞いた」

主人格であるライオンの頭がそう言つと、ヤギの頭が喋り出した。

『「うわあああ！やっぱボートは精密さに欠けるよおお！カパルパア！いつそボート押してエエ！」」

「何を言うビーンズ！わたしや水中用だけど今の海には入りたかないわいいい！」」

記憶能力の設定がありながら今までミサイルを吐き出す以外使われることのなかったヤギの頭は、前回のビーンズとカパルパの会話を再現した。

「今の会話がどうしたんです？」

クロドッグが質問をぶつけた。今の会話を聞かされてもなんのことだが、キメラトローンの意図が分からない。

「それは少しずつ伝えていくさ。ちよつとずつ明かすからミステリー物は面白いのだよ」

少しずつ明かすのであれば…と、クロドッグはとりあえず黙って聞くことにした。

「カパルパは水中用だけど海に入るのを拒んだ。何故ならウイゼルドを連れ去ったものに対する恐怖があるからだ。」

ここからは私の想像だが、我々の中で海で戦うとしたら、間違いなくケルピフォースだろう。つまり、ウイゼルドの二の舞になる可能性が一番高いのがケルピフォースだ。そしてヤツは冷静過ぎるゆえあらゆることに対して状況を良くするために事前策を整えるタイプだ……」

「まさか…水中戦における不安要素を取り除こうとして……？」

「私には何かそんな気がしてならないのだ……」

ざわ…ざわ…

「じゃあアイツ馬鹿じゃねーかよ」

サラマーンの一言でその場は締め括られた。

今のところ無事に航海を続けているサイバトロン達。

彼らに乗せたボートに、天狗が飛んで来た。

「テングース、どうだ？」

「あつちに島が見えたイヨーツ、ウイゼルドがいるかどうかまでは見ていないが…」

この航海初の発見だ。

「…可能性はなきにしもあらず…だな…行ってみよう。先導してくれ」

カバルパの操るボートはテングースに付いていく。

しばらくすると割と大きな島が見えた。広い範囲に渡って木々が生い茂るところを見ると、島の上はジャングルになっているらしい。

「見えてきたな…」

「見えてきたのは島だけじゃないみたいだよ…」

サイバトロンが島を見る中、唯一俯いているビーンズの言葉に全員が下を見ると…

ボートの周りが七、八の三角の背ヒレ…つまりサメに囲まれていた。何故か体色はオレンジに近い。

そう、ウィゼルドを連れ去ったあの化け物だ。

「カバルパは操縦に専念しろ！他は全員変身し、サメを牽制しつつ島に乗り込むぞ！」

「テングース、

「ビーンズ、

「マグナムカウ、

「オーガコンボイ、

「『『『変身！』『』『』」

ロボットモードになり銃器を構えるサイバトロン。勿論殺しはしない。ただ威嚇射撃で驚かせて、化け物を近づかせないようにするだけだ。

しかし、

「「「」」」ぶぐう……ぐあ……！？」

ゴ、ゴーストモード！」「」「」

なんと変身した全員が早くも妖気にやられてしまい、耐えられずぐにゴーストモードに戻ってしまった。

「おお…かなり妖気がキツイようだカパー…」

ボートを操縦しながら傍観していたカパールはあっさり言った。

サメが噛みつこうと飛び出して来る。またあるサメは尻尾を振るい、船の上のサイバトロンを叩き落とそうとして来る。

叩き落とされてしまえばたちまち七、八匹のサメに噛みつかれ、破

壊されずともかなりの痛手を負っただろう。

修理出来る環境もない。

「カパルパ！振り切るんだ！」

オーガコンボイは飛びかかるサメをぶん殴りながら指示を出した。

指示を受けてカパルパはボートのスピードを上げるが、サメも負けじと追って来て飛びかかる。

オーガコンボイは殴り倒し、マグナムカウは頭突きで落としていた。ビーンズは小さくかがんで怯える。テングースは上空エスケープ。

「テングース何やっとなんじゃあああ！！！」

オーガコンボイの怒号が響く。焦りからか、ややキャラが崩れている。

「勘弁してイヨーツ……」

「これだけのサメを俺達で対応するのは厳し……」

突如、右腕に違和感と重みを感じたオーガコンボイは、意識をテングースから右腕に移した。

右腕には、上腕までサメが噛みついていて、かなり顎の力が強く、ロボットの体にも牙が食い込んでいる。

違和感の正体は、痛覚だったようだ。

一方、カバルパとマグナムカウは進行方向を向いて青ざめていた。サメに気をとられて気づかなかつたが、いつの間にかポートは島に接近していたのだ……。だがし過ぎていた。

「「うわあああ!!」」

「痛あああああ!!」

「神様仏様イエス様マリア様小豆様……!!」
ビーンズ

お間抜けな姿を晒しつつ、サイバトロンは島に到着……衝突した。

「拙僧マジ天狗で良かった……」

上空から天狗がポツリ。

「なんだ今の音は？」

「分からん……」

島の上でする事もなくぼーっとしていたウイゼルドとケルピフォー
スは、島の裏側から聞こえた派手な音の正体を見るべくジャングル
を突っ切っていた。

かまいたちとケルピー（馬）だけあってかなり素早い二人はすぐに
島の裏側の海岸に到着した。

「おっ？オーガコンボイ!？」

ウイゼルドが最初に発見したのは、腕に化け物をくっつけて仰向け
に倒れたオーガコンボイだった。

「ウイゼルド…！ここにいたか…！」

ええい流石にうつつうしい!！」

ウイゼルドを発見し立ち上がろうとするオーガコンボイだったが、
杖にしようとした右腕にくっついていてはサメが邪魔。サメを地面に

叩きつけ、その反動で上体を起こし、そのままサメなど気にしないといった感じで右腕を杖に使って立ち上がった。

立ち上がりきった時、気絶していたサメが右腕から剥がれ落ちた。

流石に可哀想と思ってたか、尻尾を掴んで海にぶん投げて帰してやった。

帰してやったというが、この一連の行為はサイバトロンのものとは思えなかった。

「ウイゼルド…！随分探したイヨ…ッ」

次にウイゼルドの元にやって来たのは上空にいたため無傷だったデングースだった。

「デングース！Sorry…あの化け物、気配を感じさせずに俺をさらっていったんだ」

「拙僧達は海を警戒していた故助かったのだな」

なんて会話をする内に、船の激突で吹っ飛んでいた他のサイバトロ
ンらが次々とウィゼルドとの再会を喜んだ。

「ちっ……」

サイバトロンが大勢現れたことでケルピフォースは舌打ちし、その
場を後にしようとした。

「待て、ケルピフォース！」

呼び止めたのは赤い鬼…

オーガコンボイだ。

後ろから呼び掛けられたケルピフォースは立ち止まり、首をわずかに声の主、オーガコンボイへと向ける。

体勢は立ち去ろうとする状態のまま、目だけでオーガコンボイを捉える。

「ケルピフォース、お前は元々サイバトロン。我々のところに戻ってくる気はないのか？」

「ウェイゼルドと一緒にいて彼に手を出さなかったのは、少しでもサイバトロンとしての心があるからではないのか？」

「俺がそいつに手を出さなかったのは変身出来ないからだ。ロボットモードでなければ戦うことはままならない」

「お前の脚力と蹄があればゴーストモードでも戦うことは不可能ではない。ウイゼルドも変身出来ないのだから、条件は五分だったはずだ」

「……………」

ケルピフォースは一度オーガコンボイから視線を反らして考える。

確かに戦えないことはなかった。ケルピフォースにとってはただ単にその発想が出来なかったし、ウイゼルドもそのつもりはなかったからというだけだったが、言われてみれば何故手を出さなかったのだろうという疑問も多少はある。

まさか、オーガコンボイの言う通り自らがサイバトロンとして目覚め始めているというのか。

その自問自答は、表には沈黙という形で表れていた。

ケルピフォースを説得するオーガコンボイは、その沈黙に僅かながらも期待を抱いていた。

しばらくの沈黙の後、ケルピフォースは視線を反らしたままで口を開いた。

「俺は……………」

「俺はデストロンだ。」

プロトフォームの時はどうだったか知らないが、少なくとも今はデ

ストロンだ。

俺がそいつに手を出さなかったのはたまたまだ。今でも俺はカメラトロン様に従うし、ここが変身可能な環境であれば、そのかまいたちは今頃粉々だったろう」

何を！ 返り討ちだぜ、と喚くウイゼルドを制し、ケルピフォースの目を強く見据えるオーガコンボイ。

それに対しケルピフォースも目線で応えた。今告げた自分の意志は本物である、と。

「おお、いたかケルピフォース！」

声のした方を振り返ると、サイバトロンよりも立派なボート（ヒドラヒドラ作、性能重視で作製）に乗ったデストロン陣営。

声をあげたのはキメラトロンだった。

キツ、とキメラトロンを睨むオーガコンボイ。

それに対し睨み返すキメラトロン。

キメラトロンに対してはもう説得の余地もない。

問答無用、戦って倒すしかない。すでに二人の間にはその法則が
出
来
上
が
っ
て
い
た。

つまり、それに従うケルピフォースも、倒すべき相手となっている。

いや、なったのだ。

ケルピフォースは無言のままデストロンのボートに飛び乗ると、キ
メ
ラ
ト
ロ
ン
に
耳
打
ち
を
し
た。

それを聞いたキメラトロンがサイバトロン達に向かって叫ぶ。

「本当なら貴様らをここで叩き潰したいところだが、ここでは変身出来ないようだしな。」

航海の第一目的であるケルピフォースも見つけたことだし、今日のところは引き上げてやろう。また今度会おうサイバトロン！

そいつから無事に逃げられたならなあ！フハハハハ！」

そう言ってデストロンは去っていった。

「そいつってなんのことスか？」

「知らないね、負け惜しみ…でもないよなあ戦ってないし…」

「……ん…おわわあ!？」

マグナムカウとビーンズがそんなことを言っていた直後、凄まじい揺れが襲った。

「なんかヤバいカパー！みんなボートに乗れ！」

カバルパに言われるまま、岸に若干埋もれたボートを引っ張り出し次々飛び乗るサイバトロン達（テングース除く）。

全員が乗ったことを確認すると、ボートは猛スピードで岸を離れた。

ある程度島から離れると一旦ボートを止め、島の方を見る。

島は何故か上下運動していた。浮き上がったたり沈んだりを繰り返しているのだ。

やがて島の上の木が揺れに耐えられず、へし折れた。

へし折れた木は島の上で跳ねながら次々と海に落とされていく。

最後の一本が海に落ちる瞬間、岸の先に新たな薄いピンクの地面がチラリと覗いた。よく見ると波打って動いている。

そうまるで、エイのヒレのようだ。

「エイ…だと？」

島がどんどん沈んでいく。奇妙なことに、前のめりになるように端から徐々に徐々に沈んでいつている。

そして最後の一日が沈んだ時、それまで島があった海面上に薄ピン

クの巨大な鞭のようなものがしなるようにして点を向いたあと、沈んでいった。

全てを見届けたサイバトロン達は、全員目が点のようで、口も間抜けに開いていた。

「ウ、ウイゼルド…どうやらお前、あのでかい妖怪の上にといたらしいな……」

沈黙の後、オーガコンボイが顔をそのままにウイゼルドに話しかけたが、あまりの驚きに聞こえていなかったようだ。

その後もしばらくサイバトロン達の表情は、変わらなかったという。

海上の大決戦！（後編）（後書き）

妖怪紹介

『磯撫で』

本編中の「サメの化け物」。鉤のような尻尾を海面を撫でるように動かして船の上の獲物などを捕らえてしまう。

『赤えい』

本編中の「島」。名前の通り赤みを帯びた体色のエイだが、島と間違えるほど体がでかい。普段は海中に潜み、何月かに一度浮上して背中の砂などをふるい落とすという。

ケルピフォー스「3部構成の話もようやく終わったか…ヤツ（ウイゼルド）はあの島が巨大な妖怪と気付いて……いないだろうな。僅かにヒレっぱいの見えたがな。

次回、ゴーストウォーズ

『青い翼』

俺としたことが…今回は喋りすぎだな」

青い翼

時刻は夜、魔界のとある森……

その中のある木が、前触れもなくめきめきと音を立て、ずしんと倒れた。

すると、倒された木の隣にあるなかなか立派な木の幹から、ポロポロの白衣を着た半透明の老婆が現れた。

「これ天狗や、この森の木を荒らすでない。この森はワシを始め数多の精霊が宿る森…その森で『天狗倒し』など、バチが当たるぞ」

すると、倒れた木の上から、一体の天狗が降りてきた。テングースよりも大柄で、鼻の下に立派な白い髭を蓄えている。

「おお、お主はこの森の『木霊』か。すまんかったのお、立派な木を見るとつい…以後気をつけよう…」

…ん？」

天狗の目線の先には、ゆらゆらと青く光る木があった。

「おい木霊の婆さん、あれも精霊の木かい？」

天狗はそういつて青く光る木に指を指した。木霊もその指先を目で追う。

「ん？……おお〜！！あれぞ何百という齢を経て辿り着く霊木の境地！！あの溢れんばかりの霊気こそその象徴！！！」

「ほほう、なんと美しい……正に霊木の中の霊木……」

「えっ？」

突如、その光る霊木がすつとんきょうな声を上げたと思うと、木の後ろから青白く光る鳥がひょいっと顔を出した。

どうやら木が光っているように見えたのは、この鳥のせいらしい。

しかし、その姿を見た木霊のテンションは更にかかる。

「おお〜〜！！あなた様はもはや、その霊木の由緒ある木霊殿……
!?!」

「僕はその、木霊じゃないぜ」

「偉大なる木霊殿は鳥の姿をするのですな!!」

「聞いてないし……」

鳥はハア、と一つため息をつくくと、翼を広げ飛び上がった。その姿

を見る限り、どうやらサギのようだ。両翼の隅から隅、嘴から尾の先に至るまで光っており、正に神々しい、といえる。

木霊が偉大と称するの、無理はないのかもしれない。

そんな鳥は翼をはたかせて木から離れていく。

「どこへ参られるか！？キングオブ木霊殿！！」

なんか変な名前を付けられたサギは、木霊を見下ろして一言。

「楽しい事を探すのさ」

その昔江戸時代にはよく、青白く光るサギが隠れて木を同じように
光らせ、人を驚かしたという。

人、それを『五位の光』ごいのひかり 又は『青鷺火』あおさぎび と呼んだ
……

翌朝のデストロン基地…

「ポッドか……」

「昨夜の内に森に落ちたらしいぜ……」

キメラトロンとサラマーン（共にロボットモード）がモニターとにらめっこしながら会話している。内容はモニターに表示されたレーダーが捉えたポッドについてだ。

「よし、サイバトロンより先に回収するぞー！ヒドラヒドラとインプットで行け！」

プログラムをデストロン仕様書き換えてしまえばこっちのものだ……！」

キメラトロンの命を受け、二体は出掛けていった。

「キメラトロン様……最近俺の出番少ないと思いませんか……？」

「そうしょぼくれるな、きつといいことあるぞ……」

「サラマーンに清き一票を……ヒーハー……」

嘆くサラマーンは、両肩にポン、と手を置かれる感触を感じて振り向く。

そこには、普段より優しい顔ながら、「お前なんてまだマシだ」と光を失った目で訴えるクロドッグ（ロボットモード）が立っていた……。

「あゝあ、もぬけの殻かぁ……折角先回り出来たのになぁ」

「仕方ないツスよ。中身を探しましょう。自分の時と同様、きつと何かスキャン済みツス」

「はいはいそうだね……お前の時もそれで手こずったよ！全くプロトタイプってヤツは自由気ままだなぁ！んん！？」

「そ…そんなにガン垂れなくても…（汗）」

ポッドの落下地点には、デストロンの二体より先にビーンズとマグナムカウが訪れていた。

しかし、ポッドは既に開かれ中身は空だった。とりあえずそれを報告するべくビーンズは基地に通信を繋げる。

「はい、こちらポッド搜索隊ビーンズです」

「こちらサイバトロン基地のオーガコンボイだ。ポッドは見つかったか？」

「ポッドは発見したけど中身は空っぽです。どこかの牛鬼と同じようにスキャンしてどっかうろついていると思われまーす」

ビーンズの目は妙にマグナムカウを向いていた。

「そうか、では中身を探しに行ってくれ。テングースも搜索に向かわせる」

「ああ、それとリーダーがデストロンをキャッチしてな、奴らもポッドを嗅ぎ付けたらしく、そっちへ向かってる。早く行くことを勧めるぞ。」

じゃあ、また何かあったら連絡をくれよ」

「りょーかい、隊長殿」

こうしてビーンズは通信を終了した。

「フウ……デストロンがこっち来るってさ」

「なら早く立ち去るッスよ。戦うことになったら面倒ッス」

そういつて去ろうとするマグナムカウだが……

「ままま、ちょい待ちなつて！ここは一つなあ……」

クヒヒと笑うビーンズ。何か思いついたらしいが……？

「あつた！プロトタイプのポッドだツキ！」

ヒドラヒドラに合わせ、低空でパタパタと飛ぶインプットが指差す先に、探し求めていたポッドが。

「キシャーシャシャ！どうやらサイバトロンはまだ来てないキシャー！ラツキー！」

ヒドラヒドラ、変身！キシャー！」

喜びいさんで変身するヒドラヒドラ。プログラムの書き換えをするつもりだ。

インプットも、ポッドの側に着地した。

「早くプログラムを書き換えるツキ！」

「わかってるシャー。さあてプロトタイプちゃん、お目覚めの時間でちゅよ〜キシャーシャシャシャシャー！」

八本のチョップハンドをガチガチと開閉させながらゆっくりと近づいていくビドラビドラ。

でちゅよ〜とか言ってるが、ハッキリ言って不気味だ。赤ん坊が泣く。

チョップハンドの一本がポッドに触れると……

ポッドの蓋がガバツと開いた。

「ん？」

今までのポッドではなかった現象に、動きを止めるヒドゥラヒドゥラとインプット。

開いた蓋の裏には、ピンのような物が沢山くっついていていた。

ポッドの中にはプロトタイプではなく、丸い形状の何か……

手榴弾のようだ。

二人がそれを把握した時には、閃光が目の前に広がっていた。

「ッアアアアアアアアア

!!!」

ドグオオオオオオオオオ

ン!!!!!!

ドグオオオオオオオオオ

ン!!!!!!

「アツハツハツハツハツハツハツ!!!」

既に立ち去ったところから爆発音が聞こえ、大笑いするビーンズ。
計画は大成功だった。

「もう最高だねえ！！アツハツハツ！！」

「じ…自分は…騙し討ちとか…好きじゃ…ないツスが…」

言いながらも口を抑えるマグナムカウ…。その心の内は見え見えだ。

ビーンズはそんなマグナムカウの背をポンと叩き、

「堪えるなって」

「アツハツハツハツハツハツハ！！！！」

二人して大爆笑だった。

「アツハツハツハツハツハ！！！！」

「……ハ??」

何故か笑い声が一つ多いことに気づいた二人はその笑いを止め、もう一つの笑い声の方、上空に目を向けた。

そこには、羽ばたきながら爆笑する青い鳥がいた。

「アツハツハツ…いや、最高！君たち面白いことするねえ！」

言いながらスーッと降りてくる青い鳥。

「あんなことよく思いついたねえ、すごいよアツハツハツ！！」

「な、なんだなんだ？やけに馴れ馴れしい鳥だなあ…」

ビーンズは初対面なのにやけに話しかけてくる鳥に驚いた。

「た、楽しんで貰えたなら嬉しいツスよ。じゃ、ビーンズ、行くツスよ。こんな鳥に構ってもしようがないツス」

「そ、そうだねマグナムカウ！じゃあ、そういうことで…」

これ以上絡まれても困るといった様子で鳥に背を向けて去ろうとする二人。

しかし、

「お、おーい待てつて！ねえ、君たち何者なの？どこから来たんだい？」

スツ、と二人の進行方向に回り込み、進路を塞ぐ鳥。

「悪いけど急ぐから！次来たら手荒くやっちゃおうよ？」

再び鳥に背を向ける二人。しかし、

「ねえつてばねえねえねえ！！」

また回り込まれた。

「だ もっっ！っ！ついて来るなって！！」

仕方ない、ビーンズ、変身！シヨキシヨキー！」

変身し鳥に銃口を向けるビーンズ。

「ちよっ…、それはいくらなんでも！！」

流石に慌てるマグナムカウだったが……

「変身！」

「……な……っ！？」

なんと、目の前の鳥が変身、ロボットモードになった。

彼こそ、探していたプロトタイプだったのだ！

「へーなるほど！君たちトランスフォーマーだったんだ！」

「こっちが言いたいよ」と毒づくビーンズだった……。

ビーンズとマグナムカウは青い鳥のトランスフォーマーを連れて基地へ帰還。メインルームに集合していた。ちなみに、全員ロボットモードだ。

「俺はオーガコンボイ。サイバトロンの司令官だ。お前がビーンズ達が連れてきたというトランスフォーマーだな？」

名前は？」

「『ブルーウィスプ』っていうんだ！よろしく！」

「うむ、みんな仲良くやれよ。新しいサイバトロン戦士を歓迎してやれ」

「えっ……」

「Hey!俺はかまいたちのウイゼルドだ、Nice to meet you!」

「河童のカパルパだカパー！よろしくな」

「拙僧はテングース。天狗だイヨ」

一瞬、この鳥のトランスフォーマー、ブルーウィスプが呆然としたのに誰も気づかず、次々と自己紹介していくサイバトロン達。

「ち、ちよっと待ってよ!!」

青い鳥のトランスフォーマー、ブルーウィスプは大声で叫んだ。

辺りが一瞬で静寂に包まれる。

「新しいサイバトロンの戦士って一体なんだよ！なんのために僕をここに連れてきたの!？」

「ビーンズ…何も話してなかったのか…」

トランスフォーマーは主に二通りに分かれる。正義のサイバトロンの悪のデストロンにな。

俺達はサイバトロンの。この魔界にいるであろうデストロンと戦い奴らの野望を阻止するんだ。

お前もその、サイバトロンのというわけだ」

「だからそのデストロンと戦えっていいのかよ！

お断りだよ。僕は縛られるのが何より嫌いなんだ。戦うなんてまっぴらだね!」

「な……!」

「よかったら基地に来て言うから呼ばれたのに、なんだよ!

じゃあね!」

そう言い残すとブルーウィispはゴーストモードになり、基地を飛び出していった。

「待てブルーウィisp！ テングース、頼む！」

「了解！」

テングースも基地を飛び出し、ブルーウィispを追う。

「待たれよブルーウィisp！」

ロボットモードのブースターを使用しているため、最高速度はテングースが上。故にすぐにブルーウィispを視界に捉えることができた。

「うるさい！ ついてくるな！」

「何処へ行く気だ！ デストロンの攻撃に合っイヨッ！」

「しつこいなあ！」

ブルーウィisp、変身！ヤッファー！」

ブルーウィispは変身し、体を反転させてテングースに向き直ると、右腕についた鳥の嘴から青い火の玉を連射した。

「ぬっ！ぐ…グアアアツツ…！！！」

火の玉はテングースの左腕、右脇腹、翼に当たり、翼を破壊されたテングースはバランスを失い、煙を出しながら落下していった。

それを尻目に、ゴーストモードに戻ったブルーウィispは振り返ることなく飛んでいき、やがて見えなくなってしまった。

青い翼（後書き）

インプット「デストロンのやんちゃ小悪魔、インプットだツキ！

くっそくサイバトロノめ……あんな畏仕掛けるなんて、正義の風上にもおけないツキ！！

絶対やり返してやるからな！！覚悟決めとけツキ！！

次回、ゴーストウォーズ

『蒼炎の宿命』

気長に待つツキ！！」

蒼炎の宿命（前書き）

半月で奇跡の投稿！その分次回の投稿は……………

……………ゴーストウォーズ、始まります。

蒼炎の宿命

時刻は既に夕暮れだった。

「ふん！僕は自由気ままが好きなのさ。誰かの下に入るなんてごめんだね」

飛行しながら不満を漏らすブルーウィスプ。すると、何かが視界に入った。「んん？」と目を凝らす。

「……………くそ……………サイバトロン共め……………！妖気にやられちゃった……………キシヤー……………」

「妖気以前に…ヤバいツキ……………もう少しだツキ…もう少しで助けが来る……………ツキ……………」

前回ビーンズの策略によって吹き飛ばされた哀れな二人組、ヒドラ
ヒドラとインプットだった。

「あゝあ……甘いなあ全く……殺せなかったのかあ……ちょっと面白かったのに、興ざめたな」

「おい、大丈夫かよ？」

茂みの一部を焼き、哀れな二人に駆け寄る一匹のサラマンダーのサラマーン。それを見たブルーウィスは何を思ったか、少し口角を吊り上げた。

「驚かしてやろうかな。ブルーウィスプ、変身！ヤッファー！」

空中で変身したブルーウィスプは、倒れている二人とサラマーンを狙い、右腕の嘴から火球を連射する。

「おわわッ！…な、なんだアイツ！？」

サラマーン、変身！ヒーハー！」

フレイムテイルウィップを回して火球を弾き飛ばすサラマーン。未知のトランスフォーマーからの攻撃に戸惑い、その表情に焦りが見える。

「アイツ…あのポッドの中身かツキ…！ヤ、ヤロウ…！」

「なめた真似を…キシヤー…グウツ…！」

怒りを覚えるインプットとビドラビドラだが、ダメージのせいで動くこともままならない。

「クロドッグ、変身！ウォーン！」

高らかな声の後、一発の弾丸が暗闇から上空へ飛び出した。

「グワツ！な…なんだ!？」

今度はブルーウィispが焦り始めた。攻撃してきた敵の姿を捉えられないのだ。

ドドドンッ、ドーン！

キョロキョロと敵を探す死角を突き、弾丸が次々とブルーウィispの体を傷つけていく。

「う…ぐっ…!」

見えない敵からの攻撃にダメージを蓄積させたブルーウィisp。

「おやおや、反撃も出来るのか……悪いことは言わないぞ？さっさと退けばどうだ？糞餓鬼」

その一言に、ブルーウィispはカチンときた。それがクロドッグの挑発とは気づかずに。

「なんだと！？ふざけるなよ、僕はまだやれるさ！さあかかってこい！ぶちのめしてやる！！」

完全に挑発に乗ったブルーウィisp。こうなつては最早クロドッグの思いつぽだ。あとは頑固にも動かないブルーウィispを、居場所を悟られないように撃てばいいのだから。

「そうか……？ならば、遠慮なく！！」

「あぐっ！！……ッくそおっ！！」

被弾箇所から弾道のある程度予測し、撃ち返すブルーウィispだが、クロドッグがそんな単純な反撃を喰らう訳がない。射撃と同時に素早く動き、死角へと回り込んでまた撃ち込む。

ブルーウィスパに冷静さが残っていれば回避なりの処置を取れただろうが、彼は感情のコントロールを知らなかった。若かったのだ。

そのため、挑発されるままに感受し、怒りに任せて完全に読まれている無謀な反撃を繰り返す。意地を張っているためか読まれていることすら思慮に入れず、とにかく侮辱されたことを払拭することにだけ意識を巡らしている。

例えばオーガコンボイなら基本的にこんなことにはならないだろう。どんな状況でも思考を忘れず、最善の策を取ろうとする。ウィゼルドだってここまで無謀ではない。

ブルーウィスパは怒りに、感情に振り回されているために、自ずから視野を狭め、己を危機に晒していた。

「とどめといこうか、そろそろ楽になりたいだろうか？」

ゆっくり銃を構えるクロドッグ。銃口は確実にブルーウィスパを捉えている。

満身創痍のブルーウィスパにそれを回避する術はない。

「ヒーハー！ やっちまえ、クロドッグ！」

「カタキを…とってくれッキ…」

「あいつを殺せ…キシャー…」

この場の他のデストロン達もクロドッグを促す。ブルーウィスパは完全に孤立していた。

「では、ご期待に応えるとするか……死ね！」

クロドッグの指がゆっくりと引き金を銃身に押し込んでゆく。

弾丸が放たれようとしたその時だった。

急に突風が吹いた。クロドッグは堪え、サラマーンがインプットとヒドラヒドラを庇う。しかし、その突風はブルーウィスプを吹き飛ばした。

「ぐうっ……ゴ、ゴーストモード！」

吹き飛ばされた際、少しでも遠くへ飛ばされるため、ゴーストモードになり体の表面積を小さくする。その結果、デストロンの視界から外れるほどに飛ばされた。

「ちっ…風に乗って逃げたか、

ゴーストモード！」

突風が止み、追いかけてようとブラックドッグに変身するクロドッグ。しかし…

「クロドッグ！後ろ！」

「ん……？……な、うおおお！？」

突風で薙ぎ倒された木が、クロドッグの上に倒れ、哀れクロドッグ

は下敷きになってしまった。

「クロドツグウウ　　ツツ!!」

サラマーンの叫び声が夜の森に響いた……

ブルーウィスプが目を覚ました時、まず暗い空、月の光、それを背に受ける伸びる木の枝と葉が視界に入った。どうやら夜を迎えるまで気を失っていたようだ。

「う………痛え………!」

「おお、気がついたようじゃの!」

その声を聞いてガバツと起き上がる。

まず手の感触。何かが集まってクッションとして機能しているらしい。カサカサと音が鳴っている。続いて目線をふと下に下げる。すると地面までかなりの距離があり、木の幹が視界の端に地面に伸びる形で見えた。

どうやら木の上にいるらしい。そしてこのクッションは葉が集まって形成されているようだ。ちょうど鳥の巣のように。

そこまで把握したブルーウィスは、もう一つ聴覚が感じた『声』の主を探す。しかし、周りを見渡しても誰もいない。

「誰だ？今僕に呼びかけたのは」

「わしじゃよ」

声の主は木の幹からにゅっと現れた。ポロポロの白衣を着た半透明な老婆だ。

「うおわあ！？」

「ヒツヒツヒ…そんなに驚くこともあるまい、初対面でもないんじやし」

「え…？初対面じゃない…だって…？」

記憶を辿るブルーウィスプ。そして、一つの結論に至った。

この老婆は昨日（前話）出会った老婆だと。

「思い出したようじゃの、木霊・オブ・レジェンド殿」

前回と呼び名が違っていた。王様から伝説になった。

「あんたが僕を助けたのか…？」

「助けたのはあやつじゃ。わしは介抱したに過ぎんよ」

そういつて木霊が指差した方には、これまた昨日出会った天狗がいた。テンゲースではない

話を聞くと、あの突風は天狗が起こしたものらしい。

「ありがとうな、天狗」

「んむ。」

しかし…お主まこと奇妙な体をしておったのう、面影があったから

お主と分かったが…何故姿形を変えておった？」

「あー…ちょっと説明が必要なんだけど…」

「全く、何をやっているんだね君達は…」

「「申し訳ございません」」

戦闘後、デストロン基地に戻った四人。インプットとヒドラヒドラは任務失敗ということでキメラトロンにお叱りを受け、土下座していた。

「ヒーハー！なかなか戻らねえと思って見たらこのザマたあな！」
「ふん、同感だ。俺達が来なかったらどうなっていたか」

サラマーンとクロドッグもそれぞれ二人を責めるが……

「敵…逃がしたな……」

「「「「申し訳ございません」「「「

ケルピフォースの発言で土下座組が増えた。

「ふむ…私が直々に出向くでしょう。幸いそいつは単独行動がお好きなようだしな」

言いながらキメラトロンはコンピュータに目線を反らす。

ディスプレイには地図のデータが映し出され、その上にサイバトロンのマークが一つ浮き上がっていた。

「「とらんすふおーまーねえ……」「

ブルーウィispはトランスフォーマーのことを説明した。だが、老

婆と天狗はまだ理解し難いようだ。

「無理して覚えることないさ。」

じゃあ、僕はこれで。世話になったね」

「何処へ行く？」

「言ったら、面白いことを探すって」

「ホホウ、基地には戻らんといいことは、サイバトロンは君を飼いは慣らしてはいないようだな」

声が聞こえた三人は、地上を見下ろす。そこにはキマイラがいた。

「キメラトロン、変身！グワアオオオ！」

ロボットモードに変身したキメラトロンを見た三人、特に木霊の老婆と天狗は驚いた。

「お前もトランスフォーマーか！」

「そうだ……私はデストロンの指導者キメラトロン。君を我々の仲間に取り入れに来たんだ」

「お断りだね！なんだよ昼間のサイバトロンといい、お前といい！僕は自由気ままが好きなんだ！」

「なるほど……ならば、こうだ！」

キメラトロンはカプリキャノンを突き出しミサイルを放った。

狙われたブルーウィスプと流れ弾を浴びたくない老婆、天狗はかわすことに成功した。

「ブルーウィスプ、変身！ヤッファー！」

空中に飛び上がったブルーウィスプも変身、右腕から火球を放ち応戦する。

キメラトロンは強い。デストロントップの火力を以て強力な一撃を放つ。それによってブルーウィスプは追い込まれていた。

「大丈夫かゴッド・オブ・木霊殿！」

とうとうブルーウィスプは神になったようだ。

「あんた達は早く逃げる！クソッ！」

「踏ん張りたまえ！」

天狗はブルーウィスプにそう言うと手に持った葉の扇子を振るった。すると、ゴウ、と唸った空気がキメラトロンを襲う。天狗は突風を起こしたのだ。

「これしきの風で私は吹き飛ばせんぞ！」

抵抗するキメラトロンだが、天狗はニヤリと笑った。

キメラトロンの横から木が倒れかかっている。クロドッグの時同様、木で潰そうという魂胆だった。

「馬鹿め！」

なんと、キメラトロンはそれを察知しレオキャノンのビームで木を粉々に破壊した。

「なっ!?!」

「邪魔するなら死ね！」

続いてキメラトロンはカプリキャノンのミサイルを天狗に放つ。

天狗は回避行動をとるがミサイルは翼に着弾、翼をもがれた上ミサイルの爆風が天狗を吹き飛ばし、木に叩きつけた。

天狗が苦痛の表情を浮かべるのを見て、キメラトロンがニヤリと笑

う。

「なんてことを……するんだああ!!」

これに激昂したブルーウィispは、空高く飛び上り、右腕を上にかがけた。

月の光を背に浴びるブルーウィispの体が、青白く光り始める。

その光を右腕の嘴に収束すると、嘴の先から直径5m強の巨大な青い火の玉が現れた。

「なっ……なんだ…あれは!?!」

これにはさすがのキメラトロンも驚愕する。

「許さねえぞ!吹き飛びやがれ!!」

「お待ちください！わし達……」

「ブルームーン……ストラアイクウウ！！！」

ブルーウィスプが右腕を降り下ろすと、巨大な火の玉がキメラトロンに向かって飛び、大爆発を引き起こした。

爆風が消えた跡には、底は浅いが、広いクレーターが出来ており、周囲の木々は薙ぎ倒されていた。今クレーターがあるところにあつたはずの木々は消滅したらしい。

「ハア……ハア……！……やった……やったぞ！！アハハツ！！」

先ほどの攻撃、ブルームーンストライクによって力のほとんどを使い果たしたブルーウィスプは地上に降り、勝利を喜んだ。

「おい！婆さん、天狗ー！やったぞー！ハハッ！」

共に勝利の余韻に浸ろうと、二人を呼ぶブルーウィस्पだったが……

…返事がない。

「婆さん？天狗？」

辺りを包む静寂に不安を感じるブルーウィस्प。ふらふらと飛び回り応じる声を求めた。

やっとのことで発見した両者は、二度と動けなくなっていた。

「婆さん……………」？

天狗……………！？」

いくら呼ぼうが一人が呼びかけに応じることはもう、無い。

自らが、そうさせた。

「あ……あああ……あああ……っ！！」

ブルーウィスは、すぐに逃げ出したくなった。が、足がすくみ、動けない。

「目を反らすな……これはお前がやったことだ。それを認めなければならぬ」

びくり、としたブルーウィスが振り返ると、そこにはロボットモードのオーガコンボイが立っていた。爆発を察知して来たらしい。その表情には怒りと悲しみが混じっている。

「怒りのまま、感情のままに戦えば自分の目を曇らせ、知らない内に周りを傷つけ、殺す。」

あの時急に君を引き込んだのは、君がそれを知らないと思ったからだ。だから、野放しには出来なかった。俺達トランスフォーマーの

力が、この魔界に危険を及ぼすことを分かって欲しかった。

……こうなってしまう前になー!!」

強くなった口調に怯えるブルーウィisp。その肩は震えている。オーガコンボイは、そんなブルーウィispが次に口にする言葉を待った。

ブルーウィispは震えが及んでいる口で、小さいが確かに呟いた。

「すまな……かった……
すまなかった……ッ！」

オーガコンボイの右拳がブルーウィispの顔面を捉えた。

ガン、という金属の衝突音と共に、ブルーウィispは数メートル吹

き飛んだ。

「……そこで言い訳するようなら、俺はお前を破壊していた。だが、まだお前には罪を認め、償う意志があるようだな。だから、この一発で勘弁してやる」

「う……あ、ありがとう……オーガコンボイ……」

「く……オーガコンボイまで……おのれ……！」

オーガコンボイとブルーウィスは、薙ぎ倒された木の陰に隠れてそそくさと逃げるキメラトロンの姿を発見した。

「あのヤロウ！まだ……」

キメラトロンを発見したブルーウィスプは、追撃を仕掛けようとするが……

「感情のままに戦えば……もう分かったろう」

オーガコンボイがそれを制した。

その後、オーガコンボイとブルーウィスプは、簡素ながら天狗と木の霊の老婆を埋葬した。

「……二人は最初…僕を木霊の王様のように言ったんだ…」

ブルーウィispは静かに語り始めた。

「僕は言ったんだ。違っつて。僕はこの二人が求めたものじゃなかった。

それでも、助けてくれたんだ。あの時僕は変身していたのに、だから魔界の者ではないっつてことも知っていたのに、ナントカ木霊とか言っつて…変わらず親切で！」

ブルーウィispの視線は常に木霊と天狗が埋められ、少し盛り上がった地面に向けられていた。そこに、二人がいるから、それを見つめるように、見つめて、思い返すようにブルーウィispは語る。

オーガコンボイは、ただただ黙って聞いていた。

「オーガコンボイ！僕を…サイバトロンの仲間に入れてくれ！あいつら…デストロンは親切な妖怪を平気で撃ち、平気でへらへら笑うような奴らだ！」

……そんな奴らと戦うことが、僕の……少しでも償う方法だから……！」

そこに、昼までの身勝手小僧はいなかった。強い意志を持つ一人の戦士が、そこにいた。

「サイバトロンへようこそブルーウィスプ……」

新キャラクター

陽動員ブルーウィスプ

サイバトロン。青い体色の鷲、青鷲火をスキャン。暗いところでは体が青く光る。

メンバー中最も若く、それ故に感情のままに動く性格。規則などに縛られることが何よりも嫌いで、自由気ままに飛び回るのが好き。派手だからと爆弾が好きで、知識も持っており自分で爆弾を作ることも解除も可能。口癖はヤッファー。

変身は胴体が開いてロボットモードの体が登場、長い首は右腕の表に折り畳まれて装着される。翼はそのままなので飛行能力は健在。

武装は右腕に装着した鷲の頭で、首を伸ばし嘴で突くビークランスと、嘴を開いた銃口から発射する青い火の玉サギビダマ。特にサギビダマは爆撃効果がありブルーウィスプ自身が気に入っている武器である。さらに、切り札として放つ青い巨大な火の玉ブルームーンストライクは夜、月の光を浴びられる状況でのみ使用できる。凄まじい破壊力を持つが、周囲への被害が甚大であるためオーガコンボイに使用を禁じられている。また、前述の通り爆弾を自作して使う場合もある。

蒼炎の宿命（後書き）

ブルーウィスプ、ヤツファー！新キャラのブルーウィスプだ。これから僕もゴーストウォーズに参戦することになるわけだ。よろしく！

婆さん、天狗、見ててくれよ！

さて次回だが、なんと、ゲストキャラが登場するんだ。どうやらそいつ、竜の姿をしているらしい。

次回、ゴーストウォーズ

『紅竜と宝石』

宝石？なんで宝石…？」

紅竜と宝石（前編）（前書き）

今回はNOSサイト内の他作品から許可を得て、ゲストの登場です。

紅竜と宝石（前編）

「うん？」

気がつくとは彼は、見知らぬ地に立っていた。

辺りを見渡せば、固い地面、目線の遠くには森が広がっている。上には、厚みのある灰色の雲。どうやら岩山の山頂らしい。

「妙だな…確か、優也の元へ行くようセットしたはずなのに……ワ
ープゲートの故障か？」

頭を捻る彼の上を、何かが飛んでいった。全身の赤い鱗、大きな翼、鋭い角、長い尻尾……

「お、今のあれ俺にそっくりだな。確か竜…だっけか？ん？あれ、
竜は空想の存在じゃ……あれ？？」

頭がついていってないようだ。そして最終的に、

「ここどこだ??？」

まあ、妥当な帰結だ…。

とにかく彼は、突然魔界に足を踏み入れてしまったようだ。

「色々見る必要があるな…トランスフォーム！」

その人物が掛け声を上げると、その姿をステルス戦闘機のような形に変える。どうやらトランスフォーマーのようだ。

「上空から見てみるとするか」

「おい、以前に続いてまたサイバトロンのコードが突然現れたツキ
！」

「またポッドかキシヤー!？」

「またまたプロトフォーム!」

「またまたまたまたまたまたまたまた大変だけど必ずゲットだぜイ
エイエイエイエ」

「サラマーン、自重」

デストロン基地内は平和らしい。メインルームでサイバトロンのコードを持つ何かを発見したインプット、ヒドラヒドラ、ケルピフォース、サラマーン、クロドッグの間でこのようなやりとりがされていた。ちなみに、それぞれコンピュータを操作しておりそのため全員ロボットモードだ。

「誰だ?懐かしの無印歌ってたのは」

そこにゴーストモードのキメラترونが入ってくる。

「サイバトロンのポッドらしきものが流れてきたらしいツキ！」

「ほう…キメラترون、変身！グワアオオオ！」

インプットの報告を受けてキメラترونは、ディスプレイを覗き込むために変身、彼のコンピュータの前にやって来た。

「なるほど、サイバトロンの……ん？」

ディスプレイを覗き込むキメラترونに、疑惑の表情が浮かぶ。

「どうかしたツキ？」

「妙だな…ポッドにしては随分あちこち飛び回っている。それに、速いぞ」

確かに、ディスプレイ上のサイバトロンのマークは地図上をぐるぐると動き回っている。まだ誕生前のプロトフォーム用ポッドでは、まず不可能な動きだ。

「何かはわからないが、サイバトロンのものである以上放っておけん…調べるしかあるまい。クロドッグ、インプット、お前達に任せよう。」

もし何らかの兵器だったら下手な手出しはするな、私とヒドラピドラに報告しろ。サイバロン戦士なら、消せ」

「了解した」

「任せろツキ！」

キメラトロンの指示を受けた二人は、ゴーストモードで基地を出ていった。

その頃、ウイゼルドは強い濁流の流れる谷の岩場で、岩と岩の間に手を入れていた。

偵察をしていたところ、岩の隙間に何かを発見したらしい。

「くそ…もうちよいで届くんだけどな…」

「…お？あの生物何やってんだ？」

上空の戦闘機は停止して呟いた。冒頭の迷い人だ。

トランスフォーマー

端から見ると奇怪な行動をしているウイゼルドを発見したトランスフォーマーは、しばらく滞空し様子を見ることにした。

「Can't catch it…こりゃ周りを掘り崩すしかねーかな…ウイゼルド、変身！イエス！」

ウイゼルドはロボットモードに変身、岩にスピンドルクローを突き立てて掘り始めた。

「あいつ、トランスフォーマーだったのか！でも岩崩して何してんだ？何かあるのかな……」

そのトランスフォーマーは驚いたが、岩を掘ることへの疑問に、すぐに首をかしげる。

「あつた!！」

そう言ってウイゼルドが掲げた、『見つけた何か』に注目するトランスフォーマー。どうやら宝石らしい。それを見た彼の表情はすぐに驚愕と焦燥のそれへと変わった。

「あれはまさか…『エレメントジュエリー』!?こんなところにもあつたなんて!…そうか…あいつ、新入りのデストロンだな!通りで俺が知らないわけだ!！」

そう結論づけた彼はすぐさまウイゼルドに向かって急降下し始める。

「いらあ　　!!そいつは渡さないぜ!！」

「ん?…おわ!? What's!？」

声に反応して振り返れば、魔界ではほとんどお目にかかれない戦闘

機がこっちに突っ込んで来ている。そりゃ驚くというものだ。

「そいつを渡せえ！」

急降下しながら機銃を連射するステルス機形態のトランスフォーマー。無数の弾丸がウイゼルドを襲う。

「あぐぐぐグワッ!!」

ダメージを蓄積して力が抜けた手から、宝石が滑り落ちる。下は濁流だ。

「な、ヤバいッ!あ……ああああああ　　ッ!」

結局宝石は濁流に吞まれ、見失ってしまった。

「何を騒いでいるんだウイゼルド!……ん?戦闘機?」

一悶着が済んだ頃、オーガコンボイが現れた。

「いつつつつ……聞いてくれよ！岩の隙間に宝石みたいなのを見つけたんだ、それなのにこいつが……」

ウイゼルドに指差された戦闘機は、オーガコンボイを睨んでいるようだ。

「貴様もこいつの仲間か！」

『ドラゴンコンボイ』、トランスフォーム！

「えっ……！？コン……ボイ？」

『ドラゴンコンボイ』と名乗るステルス戦闘機が変形しロボットになる。ウイゼルドとオーガコンボイはそのロボットに、特に頭部に注目していた。その頭部はサイバトロンで伝説となつている偉大な司令官、初代コンボイの意匠を残す形状、即ちコンボイタイプと呼ばれるものだった。

「コンボイタイプ……！じゃあサイバトロンか！」

「そうだ、お前たちのせいでエレメントジュエリーを落としてしまった。覚悟しな！容赦しないぜ」

オーガコンボイとウイゼルドは彼、ドラゴンコンボイがサイバトロンと分かったが、ドラゴンコンボイの方はいつでも戦う準備万端だった様子だった。

そんな彼を見てオーガコンボイは、百聞は一見にしかず、と判断した。

「オーガコンボイ、変身！ウオオオッ！」

自分達は同じサイバトロンであると分からせるには、自分も変身しコンボイタイプであることを分からせるのが手っ取り早い。

効果はあったらしく、ドラゴンコンボイは警戒体勢を解いた。

「君も……コンボイタイプだったのか……！」

「そうだ。俺はオーガコンボイ。鬼をスキャンしたんだ。こいつはかまいたちのウイゼルド、俺の仲間だ」

「鬼？かまいたち？さっき竜も見たけどそれらって空想の生物じゃないのか？空想の生物がなんでここでは普通に生活しているんだ？」

ドラゴンコンボイの発言により、オーガコンボイは彼がやはり魔界への漂流者であることを確信した。

「俺達の基地に来てくれ。そこで話そう」

こうしてドラゴンコンボイはオーガコンボイとウィゼルドに連れられ、サイバトロン基地（この世界の）へと向かった。

「ふ〜ん、魔界ねえ…」

サイバトロン基地へ到着したオーガコンボイらは、ドラゴンコンボイにここは魔界であること、彼が原因不明だが漂流してきたということの説明した。

「ま、そのワープゲートの故障によって、本来の転送先から時空がずれたというしかないカパー」

カパールパがそう言って締める。

「なるほど…別次元の世界か。だとしたら、何故ここにエレメント

ジュエリーが？」

「エレメントジュエリー？」

次に疑問を示したのは、魔界側のサイバトロン達だった。

「今俺が追っているもので、自然のパワーが詰まっている宝石だ。俺達の世界では、それを巡ってサイバトロンとデストロンで争っているのさ。詳しくは『トランスフォーマーエレメントフォース』を見てください」

ちやっかり宣伝しつつ、ドラゴンコンボイは解説した。

「ウイゼルド…だったな、悪かったね。てっきりデストロンかと思つてなあ、ハハハ」

ドラゴンコンボイが声をかけた先には、彼からの機銃のダメージで寝込むウイゼルドがいた。何処からかベッドを持ち込んで布団をかぶっている。

「イテテ…冗談じゃないぜ全くもう！サイバトロンの優秀な戦士を失うところだったぜ！」

「ハハハ。まあ、過ぎたことだよ」

「謝罪の意志どこやったあアアア…！」

「なあビーンズ…：…なんかドラゴンコンボイって…：…気さくというか、司令官って感じじゃないなあ」

「同感だねブルーウイスプ…：コンボイタイプは、オーガコンボイみたいな堅物ばかりだと…：」

「誰が堅物だと？（怒）」

「…い、いえ…：（汗）」

楽しげな雰囲気の中、基本真面目なマグナムカウとカパルパはエレメントジュエリーについて考えていた。

「自然のエネルギーが詰まった宝石か…：魔界と関係あるんスかねえ…：」

「何らかのヒントにはなるかもしれんカパー。分析してみたいもん

だ
」

「よし、何かの縁だ。みんなでその、エレメントジュエリーを探そう。ウイゼルド、川の濁流に落としたんだっただな」

「Yes」

「ならば海だ！」

今後の方針が決まったようだ。こうしてサイバトロンは、エレメントジュエリーの搜索に乗り出した。

ドラゴンコンボイの背中に盗聴機が付けられていることに気づかず

……

一方、デストロン基地

「あのトランスフォーマーがサイバトロンと組んだか…よく盗聴機を仕掛けたなクロドッグ」

「さすがだツキ〜！」

「俺の隠密兵としての腕をもってすれば、撃ち込むことくらいじゃない」

「俺様の盗聴機の性能のおかげでもあるキシヤーツ！」

実はオーガコンボイ、ウイゼルド、ドラゴンコンボイの三人が会話している時、近くの茂みにインプット、クロドッグが隠れていた。

ドラゴンコンボイがコンボイタイプでサイバトロンである以上放っておけないが、戦っても形勢不利。そこで、チャンスを伺うことと彼が魔界へやって来た理由を探るため、クロドッグが盗聴機をドラゴンコンボイに撃ち込んでいたのだ。

で、今はデストロン全員で盗聴…サイバトロン基地での会話も筒抜けだ。

「それで…どうするキメラトロン様…」

「…そのエレメントジュエリーとやら…見つければ強力な武器になるやもしれんな」

「ヒーハー！奴らを叩きのめして奪うってわけだな！！」

ケルピフォースの問いかけに、ニヤリと笑いながら答えるキメラトロン、そして歓喜するサラマーン……。

どうやら戦いは避けられないようだ。

海上を飛行しエレメントジュエリーを探す青い鳥のブルーウィスプ。

海に着いたサイバトロン達は、まず飛行可能なテングース、ブルーウィスプ、ドラゴンコンボイを三手に分け、カパルパは海中を探し、ウィゼルドとビーンズは川を沿って山の方に、オーガコンボイとマグナムカウは待機し指示及び連絡の中継をすることになった。

搜索開始後既に一時間ほど経過しているが、一向に見つかる気配はない。

「見つからないな……海中深くだとすると反射の光も届かないだろうしなあ……」

などと呟くブルーウィスプ。すると、突如アイデアが閃いた。

「待てよ、確かエレメントジュエリーはパワーの詰まった宝石……
てことはこっちから何かしらのパワーを与えれば反応するかもしれない！

ブルーウィisp、変身！ヤッファー！」

変身したブルーウィispは、海に向けて右腕の嘴からサギビダマを放つ。もしエレメントジュエリーがあるなら、そのパワーに何かしらの反応を見せるはずだ。

ちなみに前回の事件から反省し、ちゃんと海中に生き物がいないことを確認している。

それでも、そう簡単には見つからないし、この方法にも限界がある。変身可能な時間を越え妖気に当てられたブルーウィispは、すぐさまゴーストモードに戻る。

「この辺には無いか……危険性はあるけど確実性は増したはずだ……
ちよつと回復したらまた変身して……」

ちよつと移動しながら思考するブルーウィisp。すると、水中を泳

ぐ見慣れた緑色の妖怪を発見した。ブルーウィispは上空からその妖怪に声をかけた。

「おいカパールパー！」

「ん……おお、ブルーウィispか！エレメントジュエリーは見つかったカパール？」

「いや、そつちは？」

「収穫無しだ。」

ところで、さっきボンボン音が鳴ってたが何か知らんカパール？」

「あ……それ僕だよ。エレメントジュエリーを探して海に撃つてた。パワーある宝石なら、何か反応すると思って。見回るより早いし」

「……うーむ……やり方は強引だが確かに一理あるカパール……」

よし、私の周りはある程度見たから、少し遠くをやってみてくれ」

「分かった。ブルーウィisp、変身！ヤッファー！」

……それっ」

変身したブルーウィスプは、カバルパの指示通り少し遠くの海中にサギビダマをばらまく。

すると、一発着弾した地点から赤い光の柱が登った。ちよつと軽い気持ちだった二人は驚愕する。

その瞬間、赤い柱を中心に赤い電流が海面を走り出した。瞬く間に電流は広がり、カバルパの方にも迫る。

「ぬわあアア!?!」

電流がカバルパを捉える間一髪、ブルーウィスプがカバルパを抱えて上昇し、事なきを得た。やがて、赤い光の柱と電流は消滅した。

電流の走った海面は、少し蒸発したように蒸気が登っていた。

「あつぶな……ご、ごめんカパルパ……ここまでだとは思わなかった……」

「い、いや私も想定外だったよ……間違いなくエレメントジュエリーはあそこにある！」

その後、サイバトロン全員にエレメントジュエリー回収の報告が入った。

紅竜と宝石（前編）（後書き）

オーガコンボイ、今回は烈火竜さんの作品、

『トランスフォーマー エレメントフォース』から、ドラゴンコンボイがゲストとして参戦してくれました！

烈火竜さん、本当にありがとうございます！

話が長くなってしまったので、前後半に分けての投稿です！

というわけで次回、ゴーストウォーズ

『紅竜と宝石（後半）』

烈火竜さんの『トランスフォーマー エレメントフォース』の方もよろしく！」

紅竜と宝石（後編）（前書き）

引き続き、『トランスフォーマー エレメントフォース』よりドラゴンコンボイがゲスト出演してくれています。

紅竜と宝石（後編）

「ドラゴンコンボイ、これでよかったか？」

「このパワーの感覚、間違いない！いやあ、ありがとうな！」

サイバトロンは海岸で合流した。その後カバルパは早速、ドラゴンコンボイにエレメントジュエリーを差し出した。

「これは……『フレイムルビー』……？」

しかし、ドラゴンコンボイの表情は疑問と困惑に満ちている。

カバルパから受け取ったそれをまじまじと見つめて頭の中で思考するドラゴンコンボイにオーガコンボイ達も戸惑い、代表してビーンズがドラゴンコンボイに話しかけた。

「あー…ドラゴンコンボイさん？どうしちゃったの？」

「ん……あ、ああ…実はこれ、以前に俺達の世界で回収したはずの

物なんだ…」

「落としちまつて魔界に転がり込んで来たんじゃないの？」

「うーん、その可能性はあるかもだけど…優也がそんなミスするとも思えないな…最後に会った時はちゃんと持ってたし」

「ゆうや？誰ソレ??」

「協力してくれてる地球人の子供だよ…」

「じゃあその子に感謝だな」

「…………えっ…ぐわっ！」

今までそこにいなかった声にドラゴンコンボイが振り向いたその瞬間、ミサイルがドラゴンコンボイに命中、ドラゴンコンボイはエレメントジュエリーを手放してしまった。

放り出されたエレメントジュエリーは放物線を描き、ライオンの頭がそれをくわえてキャッチした。

「フハハハ、ご苦労だったな諸君！」

エレメントジュエリーをキャッチしたのはキメラトロン（ロボットモード）だった。後ろに変身済みのデストロンが勢揃いしている。

「く、やはり現れたなデストロン！それをどうするつもりだ！」

「分かるだろうオーガコンボイ…！これほどのパワーを持つ宝石だ。兵器のエネルギーにはもってこいだ」

「そんなことさせてたまるか！オーガコンボイ、変身！ウオオオッ！」

「テングース、

「カパルパ、

「ビーンズ、

「ウイゼルド、

「マグナムカウ、

「ブルーウィスプ、

「『『『『『『変身!!』』』』』」

「おのれ…!ドラゴンコンボイ、トランスフォーム!」

オーガコンボイに続き、サイバトロン全員が戦闘体勢をとるが…

「そんなに返して欲しければ返してやるよ…!ホラよっ」

何故か、キメラトロンはエレメントジュエリーをサイバトロンに放り投げた。不可解な行動にサイバトロン全員の動きが一瞬止まる。

「!?!」

キメラトロンがレオキャノンを構えていたことに気づいたのは、オーガコンボイだけだった。

「全員退避だあ!?!」

「もう遅いッ!?!」

レオキャノンのビームがエレメントジュエリーに命中した。

ビームを受けたエレメントジュエリーは、ブルーウィスプの時同様、そのパワーを放出する。

「「「「「うわあああああ！！！」「」「」「」

電流状のエネルギー波はサイバトロンのほとんどを捕らえた。無事だったのはキメラトロンの策略に気づき一瞬早く退避したオーガコンボイト、ミサイルをくらい少し離れていたドラゴンコンボイのみ。その他の、エネルギー波を浴びたサイバロン達は、甚大なダメージを負ってしまった。

パワーを放出しきったエレメントジュエリーは、海岸の砂の上に落ちる。

「なんだ、いらんのか？フハハハ、では私達デストロンが頂くとしようか」

そう皮肉じみた言葉を吐き、キメラトロンはエレメントジュエリーに手を伸ばす。

「さ、させんぞ！」

「くそっ！」

動けるオーガコンボイとドラゴンコンボイが取られまいとするが、デストロン陣営の援護射撃を受け、結局エレメントジュエリーはキメラトロンに取られてしまった。

「さて諸君、引き上げるぞ！」

「えっ！？ここでトドメ刺さないのかよキメラトロン様！」

「考えてみるサラマーン……開発した兵器で葬ることこそ奴らにとつて絶望となるのだよ」

「納得だ、ヒーハー！」

そんなわけでデストロンは撤退した。エレメントジュエリーを持って……

サイバトロン達はダメージを癒すべく基地へ戻り、医療カプセルに入っていた。

だが、早くに回復出来たのはオーガコンボイとドラゴンコンボイだけで、エレメントジュエリーのパワーを受けた他の面々はまだまだ。メインルームにいるオーガコンボイは、それぞれの医療カプセルと通信を繋ぐ。

「みんな、大丈夫か？」

「ぐ…完全に治るにはまだまだ時間がかかるイヨ…」

「そうか…このまま放っておいたら、大変なことになる。すぐに攻撃したいが…俺達二人…か…」

敵が兵器を開発する前に、なんとかしてもエレメントジュエリーを取り戻したいところだが…オーガコンボイも戦力の不足に頭を抱えている。

しかし、それ以上にドラゴンコンボイは思い詰めていた。エレメントジュエリーの回収は元々自分がやるべき任務だ。それが、手伝わってもらった上自分が無傷で彼らが傷つけられるなど、サイバトロン

戦士として恥じるべきことだった。

そして、覚悟を決めたようにオーガコンボイに告げる。

「…………俺が行くよ。元々俺が撒いた種だ」

それが、ドラゴンコンボイの出した結論、魔界の仲間たちへの感謝と謝罪の意志だった。

「な…バカ言うな！お前一人では危険過ぎる！」

驚いたオーガコンボイはドラゴンコンボイを止めようとするが……

「本来エレメントジュエリーは俺が追うべきものだ！…これ以上、お前たちに迷惑はかけられない！！」

トランスフォーム！！」

ドラゴンの姿に変形したドラゴンコンボイは、オーガコンボイの制止を振り払って基地を飛び出してしまった。

エレメントジュエリーを持ち帰ったデストロンは、基地の外で早速新兵器の開発を始めていた。ヒドラヒドラを中心に、キメラトロンを除くデストロン達が開発に携わっている。

「ヒドラヒドラ、『エレメント砲』の完成はいつになる？」

「形は大分完成したが、あのエレメントジュエリーのパワーを制御するシステムが不完全だキシャー。パワーさえコントロール出来るようにすれば……」

キメラトロンの問いかけに対し、そう語るヒドラヒドラの後ろには、巨大な砲台が設置されていた。

「よし、とりあえず即興でもいいからパワー制御システムを完成させろ…盗聴していたところ、あのドラゴンコンボイとかいう奴が一人こちらに向かって来ている」

「試し撃ちの標的ってことかキシャー……了解キシャー！」

早速新兵器の標的が来るということで、デストロン達は嬉々として作業スピードを上げた。

ドラゴンコンボイがデストロン基地目前までやって来たのは、およそ一時間後だった。

「あれがデストロン基地……そしてあれがエレメントジュエリーを使った新兵器だな！よし、トランスフォーム！」

ドラゴンコンボイはステルス機に変形し、その身に炎をまとい出した。炎をまとったドラゴンコンボイはスピードを上げ始める。

「バーニングドラゴンアタック！ク！！！」

最高速度に達したドラゴンコンボイは、正に炎の矢の如く砲台に突っ込んでいく。そのまま砲台を破壊しようというのだ。

「今だ！！撃てえ！！！」

砲台から放たれた赤く太い閃光がドラゴンコンボイの目の前に迫る。

「ま、まさか！あの短時間で完成していたのか！？」

慌てて回避しようとするが、赤いビームは右翼を掠めた。

「うああああアアアッ！！！」

掠めただけだったが、エレメントジュエリーから抽出されたエネルギーは半端ではなく、ドラゴンコンボイを大きく弾き飛ばし近くの森へと叩き落とした。ちなみにこのショックで、盗聴機は破壊されたようだ。

「く……くそっ……！かなりのダメージだ……少し休んで体勢を……」

「休みたけりや休ませてやるぜ、ヒーハー！」

「覚悟…してもらおう」

しばしの休息を取ろうとしたドラゴンコンボイに追い討ちをかけるように、サラマーンとケルピフォースがやって来た。今のダメージで敵う相手ではない。

「く……！万事休す……ってやつかつ……！」

「そついうことさあ」

「……終わりだ……」

サラマーンとケルピフォースのそれぞれの武器、フレイムテイルウィップとメインズランチャーが構えられる。

ドラゴンコンボイには、反撃する力もそのチャンスもなくなっていた。

「死ねえ!!」

迫る攻撃を前にドラゴンコンボイは思わず目をつむった。二度と光を見ることは無いだろうと思いつながら……

「ウオオオオッ!!」

何者かがドラゴンコンボイとデストロン二人の間に体を滑り込ませ、ドラゴンコンボイに放たれた攻撃を防いだ。

「うげっ!!」

「ぐっ!!」

その者はさらに弾丸を放ち、二人を吹き飛ばした。

いつまでもやって来ない痛みを不審に思ったドラゴンコンボイが恐る恐る目を開けると、そこには勇ましい背中があった。

「オーガ…コンボイ…」

「大丈夫か、ドラゴンコンボイ？」

あれから、みんなが背中を押ししてくれたんだ…お前を心配してな」

そう言うとオーガコンボイは、自らの胸からコンボイタイプの証、『エネルギーマトリクス』を出す。

ドラゴンコンボイもまたエネルギーマトリクスを出すと、オーガコンボイからドラゴンコンボイへ、互いのエネルギーマトリクスを橋渡しにパワーを送られる。

パワーを受け取ったドラゴンコンボイは、戦闘可能なまでに回復した。

「ちくしょう、オーガコンボイめ！このままじゃ絶対済まさねえぜ、ヒ―ハー！」

「ドラゴンコンボイ共々……倒す」

「ドラゴンコンボイ、トランスフォーム！」

ドラゴンコンボイはステルス機からロボットモードに変形。

今ここに、戦闘体勢を整えたダブルコンボイが並んだ。

流石に圧巻であり、サラマーンとケルピフォースは一瞬たじろぐ。その隙を二人のコンボイは逃さなかった。

「ドラゴンアックス！」

「オーガロッド！」

それぞれが武器である斧と金棒を手にし、サラマーンとケルピフォースに突っ込む。

サラマーンはフレームテイルウィップをドラゴンコンボイに振るうが、ドラゴンコンボイはウィップを斧で叩き斬り、残った左腕でサラマーンを殴り倒す。

一方オーガコンボイはケルピフォースのメインズランチャーを打ち返し、そのまま金棒でケルピフォースを打ち倒した。

「このまま行くぞ、オーガコンボイ！」

「おう！」

ダブルコンボイは止まることなく突き進む。デストロンにとって、二人のコンボイタイプの爆進は脅威的だ。

やがて二人は砲台のところにたどり着く。

「ヒドラヒドラ！奴らを撃て！」

「無理だキシヤー！さっき一発撃った反動で砲台がイカれてやがるキシヤー！」

「チィ、ならば砲台を守れ！こいつら倒した後で修理すればまた使えるだろう！」

「デストロン、変身だ！」

砲台に集まっていたクロドッグ、インプット、ヒドラヒドラ、キメラトロンは変身しダブルコンボイに攻撃を仕掛ける。

「トランスフォーム！オーガコンボイ、上に乗れ！」

ドラゴンコンボイはステルス機に変形し、オーガコンボイは言われるままに乗った。

「ちょっと熱いけど我慢してくれ！」

バーニングドラゴンアタック!!」

ドラゴンコンボイはオーガコンボイを乗せたまま炎をまとって突進。デストロンの銃撃をもとせず、そのままデストロン陣営に体当たりした。

この攻撃でデストロン達は完全に分裂した。

「いってえ〜、くそ! やってくれたツキ!」

インプットはドラゴンコンボイに銃を構えるが、自分に向かって降ってくる影に気づく。一体なんだと上を向くと、そこにはオーガロッドを振りかざすオーガコンボイの姿が。体当たりの瞬間に飛び上がっていたのだ。

「ぎゃあああああ!」

頭に強烈な一撃を叩き込まれたインプットは、気を失った。

「おのれえ！よくもインプットをツ！キシヤーシャシャシャ！！」

仲間をやられて怒るヒドラヒドラは、オーガコンボイに向けてチョップハンドから弾丸を連射する。オーガコンボイはとっさにオーガロッドで防御した。

「ぬうつ！」

「まだまだア、死ねえオーガコンボイ……」

「ぐほお！！！」

オーガコンボイに気をとられたヒドラヒドラの横腹にステルス機が突き刺さる。勿論ドラゴンコンボイだ。

「横断歩道は左右ちゃんと見ないと事故るぜ！」

「こんな風になあ！！！」

「ぎゃはああアア……」

横からステルス機に跳ねられたヒドラヒドラは、大きく吹っ飛ばされてしまった。

ヒドラヒドラを吹っ飛ばした隙を突き、クロドッグは背後からサーベルでドラゴンコンボイに襲いかかった。

しかし、それもオーガコンボイがさかさずカバーに入り、サーベルを弾く。

「トランスフォーム！ドラゴンアックス！」

瞬時にロボットモードに変形したドラゴンコンボイは、ドラゴンアックスでクロドッグを切りつけた。

「ぐわあっ！！」

ダブルコンボイ、これでデストロン五人抜きだ。

「おのれえ…！！」

ただ一人残ったキメラトロンの前に立つダブルコンボイに、キメラトロンも精神的に少し押されきみだ。

「さあ、エレメントジュエリーを返してもらおうか」

「砲台も破壊する。お前の負けだ！」

「バカな……そう簡単に屈しては……デストロン指導者の名が廃るわあ!!」

瞬間キメラトロンはレオキャノンとカプリキャノン、スネークガンを連射する。

ダブルコンボイは左右に分かれビーム、ミサイル、弾丸を回避していく。

「くたばれえ、くたばれええつ、フハハハハハアア!!」

回避しながら、ダブルコンボイは目配せし合う。アイコンタクトというやつだ。

やがて、意志が通じたのか、互いに頷く。

「口からミサイル！」

「うおっ!!??」

オーガコンボイがミサイルを放ち、キメラトロンの眼前に着弾させた。爆風で視界が遮られ、キメラトロンは一瞬動きを止める。

視界が晴れると、キメラトロンの目には、斧を左手に持ちかえ何やらパワーを右腕に集中するドラゴンコンボイが映った。

「何をするか知らんが、させんぞ!!!」

キメラトロンは両キャノンを前方に向ける。

「おおおおおっ!!!」

しかし、左の死角からオーガコンボイが金棒をキャノンに叩き込み、その狙いを反らす。さらに、ホーンガンによってスネークガンも潰されていた。

「な、何イイ!?!」

それを合図としてドラゴンコンボイも動き出した。右腕にためたパワーを炎に変え、キメラトロンの眼前に迫る。

そして、驚愕するキメラトロんに、ドラゴンコンボイの必殺技が炸裂した!

「ドラゴオン、アツパア

ツ！！！」

《ドガアアアアア

ンツツ！！！》

「グハアアアアア

ツ！！！」

凄まじい爆発音と共にキメラトロンは砲台に吹き飛ばされて衝突。
そのまま砲台も破壊された。

「おい、オーガコンボイ！」

他のサイバトロンの面々だ。どうやら回復したらしい。

「いやー派手にやったね大将……」

「二人で片付けるとは、大したものだイヨーツ」

ビーンズとテングースのコメントだ。まあ、デストロン全員を二人で倒したのだ。驚くだろう。それを尻目にオーガコンボイは指示を出す。

「カバルパ、砲台からエレメントジュエリーを取り出してくれ」

「了解。カバルパ、変身！カパー！」

変身したカバルパは甲羅のハッチからドライバーを取り出し、砲台に向かった。

「Hey！森にいた奴らを連れ出したぜ」

「妖気にやられてゴーストモードになっていたツスよ」

一方、ウィゼルドとマグナムカウは森にいたサラマーンとケルピフオースを引きずってきた。これで、デストロンも全員揃ったわけだ。

「取り出したカパー！」

腕を高らかに上げ宣言するカパルパの手には、赤く光る宝石があった。

それを見て完全勝利を確信したサイバトロンは、勝どきを上げた。

その時、砲台がバチバチと音を立て、ショートし始める。

「爆発するぞ、全員退避だ！ゴーストモード！」

オーガコンボイの合図でサイバトロンは一斉に退避を始める。多くはゴーストモードに、ドラゴンコンボイはステルス機になっていた。

サイバトロンが森に入った瞬間、背後で大爆発が起こった。とうとう砲台が爆発したのだ。

「ア
ッ！！！」

「ギョエ ツ!!」

「ギニヤ ツ!!」

何人かの悲鳴が爆音に混じって僅かに聞こえた。

なんとか大爆発から逃れ、基地にたどり着いたサイバトロン。カパルパは改めて、ドラゴンコンボイにエレメントジュエリーを渡した。

「ようやく回収できた……ありがとう!みんなのおかげだ!」

ドラゴンコンボイは深々と頭を下げる。

「なあーに、いいてことよ!」

「あれ?ビーンズ、お前何かやったカパー?」

「今回、出番も活躍もNothingだったじゃんか」

「うん」

「な、なんだい僕ばかり！じゃあテングースはどうなんだよ！」

「拙僧はせつかく来てくれたゲスト殿を引き立てに回ったのみ。お主のように出しゃばりはせんイヨーツ」

「な、なに　っ!？」

「アハハハ……！」

ビーンズが調子に乗り、それにツッコむ形で笑いあうサイバトロンの達。

そんな彼らを見てドラゴンコンボイは、自分の世界にいる仲間たちや、協力してくれている少年を思い出す。

自分にも、あんな風に笑いあえる仲間がいるなあ……と。

そんなドラゴンコンボイを、赤と白の光が包み始めた。

真っ先に気づいたのはオーガコンボイだった。

「ドラゴンコンボイ、その光は……？」

その言葉で、サイバトロン達は一斉にドラゴンコンボイを見る。よく見ると、ドラゴンコンボイの体がつつすらと消え始めていた。

「この光の感覚は…エレメントジュエリー……シャイニングダイヤモンドとフレイルムルビーの輝き……優也が持つてるはずの物だ……」

「優也って確かお前の協力者の…」

…そうか…お前を迎えに来たのかもな」

それは、即ち別れの時だった。

「ん、ちょっと待てよ？優也って子がシャイニングダイヤモンドとフレイルムルビーを使っているとしたら、ドラゴンコンボイが持つてるやつは……？」

ビーンズの指摘にハツとするサイバトロン達。すると、ドラゴンコンボイが持つエレメントジュエリーにみるみるヒビが入り、やがて完全に砕けてしまった。

「……そうか、ここは異次元で一種の平行ワールド……本来な

かったはずのエレメントジュエリーが現れたが、今同じパワーが重
なったことで、本来無いはずの宝石が砕けたんだ……」

「ドッペルゲンガーとかいう奴かイヨーツ？」

「いや、多分対消滅とかなんとかじゃないカパー？」

「ってことは、僕達のやってきたことは無駄なのかよオ？」

予想外の展開に愕然とするサイバトロン。しかし、その落ち込みは
はすぐになくなった。

「……無駄とは思えないさ……」

ドラゴンコンボイがゆっくりと口を開いた。

「こうしてみんなと出会えたんだ。俺には、無駄とは思えないね」

笑ってそう語るドラゴンコンボイ。その言葉に、誰もが共感した。

そう、短い間だったが共に行動し、共に戦った。その時間は決して無駄とは思えない。

かけがえのない友が出来たのだから……次元をも越えた友が……

ふと、ドラゴンコンボイはオーガコンボイに話しかける。

「それに、一つだけ収穫があったよ」

「収穫？なんだそれは」

「優也に教えてやれるんだ。ドラゴンは空想じゃない、この目で見

た、ってな」

「……フツ……フフ……ハツハツハツハツ……！」

「ハハ……アハハハハハハ…………！」

その言葉にオーガコンボイが笑いだし、つられるようにドラゴンコンボイも笑いだす。

ダブルコンボイが大口を開けて笑う。なかなか見れる光景ではない。

いよいよ光の中のドラゴンコンボイの姿が、かなり薄くなってきた。

別れの時だ。

ドラゴンコンボイは、再度サイバトロン達を見渡す。目に焼き付けるかのようにな……

「じゃあな、魔界のよき戦友達よ……！」

「ああ……元気でな……！」

ドラゴンコンボイが最後に微笑むと、ふわり……とまるで光と同化するように彼の姿は消えた。

彼を包み込んだ白と赤の光は、ゆっくりと空に登っていき、サイバトロン達に見送られながら小さくなっていき、そして、消えた。

ドラゴンコンボイは、自分のあるべき世界へと、戻っていったのだ。

「さらばだ……次元を越えた友よ……」

空を見つめて呟くオーガコンボイ。魔界を戦場とするサイバトロンの達は、次元を越えてやって来た仲間と共に過ごした時間を噛み締めるかのように、しばらく空を眺め続けていた……

紅竜と宝石（後編）（後書き）

テングース「テングースだイヨーツ！

ありがとうドラゴンコンボイ……」

菊一文字「そして烈火竜さん、本当にありがとうございました！」

テングース「ぬわ！？作者菊一文字……！お主が後書きに出てくるとは……」

菊一文字「いやあ、テングースに言わせるより、やっぱり自分から感謝の意を伝えたいからさ」

テングース「せっかく任された拙僧の出番を……ブツブツ……」

菊一文字「ん、何か言った？次回でテングース降板するって？」

テングース「（……！）……い、いえいえ何も……」

菊一文字「冗談だよ。

改めまして烈火竜さん、本当にありがとうございました！！

次回、ゴーストウォーズ

『シビレるほどキレイ女?』

『トランスフォーマーエレメントフォース』の方もよろしくお願
いしますー!」

テングース「ハッ……!結局全部持ってかれたイヨーツ!」

シビれるほどにイイ女?? (前編) (前書き)

少しばかり遅れてしまい申し訳ありません。

とうとうこの小説も掲載開始から一年となりました。今後ともよろしくお願ひします！

では、本編をどうぞ。

シビレルほどにイイ女?? (前編)

広い魔界には、様々な土地環境が点在する。

森や海、川に山、草原などがありサイバトロンとデストロンが戦いを繰り広げている。

今回のお話は、両軍の基地から非常に遠く離れた火山から始まる。

火山の火口付近から、扇状に広がる二本のレーザーが放たれた。レーザーは発射口を中心にして何周も回り、しばらくして消えた。スキャニングレーザーだ。

そしてそのレーザーが放たれるということは……

やはりプロトフォームのポッドがあった。火口の縁に引っかかっていた。

突如、ドーンという大きな爆発音が火山地帯に響き渡り、火山が赤い炎と黒い煙を吐き出す。火山が噴火したのだ。

しばらくすると今度はガシャン、という音が響く。何か噴火に巻き込まれ炎に打ち上げられたあと、地面に落下したのだろうか。

その音の主はマグマによる溶解と落下の衝撃で、元の形を失ったポッドだった。

「キキー！何か面白そうなものないツキか？」

……………お？」

デストロンのインプットは、パトロールのため魔界上空をのびのびと飛行していたが、何かを発見したのか、林目掛けて降下し始めた。

林の中に着地したインプットは、発見した何かに近づく。それは、一匹の怪物だった。巨大なニワトリだが蛇の尻尾を持つ、『コカトリス』という怪物だ。

ここが魔界である以上、怪物がいることに不思議は無い。インプットが近づいたのは、他に理由がある。

「なんで固まっちゃまっているんだ？」

そう、そのコカトリスは硬直しピクリとも動かないのだ。まるで石にでもなったかのように。

叩いても反応はない。ただ、呼吸はしており目もキョロキョロと動いているので生きていると同時に、どうやら脳機能まで完全停止したわけではないらしい。

どうやら体を動かす運動神経だけが麻痺した状態のようだ。

「ふむ…どういふことかサッパリだツキ……」

そうしてインプットは基地と通信を繋ぎ始めた。ヒドラヒドラなら何か分かるかもしれないと思ったのだ。

だが、基地から遠いからか妖気のせいか、ノイズが激しくなかなか繋がらない。

「クソ、クソッ！」

……!」

インプットはしばらく通信を試みたが、何かの気配を感じ咄嗟に飛び上がった。

すると、さっきまでインプットがいた地面に電気の束が命中した。

「な…何者だツキ!」

上空から電撃の飛んで来た方向を見ると、その林の陰から何者かが現れた。その者は上半身が薄暗い緑色の鱗を持つ人間の女で下半身が同じ緑色の蛇体、髪が無数の青い蛇の姿を持つ、『ゴーゴン』だった。

「あらん?きちんと捉えたと思ったのに…屈辱だわ、避けられるなんて……」

インプットにそう話しかけるゴーゴン。言葉とは裏腹に、その表情には余裕の笑みが浮かんでいる。

「そのニワトリ…お前の仕様ツキか!？」

「そつよ…アタイの『目』の虜にしてあげたの……クスクス」

怪しく笑うゴーゴンを見たインプットは、ただ者ではない、と判断した。

「コキヨオオオオ

ッ!!!」

その時、固まっていたコカトリスがニワトリのものとはちょっと違う雄叫びを上げ、羽をばたつかせた。硬直状態が解けたようだ。

復活したコカトリスはゴーゴンに体を向け、並々ならぬ殺気をぶつける。

「あらん?どうしちゃったのかしら?」

それでも余裕の態度を崩さないゴーゴン。

「ま、オイラにはどうでもいいことだツキ」

インプットには魔界の化け物同士の抗争に興味はないし、どちらかにつくというつもりもない。傍観を決め込んでいた。

コカトリスが雄叫びを上げながらゴーゴンに襲いかかる瞬間に、ゴーゴンが見せたものを見るまでは……。

「チャームアイズ、変身！キャハハハハ！」

ゴーゴンが機動音と共に姿を変え人型のロボットとなり、飛び上が

ってコカトリスの突進をかわした。

なんと、このゴーゴンはトランスフォーマーだった。さすがのインブットもこれには驚いた。何の前触れもなかったし、ポッドを見つけたなどという連絡もない。

そう、彼女こそ冒頭の火山に出現したポッドの中身だ。ゴーゴンをスキャンした後、火山の噴火前に脱出していたのだ。

「攻撃的な男も悪くないけど……アンタ好みじゃないの」

空中からコカトリスにそう言うと、変身によって胸に来ていたゴーゴンの顔にある目から、先ほどインブットがかわした電撃を放った。

電撃はコカトリスに命中、コカトリスは先ほどのように、硬直してしまった。

「ゴーストモード!……ふふん」

コカトリスを止めてしまったチャームアイズというトランスフォーマー

マー、悠々とゴーゴンのゴーストモードに戻る。

「インプット、変身！キキー！」

お前、トランスフォーマーだったんだな、キキー！」

インプットは変身し、降下してチャームアイズに近づく。変身したのは自分と同じということをチャームアイズにアピールするためだ。

「どうだ？お前、デストロンに入らないか？」

単刀直入。インプットはチャームアイズに尋ねた。サイバトロンを倒すためデストロンには戦力が欲しかった。相手の動きを一瞬にして止めてしまう能力を持つ彼女は、正にうってつけといえる。

「ん〜、そうねえ……」

チャームアイズは少しばかり思考する……

素振りを見せると目から電撃を放った。どうやらゴーストモードでも放てるらしい。

「ギャアアア!!」

完全に油断していたインプットはそれを浴び、固まってしまった。

「アウア!?アウアウアウア!?」

叫んだ状態で固まったため舌も顎も満足に動かせず、声帯のみで言葉を発するインプット。

「ごめんなさいね?貴方、アタイの好みじゃないの」

チャームアイズは固まったままアウアウ言ってるインプットにそう吐き捨てると、悠々と背を向け尻尾を翻し、林の奥へと消えてしまった。

「ヴァ、ヴァアアアアアアアアア
！！！」

ツッ！！！！

林中にインプットの悲鳴がこだました。

『デストロン基地……応答……せよ……』

通信機からインプットの弱々しい声が聞こえてきた。コカトリスの猛攻を凌いだインプットは林を離れ、やっとの思いで通信した。

「こちらサラマーン、おいおいどうしたんだあインプット？随分弱
ってるみたいじゃねーか」

『でかいニワトリに弄ばれて……』

「はあ？？」

コカトリスを知らないため、インプットとサラマーンの間には誤解が生じているだろう。

『と、とにかく……そこに全員……いるか……？話したいことがあるから……通信……スピーカーに繋いでくれ……』

「あいよ、みんな　！！キメラترون様あ　！！ちよつと来てくれ　！！」

サラマーンの呼びかけに応じ、デストロンが彼の周りに集まる。

「何事かなサラマーン？」

「ニワトリにやられたインプットからみんなに話したいってよ」

代表して尋ねたキメラترونにサラマーンが返答したのはいいが、キメラترونにも誤解が生じた。

通信機のコードをスピーカーに繋ぐとインプットの声がスピーカーから響き出す。デストロン達はそれに耳を傾けた。

『林の方で新しいトランスフォーマーを発見……多分現れたポッドから自分で出てきたんだと思う……そいつは人間と蛇の体を持って髪も蛇の女だ……探してくれ……あとオイラそいつにやられちま

「だから誰か助けてほしい……ウウ……」

「やられた？インプット、そいつに攻撃したのか？なぜ勧誘しなかった！？」

軽率だ、と避難するクロドッグに、インプットは必死で弁明した。

『違う……！勧誘したさ……けどあいつ、好みじゃねーとか言ってオイラを撃ちやがった……ツキ……』

「ではそやつ……既にサイバトロンに……」
「違うな」

クロドッグの発言に割り込んだのはキメラトロンだった。

「おそらくヤツはかなり高慢な女と見た……あくまで自分にふさわしい男とだけ交際するってタイプだな……サイバトロンが接触したとして、易々と手中には落とせまい。ビジュアルの残念な奴らばかりだからな」

キメラトロンの分析に、ウンウンと相槌をうつデストロン。自分達はサイバトロンよりカッコイイと思っっているらしい。

キメラトロンは続ける。

「逆をいえばそれを利用すれば…落とせる可能性があるということだ。まだ仲間に迎えるチャンスはあるぞ…」

「具体的には…どうするキシヤー？」

「高慢な女つてのは、自分に従う男を好むものだ…彼氏というよりは、奴隷のような扱いだがな。」

「いいか、そいつに一目惚れを装いひれ伏すように付き従うのだ。その上でデストロンに来てほしいといえば、満更でもなくなる」

「奴の奴隷に成り下がれということか…」

「まあな、だがデストロンに引き込めればこちらのものだ。あるべき我々の関係性はそのあとで教えていけばいい。一度デストロンとして迎えればサイバトロンはそいつを敵として見る。嫌でも仲間になれんとすれば我々しかいなくなる」

的確な勧誘方法に加え関係性を教えた際の裏切りまで考慮に入れて話すキメラトロン。こうした周到さが彼を指導者たらしめる理由である。

「サラマーンはインプットを回収に行き、残りはその高慢女を探せ
！」

キメラトロンの指示で、早速デストロンは動き出した。

「ふむ…平和ッスね」

山道から魔界を眺め、そう呟いたのはマグナムカウだ。

「今のところデストロンにも大きな動きもなさそうだし……そろそろ帰るッスかねえ」

山道を下り始めたマグナムカウ。しかし、視界にあるものが入り、足を止めた。

「あれは……ケルピフォース……？」

山にはおよそ似つかわしくない水の精ケルピーが、何かを探しているように走っていた。

「戦うより尾行した方がよさそうッスね」

何やらただ事ではないと感じたのか、マグナムカウは後をつけることにした。

山の中なので隠れるところは豊富だ。

しばらくして、突如前にいたケルピフォースが足を止めた。

合わせてマグナムカウも、木の陰に隠れて足を止める。

「こちらケルピフォース……………了解」

どうやらケルピフォースは通信を受けているようだ。しかし、寡黙なケルピフォースは、黙って連絡を受けるだけなのでその内容は推測できない。

「……………？…何の通信ツスカねえ……………」

マグナムカウは、結局動き出すまで待つしかないと判断したその時、「ああ、そうだ」とケルピフォースが通信終了を遮った。

通信を続行させたということは、ケルピフォースがその用件を喋るはずだ。マグナムカウは耳を澄ませた。

「俺は邪魔者を片付けてからそちらに向かう」

「……！」

ケルピフォースはマグナムカウの尾行に気づいていた！

「マグナムカウ、変身！オッス！」

こうなれば強行に出るしかない。すぐロボットモードに変身したマグナムカウは、武器のマグナグローブを両手に装着し木の陰から飛び出した。そして、先手を打たんとケルピフォースに殴りかかる。

ケルピフォースはジャンプしてパンチをかわし、そのままマグナムカウを踏み台にして離れたところに着地、マグナムカウが体勢を崩している隙にロボットモードに変身した。

「く……！そっちが変身する隙に殴るつもりが…読まれたツスね…！」

こちらマグナムカウ…

「ごわっ！…！」

基地に連絡しようとしたマグナムカウに、ケルピフォースのメインズランチャーが炸裂する。

「連絡はさせない…お前はここで始末する」

フィッシュブレードを手に接近するケルピフォース。あくまで通信の手間を作らないつもりだ。

「くっ!!」

マグナグローブとフィッシュブレードを打ち合う両者。力はほぼ互角。しかし、マグナムカウにはある疑問が生まれていた。

マグナムカウは近接戦闘における力は高いが、射撃戦を苦手としている。つまり、ケルピフォースとしては遠くからメインズランチャーで攻撃した方が遥かに有利なはずなのだ。それを捨てて格闘戦に持ち込むことのメリットは、通信を封印することくらい……。

「よっぽど自分に連絡させたくないらしいツスね……」

「……………」

カマをかけてみても流石はケルピフォース。ポーカーフェイスだ。

「ハア!!」

フィッシュブレードを左腕のグローブで受けたマグナムカウは、ケルピフォースの胸に右のパンチを打ち込む。

ケルピフォースは咄嗟にフィッシュブレードでガードするも、そのガードごと吹き飛ばされた。

そして、マグナムカウはケルピフォースから距離をとりながら通信を開く。

「こちらマグナムカウ！誰か応答を…うわ!？」

「援軍は呼ばせん…」

ケルピフォースがメインズランチャーを連射しながら追ってくる。

爆風と木々の破片がマグナムカウを妨害する。そんなにも援軍を呼ばれることを恐れているのか。

違う。マグナムカウには確信があった。ただ単に援軍を恐れるにシては必死過ぎる。間違いなくデストロンは何かで動いていて、ケルピフォースはそれを察知されないために自分を食い止めている感じがする。

『こちら基地のビーンズ！聞こえる!?!マグナムカウ!』

「おお、呼びかけた甲斐があった…うわ！」

再びケルピフォースの剣とマグナムカウのグローブがぶつかり合う。

『うわ、って…大丈夫！？』

「あ、ああ…簡潔に言うツス！デストロンに不審な動きあり！すぐに調べてほしいツス！」

『り、了解！ところで今、マグナムカウはどんな状況！？ガンガンって音が聞こえるんだけど！』

「自分はケルピフォースと交戦中ツス！自分のことはいいから急いで調べてほしいツス！」

『あ…うん、分かったよ！』

「何事だビーンズ！」

「マグナムカウは何てカパー？」

通信を終えたビーンズの元に、オーガコンボイとカパルパがやって

来た。ビーンズの言葉が聞こえてきたらしい。

「オーガコンボイ、カバルパ…デストロンがカクカクシカジカで…
…」

「……なるほど。よし、カバルパ、他にパトロールに出たテングー
スとウイゼルド、ブルーウィスプに連絡してくれ。その後はレーダ
ーでデストロンを見つけ出すサポートを頼む。ビーンズはマグナム
カウの援護に向かえ。俺は一味先に探りに行く」

「了解！」

かくして、デストロンと新トランスフォーマー、そこにサイバトロ
ンも加わり、新トランスフォーマーを巡る争奪戦は苛烈を極めるこ
ととなる。

シビレるほどにイイ女?? (前編) (後書き)

カパルパカパルパだカパー! ああ…ようやく私も後書きに登場してきた……。連絡やメカニツクの柱としてあまり表に出ない地味な力ツパの私ですが今後ともよろしくカパー!

次回、ゴーストウォーズ

『シビレるほどにイイ女?? (後編)』

この小説も開始から一年……早いものだから……」

シビれるほどにイイ女?? (後編)

「おう、インプット。派手にやられちゃったなあ？ニワトリによ…
…ククク」

満身創痍のインプットを発見したサラマーンの第一声がそれだった。通信でインプットはニワトリにやられたと言っていたため、サラマーンはそのニワトリが大きな化け物コカトリスであることを知らない。

「……動き止められた上で化け物に襲われたらこうなるツキ……」

「動きを止められたあ？ニワトリにか？」

サラマーン、変身！ヒーハー！」

サラマーンはインプットを担ぐために変身した。ゴーストモードでは炎を全身に纏っているからだ。

そうしてインプットに近づき、肩を貸してやる。

「例のトランスフォーマーの能力だツキ……あいつが撃ってくる電気に当たるとビリビリッてなって、動けなくなるツキ……」

「へ〜…」

「…基地に戻ったらお前は休め。ニワトリにやられた傷癒すためにな…ククク」

「…お前絶対信じてないだろ」

こうして二人は、一旦デストロン基地へと帰還することにした。

「例のトランスフォーマー…？まさか、新しいポッドが！？」

上空から様子を伺っていたテングースは、思わぬ情報を掴み、早速基地にいるカパルパに連絡した。

「カパルパ！聞こえておるか！？今から言うことをみんなに伝えて

ほしイヨーツ！」

.....

「なるほどねえ……そういうことだったツスね？」

マグナムカウと戦闘を繰り返していたケルピフォースは、突如ニヤニヤしながらそう言った。マグナムカウの前に動きを止めた。

「……どういう意味だ」

「今面白いこと聞かされたツスよ………それで、探し物は見つかったツスか？」

次の瞬間、マグナグローブとフィッシュブレードがぶつかった。

「その様子だと凶星、そしてまだ見つからないようツスね、トランスフォーマー！」

「貴様らサイバトロンには渡さん！まずは貴様を止める！」

「ハアツ！！！」

珍しく焦った様子のケルピフォース。がむしゃらにフィッシュブレードを振り回す。マグナムカウには、大きなチャンスだった。

「隙だらけツス！！！」

ケルピフォースがフィッシュブレードを振りかぶった瞬間、マグナムカウは一気にケルピフォースの懐に飛び込むと右拳による渾身の一撃を彼の腹部に叩き込んだ。

「ぐあっ……！！！」

フィッシュブレードを落とす、腹を押さえ仰向けに倒れるケルピフォース。勝負はついたようだ。

「こつちだつてデストロンに渡す訳にはいかないツスよ。しばらく眠ってもらおうツス！」

ケルピフォースの顔面にパンチを打とうと、弓矢のように拳を引くマグナムカウ。

「眠るのはそつちだ」

倒れていて不利だったケルピフォースが、突如不敵な態度をとった瞬間、胸から放たれたメインズランチャーが、マグナムカウに炸裂した。

「ぐわああ！！」

「俺がああ程度で焦ると思っていたのか？」

ケルピフォースはフィッシュブレードを手に立ち上がり、今度はマグナムカウが仰向けに倒れた。先程と真逆の立場だ。

情報を掴んだことで心理的に有利な立場に立つたと思い込んだマグナムカウだが、ケルピフォースはその上をいていた。心理を逆に利用されてしまったのだ。

「さつき貴様は何と言った……？」

「……隙だらけ、だ」

皮肉を込めたケルピフォースの言葉と共に、フィッシュブレードが降り下ろされる。

「ぬおー！！」

「……！！？」

剣がマグナムカウに当たる前に横からの狙撃を喰らうケルピフォース。

「よお、ウチの仲間になにしてんだ？」

ピストルをケルピフォースに向けるビーンズがいた。

「連絡を受けて駆けつけたか……」

動くなよ。こいつを殺されたくなかったら……」

ドゥーン!!

「ぐあっ!!」

しゃべりきる前に弾丸を受け、吹き飛ばされるケルピフォース。

「バーカ、僕にその作戦は効かないよ。」

…仲間が殺される前に、僕がお前を撃つからね」

そう、最近陰を潜めてはいたが、彼はサイバトロンの名狙撃手であり、早撃ちの達人でもあるのだ。

マグナムカウに近づき、手を伸ばすビーンズ。マグナムカウはその手を掴んで立ち上がった。

「大丈夫？ダメージ大きいんじゃない？」

「いや、平気ッス。それより早くしないと、デストロンに先を越されるッスよ！」

「それじゃあ、僕達も新しい仲間を探しにいくとしますか！」

マグナムカウとビーンズはトランスフォーマーの搜索に乗り出した。

悠々と火山地帯を歩く、一体のゴーゴン。例の、インプットと接触したトランスフォーマーだ。この辺りで彼女のポッドが出現したのだ。

「見つけたぞ……あいつだ」

遠くからその姿を確認した、キメラトロンとクロドッグ。

誰よりも早く発見していた。

「変身してから近づくぞ……仲間であることをアピールせんとな

キメラトロン、変身！グワアオオオ！」

「クロドッグ、変身！ウオーン！」

ロボットモードに変身した二人は、キメラトロンを先頭にゴーゴンに近づく。

ゴーゴンも二人に気づいたらしい。

「どつもどつも、その麗しき貴婦人殿」

キメラトロンがそう言うと、ゴーゴンも満更ではないようだった。手応えありと感じたキメラトロンは、続けて言う。

「私の名はキメラトロン。デストロンの指導者です。貴方は、先程インプのトランスフォーマーに出会いませんか?」

「ええ、会ったわよ。彼もデストロンって言ってた……貴方も私を勧誘するっていうのかしら?」

「恥ずかしながら仰る通りでございます……不躰で申し訳ございませんが、私共は貴方に惹かれたのです。その美しさに、気高く優雅な振る舞いに。どうか、我々と共に来ていただきたい。お願いでございます」

頭を下げるキメラトロン。キメラトロンの言った、下手に出る作戦は順調だった。ゴーゴンのトランスフォーマーもご機嫌なようだ。なので、クロドッグはキメラトロンを信頼し、一緒に頭を下げて態度を合わせることにした。

「……どうしても、アタイに来てほしいのかしら?」

来た!!これはチャンスだ!!そう感じたキメラトロンは即答した。

「はい、まるで蛇のように絡み付く貴方の魅力に我々はもう夢中、

貴方なくして我々デストロンは生きてはいられない!！」

かなり持ち上げるキメラトロン。しかし、ゴーゴンの機嫌はうなぎ登りだ。これは成功したと確信したその時。

「させるか!！」キメラトロン!！」

キメラトロンとクロドッグの足元にミサイルが着弾し、爆発で二人は吹き飛ばされた。

「「ぶわっ!！」」

その隙に、何者かが素早くゴーゴンに近づき、彼女をさらっていった。

「く……おのれオーガコンボイ！ウィゼルド！」

立ち直ったキメラトロンの目線の先には、胸の鬼の口を開きミサイルを準備するオーガコンボイと、ゴーゴンを肩に担いだウィゼルドの姿があった。

「彼女はサイバトロンとして誕生した！お前達デストロンに渡しはしない！！」

そう言って口からミサイルを放つオーガコンボイ。

キメラトロンとクロドッグは左右に跳んで回避した。

「そいつは我々の仲間だ！！」

キメラトロンはカプリキャノンで攻撃。今度はオーガコンボイとウ

イゼルドが跳んで回避した。

「HEY HEY HEY！無粋じゃないかい？女の子いるところにミ
サイルぶちこむなんてよ！」

ウイゼルドが挑発するように言うが……

「オーガコンボイもやっatarou!!」

「う!!」

傷ついたのはオーガコンボイだった。

それを隙とみたキメラトロンとクロドッグは、銃器を連射する。

「ぬわ!!……って連射してくるお前達の方が無粋だろ!!」

「……オーガコンボイ……キャラおかしくないか？」

まあいいや。ちょっと下がって待っててくれ」

妙なことで立ち直るオーガコンボイに突っ込むウイゼルドだったが、
なにはともあれオーガコンボイの復活で勢いを取り戻したと考えた
ウイゼルドはゴーゴンを降ろし、戦列に参加。激しい銃撃戦を展開
する。

その戦いを見ていたゴーゴンは、更にご機嫌になっていた。何故な
ら、この戦いを自分を巡る争奪戦であると解釈したからだ。

(アタイを巡って争いが起こっている…！ああ…美しさって罪…！)

彼女を巡る戦いであることに間違いはないのだが、理由としては斜
め上の考え(妄想)をしていたのだった。

しばらく後、攻撃を続けるキメラトロン、クロドッグの上空から、
ビームと火の玉が降ってきた。

「うわわ!？」

上空を見上げると、テングースとブルーウィスプがそれぞれの武器を構える。

更に、オーガコンボイとウイゼルドの背後に、ビーンズとマグナムカウ、カパルパが現れた。

サイバトロン全員集合、デストロン圧倒的に不利な立場となった。

「諦めるんだなキメラトロン、クロドッグ!」

「く…!ウチの部下は何をやっているんだ!？」

キメラトロンは部下に恵まれないことを嘆いた。

ニワトリにやられたインプ、それを迎えに行ったサラマンダー、牛鬼と小豆洗いに破れたケルピー……。

(ん？一人忘れてるような……)

「ヒドラーヒドラー、変身！キシャー！」

キメラトロン達に向き合うサイバトロンの左方向から、声がしたかと思うと、弾丸の雨が飛んできた。サイバトロンは必死で防御、回避を行う。

「キシャーシャシャシャ！俺様を忘れてもらっちゃあ困るぜえ

……」

チョップハンドを連射し牽制、しかもキメラトロン達を含む二方向からの攻撃に、サイバトロンは警戒を分断せざるを得なくなった。

もたもたしていると他のデストロンも駆けつけるだろう。それはま
ずい。緊迫した空気が辺りを包んだ。

その緊迫を崩したのは、ゴーゴンだった。

「チャームアイズ、変身！キャハハハハ！」

ここでゴーゴンのトランスフォーマー、チャームアイズがロボットモードに変身した。オーガコンボイは、希望に満ちた声で言う。

「加勢してくれるか！ありがたい！」

しかし、チャームアイズからの返事は、ここにいる者の予想全てを裏切った……。

「ええ、但し………」

……彼にね」

両肩に動いた蛇の髪が四方八方を向き、それぞれが弾丸を連射した。つまり、かなりの至近距離で後ろからサイバトロンを攻撃したのだ。

「「「「「うわあああ！！！」「」「」「」

「なに！？」

「どづいうことだ！！」

予想外の事態に慌てたテングースとブルーウィスプは、チャームアイズに武器を向けるが、それよりも早くチャームアイズは腕を突き出し、腕から飛び出した銃口から弾丸を放ち、二人を撃墜した。

「ぐああ!!」

不意打ちでサイバトロン全員にダメージを与えたチャームアイズは、サイバトロンの元を離れ、ヒドラヒドラに近づいた。

「な……なんだキシャー……?」

「アタイはチャームアイズ……あなたはなんて名前……?」

「ヒ……ヒドラヒドラだキシャー……」

「そう……いい名前……」

ねえヒドラヒドラ……アタイ……あなたにもう夢中なの!」

.....

全員「ハアアアアアア

ツ!!!!??」

「え……な、なあ!？」

いきなりターゲットに告白されたビドラビドラ。何がなんだか分からないという感じに焦っている。

「アタイの全てをあげるわ!!ね、アタイを好きにして!!」

「え……なら、えーと……デストロンに入ってくれ……キシャー」

「あなたとなら、どこまでも!」

「……………」

思わぬ事態だった。まさか、ヒドラヒドラに惚れるとは。まさか、あっさりとテストロンに加わるとは……………。

「……………フハハハハ!残念だったなサイバトロン!ほれほれほれ!」

啞然とするサイバトロン達に、ビームとミサイルを撃ち込むキメラトロン。

それに便乗してクロドッグ、ヒドラヒドラ、そしてチャームアイズも、攻撃を加えていく。

「うおっ……く、全員退却だ！」

ペースを狂わされたところに猛攻を受け、サイバトロンは退却した。

「キャハハハハ！！キャ ハハハハハハハハ！！」

チャームアイズの狂ったような笑い声を背に受けながら……。

……

「反対だッキー！」

デストロン基地でチャームアイズを紹介されたインプットはそう叫んだ。

「こんなロクでもない女なんかお断りだツキ！」

「まあまあ、堪えろってインプット」

「断固反対ツキー！」

サラマーンがなだめようとするが、聞く耳を持たないインプット。

インプットは最初にチャームアイズと会った時、攻撃され、二ワトリにやられたこともあり、彼にとって彼女の印象は最悪だった。

「うるさいわね……もっっ！！」

その態度に業を煮やしたチャームアイズは、インプットに電撃を放った。

「あがあああああ……！」

……アウア！アウアウアウア……！！」

「調子に乗るんじゃないわよ坊や」

哀れ、インプットは痺れさせられてしまった。さらに、動けないのをいいことに、足蹴にされている。

「チャームアイズ……あまりやり過ぎないでやれキシャー」

「はい……ヒドラヒドラ様……」

ヒドラヒドラに言われ、コロッ態度を変えるチャームアイズ。

「……なんか俺もあいつ嫌い……」

「同感だ……」

インプットと同じく今新しい仲間を紹介されたサラマーンとケルピ
フォースは、その仲間の態度にため息をついた……。

新キャラクター

伏兵チャームアイズ

デストロン。上半身が薄暗い緑色の鱗を持つ人間の女で下半身が同
じ緑色の蛇体、髪が無数の青い蛇の姿を持つ、ゴーゴンをスキャン。
自惚れが強く、自分を誰よりも美しいと思っている。また、腹黒い
面もあり、「キャハハハハ！」と狂ったように笑う。ヒドラヒドラ
に一目惚れしデストロン入りした。初対面時に麻痺させられたイン
プットからは強く嫌われており、犬猿の中。気まぐれで自己中心的
な思考が強いためあまりよく思われていないが、ヒドラヒドラの言
うことは必ず聞くのでそれを利用すれば扱いやすいとキメラトロン
は考えている。ヒドラヒドラにとっては極めて忠実なコマ。

変身は下半身の蛇体が前後で割れたあと前部分はさらに関節が現れ
ロボットモードの足に、後ろ部分は背中を伝ったのち真つ二つに割
れ、上半身の人間の上腕を覆うように装着。その後ゴーストモード
の顔が胸に来て蛇の髪は二分され両肩に、その跡にロボットモード
の頭部が残る。

武装は両腕の蛇の装甲が開いて現れる二砲身の銃アームガン（両腕に装備）、ヒドラヒドラのチョップハンドと同様に肩の蛇を操り弾丸も吐き出せるヘアズハンド、最大の特徴でもある胸にあるゴーストモードの目から放つ、標的を少しの間麻痺させる電気ショックを放つフィクスアイ。フィクスアイはゴーストモードでも放つことができる。

シビれるほどにイイ女?? (後編) (後書き)

チャームアイズ「キャハハハハ！アタイが噂のイイ女、チャームアイズよ。ヒドラヒドラ様のために、アタイは戦うわ！

全国の男達、アタイの優雅にして華麗な活躍に、期待するといいわ！

次回、ゴーストウォーズ

『犬神パニック!?!』

多分更新は年内に出来ないだろうからみんな、よい年末をお過ごし遊ばせ！キャハハハハ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7579o/>

ゴーストウォーズ 超生命体トランスフォーマー

2011年12月8日23時51分発行